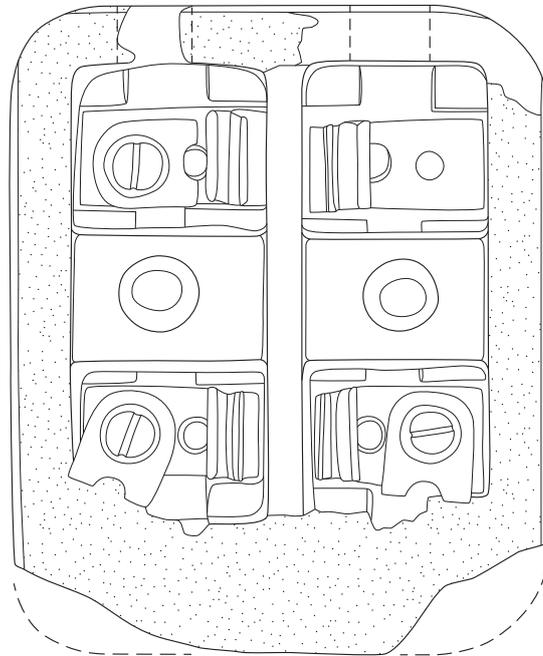


愛知県東海市

令和2年度（2020年度）

た さ やま こう しゃ ほう じん ち あと  
太佐山高射砲陣地跡確認調査報告2



安全器(等倍)

2022年

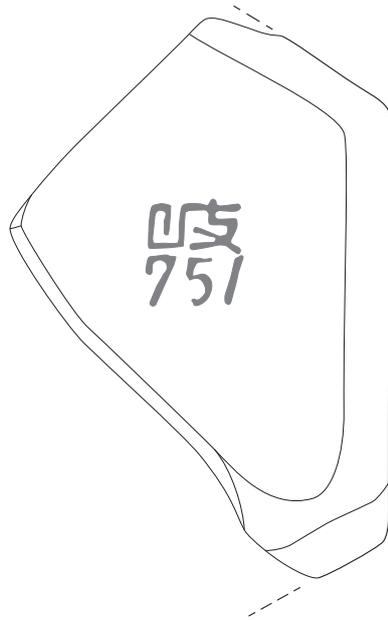
愛知県東海市教育委員会



愛知県東海市

令和2年度（2020年度）

た さ やま こう しゃ ほう じん ち あと  
太佐山高射砲陣地跡確認調査報告2



磁器(1.5倍)

2022年

愛知県東海市教育委員会





太佐山全景 新池(手前)から北東方向を望む ドローンからの撮影



炊事場跡 竈跡検出状況 ドローンからの撮影



中隊事務所跡 北から 全体確認状況 ドローンからの撮影



中隊事務所跡 北西から 平坦地2 コンクリート片確認状況 ドローンからの撮影



中隊事務所跡 安全器検出状況



中隊事務所跡 西から 竈跡検出状況



01 安全器



03 磁器



表採遺物



新発見文書

## 序

本市は知多半島の付け根に位置し、北は名古屋市と接し、西は伊勢湾に面しています。かつては、農業と漁業を主とした知多半島の典型的な村落でした。しかし、太平洋戦争末期になると、名古屋市南部の工場地帯を空襲から防衛するための高射砲陣地が本市に築かれました。同様の高射砲陣地は名古屋市とその周辺の様々な場所に築かれたようです。その後、これらの陣地は戦後75年以上の歳月が過ぎる中で多くが開発などによって失われました。

その中で、本市の太佐山高射砲陣地跡は、現在まで陣地全体が残されている希少な例です。この太佐山高射砲陣地跡は緑陽公園予定地内に位置することから、その詳細な情報を把握するため、令和2年度に陣地中心部の確認調査を実施しました。その後、周辺に残る兵舎跡などについても追加の確認調査を実施し、陣地全体が良好な状態で残っていることを確認しました。

今後、本書が地域の歴史研究に活用され、戦争遺跡や埋蔵文化財への理解を深める一助となれば幸いです。

なお、調査に際しては、地元の皆様ならびに関係者、関係諸機関より多大なる御理解、御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

令和4年（2022年）3月

愛知県東海市教育委員会  
教育長 加藤 千博

## 例 言

1. 本書は愛知県東海市名和町太佐山(たざやま)、膳棚(ぜんだな)に所在する太佐山高射砲陣地跡(たざやまこうしゃほうじんちあと)の確認調査報告書である。
2. 本調査は、太佐山高射砲陣地跡確認調査として、東海市教育委員会が実施した。調査に際しては、株式会社四門名古屋支店に「太佐山高射砲陣地跡確認調査業務委託(その2)」として業務委託の上、実施した。
3. 本事業は、現地での確認調査を令和3年2月1日から同年3月10日まで実施した。一次整理作業(出土遺物の洗浄など)・二次整理作業(実測作業や資料分析)は、令和3年8月10日から株式会社四門清須支店(愛知県清須市)において確認調査報告書の作成作業と同時に行い、本書の刊行をもって終了した。

調査面積は以下のとおりである。

測量面積	10,400㎡
------	---------

4. 現地調査は、東海市教育委員会社会教育課統括主任宮澤浩司・主事早川由香里の監督の下、株式会社四門清須支店主任調査員樋田泰之および坂野俊哉、現場代理人・施工管理技士山田文彦、測量技師樋田(兼任)が担当した。
5. 調査の実施にあたり、東海市都市建設部花と緑の推進課、東海市立名和中学校、名古屋市教育委員会、株式会社磯部組など関係各位の御協力を賜った。
6. 調査および報告書作成にあたっては、伊藤厚史氏(名古屋市教育委員会)にさまざまな助言および協力を頂戴した。ここに記して御礼申し上げる次第である。
7. 今回の確認調査は、北出巧・神野攻一・鈴木智恵・高塚健らの尽力によってなし得たものである。
8. 一次・二次整理作業および出土遺物の実測・デジタルトレース作業は、伊藤眸・清水香枝・藤森紀子・植松早苗・嶋田育世の協力を得た。
9. 発掘現場および出土遺物の写真撮影は、樋田泰之、坂野俊哉が行なった。
10. 今回出土した遺物、作成した図面、写真などの記録および各種資料はすべて東海市教育委員会で保管している。
11. 本書は、宮澤と早川の監督の下、樋田が編集した。執筆分担は以下のとおりである。

第1章第1節、第3章～第4章第1節の一部：宮澤浩司(東海市教育委員会)

第1章第2節～第2章(第2章第1節の一部を除く)、第4章第2節・第3節：樋田泰之(株式会社四門)

第2章第1節の一部、第4章第1節の一部：坂野俊哉(株式会社四門)

## 凡 例

1. 調査記録の方位及び座標は、国土交通省告示に定められた国土座標の平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、世界測地系(測地成果2011)にて表記している。メートル(m)単位での表記を基本とする。
2. 標高は全てT.P.=東京湾平均海面高度による。
3. 土層の土色に関しては『新版標準土色帖』(2019年版)を用いた。
4. 本書で使用する遺構は、遺構記号や遺構番号を用いず遺構の性格での表記とした。  
遺物番号は遺物実測図の通番を基本に、地点上げ遺物の場合は出土地点を表す「d」を先に記し、そのあとに通し番号を付した。なお、番号は第1次調査(令和2年度実施)から継続してd-045からd-066まで採番した。
5. 遺構図や遺物実測図の縮尺は、個々の図に表示してある。遺物の出土分布図に関してはその種類によって縮尺が統一されていない場合もあるが、各図に表示した。
6. 参考文献は必要に応じて本文脚注などに記したものもあるが、巻末にも目録として一括して掲載した。

# 目 次

巻頭図版

序

例言・凡例

第1章 調査の経緯と遺跡の環境	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 遺跡の位置と地理的歴史的環境	2
第3節 太佐山高射砲陣地跡における既往の調査	4
第4節 調査の方法	13
第5節 調査経過	14
第2章 太佐山高射砲陣地跡の調査	17
第1節 遺構	17
第2節 出土遺物	50
第3章 まとめ	53
第1節 太佐山高射砲陣地跡確認調査の意義	53
第2節 太佐山高射砲陣地跡の保存に向けて	56
第4章 巻末資料	60
第1節 新発見資料の紹介・検討	60
1 新資料発見の経緯	60
2 太佐山高射砲陣地跡地の払い下げに関する一例について	61
第2節 各種参考資料	74
1 出土遺物の検討	74
2 新発見資料所収の記録図面と実際の太佐山高射砲陣地跡との比較	79
3 笠寺陣地の調査事例の紹介	85
4 太佐山高射砲陣地跡関係略年表	91
第3節 取得データの活用	95
1 デジタルデータの活用について	95
引用・参考文献	102
図版・写真図版	

## 挿 図 目 次

第 1 図	太佐山高射砲陣地跡の位置	1	第 32 図	見晴台遺跡第 50 次 竈全景	44
第 2 図	周辺遺跡配置図	3	第 33 図	見晴台遺跡第 50 次 竈平面図	44
第 3 図	太佐山周辺軍事施設等配置図	5	第 34 図	元隊員・中村修治氏の証言図(部分)	47
第 4 図	大府飛行場配置図	8	第 35 図	陶製陶磁器 岐 751(参考)	50
第 5 図	空襲標的のマップ	8	第 36 図	新発見文書	60
第 6 図	太佐山高射砲陣地跡	9	第 37 図	S18-0032	62
第 7 図	名和陣地(照空隊)配置図	9	第 38 図	S18-0478	65
第 8 図	名和陣地跡現況	9	第 39 図	S18-0479	65
第 9 図	平山陣地配置図	10	第 40 図	木製井桁砲床説明圖	67
第 10 図	平山陣地跡現況	10	第 41 図	第 4 砲座検出状況 南西より	67
第 11 図	太田川陣地(照空隊)配置図	10	第 42 図	第 1 砲座伐開後の様子	67
第 12 図	聚楽園旅館宿舍配置図	11	第 43 図	第 6 砲座伐開後の様子	67
第 13 図	聚楽園旅館跡現況	11	第 44 図	S20-0042	68
第 14 図	伊勢湾に臨み知多沿岸第一の勝地 風光明媚聚楽園全景	11	第 45 図	S20-0126	69
第 15 図	太佐山高射砲陣地跡遺構全体図	12	第 46 図	S20-0202(関係分)	70
第 16 図	太佐山高射砲陣地の構築モデル	17	第 47 図	S20-0228	71
第 17 図	兵舎跡 3 現況	17	第 48 図	砲座部分調査風景(第 1 次)	71
第 18 図	太佐山高射砲陣地跡 遺構全体図	19	第 49 図	S20-0229	72
第 19 図	中隊事務所跡平面図	20	第 50 図	低圧碍子(JES 規格)	74
第 20 図	兵舎跡 1 平面図	25	第 51 図	S20-0066	79
第 21 図	兵舎跡 2 平面図	27	第 52 図	第 2 次調査平面図	83
第 22 図	兵舎跡 3 平面図	29	第 53 図	見晴台遺跡第 28 次 兵舎跡平面図	86
第 23 図	兵舎跡 4 平面図	31	第 54 図	笠寺陣地兵舎遠景	86
第 24 図	元隊員・中村修治氏の証言図(部分)	32	第 55 図	笠寺陣地兵舎近景	86
第 25 図	兵舎跡 5 平面図	33	第 56 図	見晴台遺跡第 28 次 兵舎跡 南から	87
第 26 図	兵舎跡 6 平面図	35	第 57 図	見晴台遺跡第 31 次 風呂場跡 北西から	88
第 27 図	被服庫跡平面図	37	第 58 図	見晴台遺跡第 31 次 風呂場跡平面図	89
第 28 図	弾薬庫 2 平面図	39	第 59 図	笠寺陣地 復元図	90
第 29 図	弾薬庫 1 平面図	40	第 60 図	Metashape 作業画面	96
第 30 図	炊事場跡平面図	41	第 61 図	炊事場跡の竈跡(3次元モデル)	97
第 31 図	竈跡イメージ図	44	第 62 図	炊事場跡の竈跡(3次元モデル)	99
			第 63 図	中隊事務所跡の竈跡(3次元モデル)	101

## 付 表 目 次

第 1 表	既刊報告書一覧	4	第 5 表	生産者登録番号(岐阜県内組合別・戦中)	76
第 2 表	東海市にあった戦争遺跡	11	第 6 表	生産者登録番号(岐阜県内組合別・戦後)	77
第 3 表	遺構一覧表	49	第 7 表	各遺構平坦地の空間規模	85
第 4 表	生産地記号・組合一覧表	75			

## 巻頭図版目次

巻頭図版第 1	太佐山全景 炊事場跡 竈跡検出状況	巻頭図版第 3	中隊事務所跡 安全器検出状況 中隊事務所跡 西から 竈跡検出状況
巻頭図版第 2	中隊事務所跡 北から 全体確認状況 中隊事務所跡 北西から 平坦地 2 コンクリート片確認状況	巻頭図版第 4	01 安全器 03 磁器 新発見文書

## 図版目次

図版第 1  
図版第 2

実測図 (1)・遺物観察表  
実測図 (2)・遺物観察表

図版第 3～図版第 8  
図版第 9～図版第 10

遺構写真  
遺物写真

## 第1章 調査の経緯と遺跡の環境

### 第1節 調査にいたる経緯

太佐山高射砲陣地跡は愛知県東海市名和町に所在する(第1図)。東海市遺跡分布地図には本遺跡は記載されておらず、いわゆる埋蔵文化財としての扱いはこれまで受けて来なかった。しかしながら、地元住民を中心にこの高射砲陣地跡は周知されており、戦争遺跡について取り上げた既往の文献にも紹介されていることから、いわゆる周知の埋蔵文化財包蔵地と言える状況であった。

太佐山高射砲陣地跡について最初に取り上げたのは、地元の郷土史家である池田陸介氏(故人)である(第1章第3節参照)。氏の熱心な活動により

太佐山高射砲陣地跡の存在は少しずつ一般に知られるようになっていった。他方、太佐山高射砲陣地跡を含む一帯は緑陽公園予定地として昭和53年(1978年)に都市計画決定を受けたため、開発が制限された。このため遺構が破壊されるようなこともなく良好な保存状態を保つこととなった。

その後、近年緑陽公園の整備が本格化する中、太佐山高射砲陣地跡が第2期整備区域内に含まれることが明らかとなった。その取扱いについて公園整備部署である花と緑の推進課を含めた市内部で協議を重ねた結果、市内に残る数少ない戦争遺跡であり、平和学習に資することもできることから現地で保存する方向となった。その際に課題となったのは高射砲陣地跡の残存状況である。用地測量などの図面は作成されているものの不明瞭な点が多く、埋蔵文化財レベルでの測量図化と遺構の確認調査が求められた。このため教育委員会では太佐山高射砲陣地跡の測量図化と、遺構の残存状況確認を目的とした範囲確認調査を実施することとした。そこで、令和2年(2020年)6月から10月にかけて陣地中心部の確認調査(第1次調査)を実施し、砲座や地下式掩体などが良好に残存していることを確認した。

この第1次調査において課題として残ったのが陣地周辺に広がる兵舎跡などの遺構群であった。現地観察によって、陣地中心部同様、残存状況が良好である可能性が高いことが明らかとなり、兵舎跡などの遺構も高射砲陣地の構成要素として欠くことができないことから、陣地周辺部についても追加の調査の必要性が生じた。このため、兵舎跡などの測量図化を目的とした追加調査を行うこととし、太佐山高射砲陣地跡確認調査業務委託(その2)として、令和3年(2021年)1月27日付け



第1図 太佐山高射砲陣地跡の位置

で株式会社四門名古屋支店と業務委託契約を締結し、陣地周辺部の測量調査を主とした第2次調査を実施することとした。現地調査は2月1日から着手し、社会教育課職員の監督の下、測量調査のための樹木伐開から着手した。繁茂する竹林に難渋しつつも3月12日に現地調査を終了した。

その後、令和3年度(2021年度)に報告書作成作業に着手し、本報告書の刊行に至ったものである。

## 第2節 遺跡の位置と地理的歴史的環境

太佐山高射砲陣地跡は、知多半島北部西岸の伊勢湾に面した丘陵上に立地する。地質的には知多半島北部丘陵地に広く分布する鮮新世の常滑層群布土累層上層に属し、主に砂・粘土～シルト層の累重からなり、薄い火山灰層・亜炭層・礫層を挟む。

標高は44mと周辺の丘陵と比べて10m程高く、伊勢湾を隔てた鈴鹿・養老山脈や名古屋市南部から猿投山方面までを一望にすることのできる地である。

このあたりは名古屋市南部と東海市の境を流れる天白川の河口の南部に位置し、一帯は古代から「あゆち潟」と呼ばれる干潟が広がっており、名古屋市南部にかけて多種多様な遺跡が展開する(第2図)。

高射砲陣地跡付近の遺跡としては、名古屋市緑区大高から東海市名和町にかけて所在する菩薩遺跡が知られている。縄文時代～中世にわたる大規模な集落遺跡で、縄文期の土偶や水神平式～山中式の弥生土器、須恵器・灰釉陶器、木製品等が出土している。

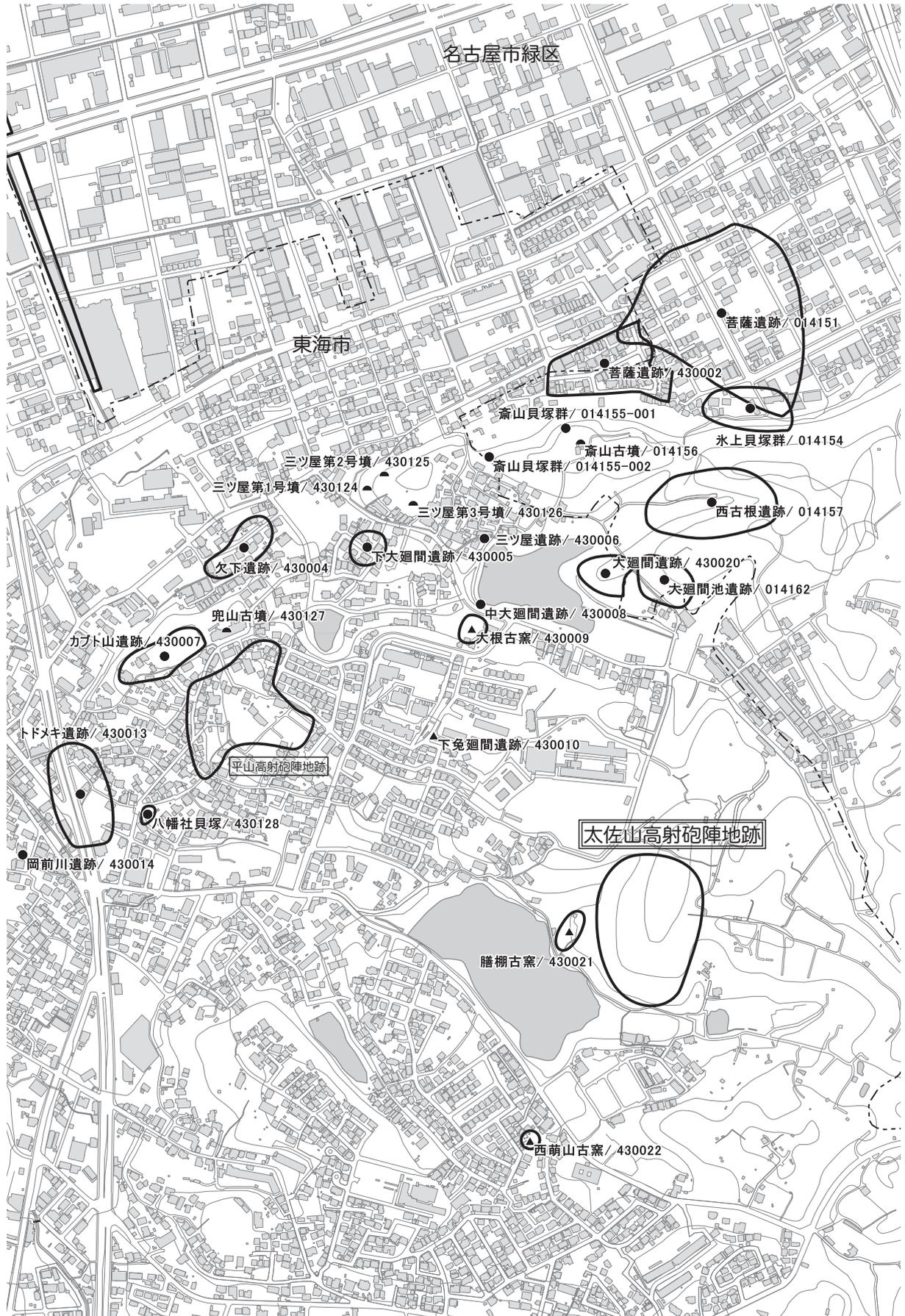
また、トドメキ遺跡は沖積低地に位置し、白鳳期の古代寺院の存在を窺わせるような大量の瓦や鷗尾片しびが出土した遺跡であり、弥生～古墳期の土器や木製品も大量に出土している。

菩薩遺跡の南側丘陵上には齋山古墳いつきやまが、続く南西側丘陵上には兜山古墳(4世紀末、滅失)やカブト山遺跡(弥生時代後期～古墳時代)がある。稲荷社の鎮座する齋山古墳からは古墳時代前期の円筒埴輪や朝顔形埴輪が採集されており、兜山古墳からは古墳時代前期の三角縁神獸鏡や石釧などが出土しており、齋山古墳に先行する古墳である。また近くの丘陵端部には名和古墳群(三ツ屋古墳群)と呼ばれる後期古墳群があり、1号墳では古墳時代後期(6世紀前半)の横穴式石室や須恵器群が確認されている。

近くには熱田神宮の創建に関わる水上姉子神社ひかみあねごや、日本武尊と宮簀媛みやずひめの伝説地などもあることから、尾張氏との関わりが深いとされる地域である。

他に、古墳時代の遺物散布地である大廻間池遺跡や西古根遺跡なども存在するほか、平安～鎌倉期の山茶碗窯である膳棚古窯ぜんだな(太佐山高射砲陣地跡太佐山高射砲陣地跡範囲に隣接している)、大根古窯おおねなどの中世陶器生産遺跡も存在している。

太佐山高射砲陣地跡は、太平洋戦争末期の昭和19年(1944年)10月に、名古屋港沿岸にある三菱重工業大江工場をはじめとする諸軍需工場の防衛や、敵の伊勢湾からの上陸をも想定し構築された。陸軍の名古屋防空隊は、上野町大字名和(当時)周辺の候補地を検討し眺望の得られる太佐山を選定した。陣地構築は名和の長光寺を宿舎として同年10月初旬に開始され、早くも10月下旬には九九式八糶センチ高射砲6門を山頂に引き上げ、据付けまで完了したと記録にある。翌年8月15日の敗戦に伴い作戦資料などは焼却処分し、12月には米軍による陣地重要部および火器の爆破処



第2図 周辺遺跡配置図(遺跡名の後ろの番号は、愛知県の遺跡番号である。)

理などを経て、配備兵は復員の途についたと言われる。

一般に高射砲陣地は戦闘空間（砲座・指令所・中隊長小隊長位置・観測班・通信班など）と生活空間（兵舎・炊事場・井戸・風呂場など）で構成されるが、大都市及びその近郊に構築されたケースが多いため、陣地全体が残存している例は稀である。太佐山高射砲陣地跡は、丘陵上の戦闘空間から丘陵中腹～裾部に展開する兵士たちの生活空間が一続きの遺構群として残存している極めて稀少な遺跡である。

### 第3節 太佐山高射砲陣地跡における既往の調査

太佐山高射砲陣地跡はこれまで周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていないが、名古屋高射砲隊の陣地（第3図・第6図）の一つとして知られてきた。陸軍による接収の後、戦後民間に払い下げられて私有地に戻っていたが、早い時期から公園予定区域に含まれたこともあって大規模な開発は行われてこなかった。こうして数ある名古屋高射砲陣地の中で唯一、破壊を免れてきた<sup>註</sup>。

太佐山高射砲陣地跡の近隣に住んでいた郷土史家の池田陸介氏（1924～2017）は、戦時中、名古屋高射砲隊の「いぶき隊」観測班（汐止陣地：名古屋市港区潮風町）所属であったこともあり、宅地化などで失われていく戦争遺跡の記録保存やその大切さを訴え続けていた。地元の人たちにも半ば忘れ去られていた太佐山高射砲陣地跡についても平成2年（1990年）夏に再確認し、同時に名和陣地（照空隊）（第7図・第8図）、平山陣地（第9図・第10図）、連隊本部（聚楽園旅館：平成3年（1991年）解体）（第12図・第13図・第14図）、太田川陣地（照空隊）（第11図）の調査や、地元名和地区の空襲による罹災状況調査なども積極的に行なっている。

池田陸介氏とともに「戦争遺跡研究会」のメンバーであった伊藤厚史氏（名古屋市教育委員会文化財保護室）も太佐山高射砲陣地跡の踏査を行ない、もう一つの高射砲陣地跡でもある見晴台遺跡の報告書（1992）他で言及されている。また、平成15年（2003年）には独自に陣地跡に残された遺構全体の測量調査を実施し、全て手測りにて遺構全体図（第15図）を作成した。その精度は今回の調査で得られた測量結果とも遜色ないものであり、陣地跡調査の基礎資料となっている。

戦後75年を迎えた令和2年（2020年）6月から10月にかけて、緑陽公園整備事業に先立つ事前調査として、陣地跡のうち砲座など戦闘空間部分の残存確認を行なうために地形測量及び部分的な発掘調査を行ない、その成果として報告書を刊行した。

今回の調査は、陣地跡のうち兵舎跡等生活空間部分の範囲確認を行なうための調査であり、第1次調査と合わせて陣地全体を把握することを目的としている（既刊報告書は第1表）。

調査年次	調査	書名	発行機関	編集機関	発行年
令和2年度	第1次	太佐山高射砲陣地跡確認調査報告	東海市教育委員会	株式会社四門	令和3年（2021年）
令和2年度	第2次	太佐山高射砲陣地跡確認調査報告2（本報告）	東海市教育委員会	株式会社四門	令和4年（2022年）

第1表 既刊報告書一覧

註：山本達也氏（四日市市教育委員会）の教示によると、伊勢神宮防衛の目的で三重県宇治山田市（現・伊勢市）に昭和16年（1941年）頃配属されていた大阪師団の宇治山田防空隊のものとみられる八八式七糎野戦高射砲砲床1基・砲側弾薬置場3基（いずれもコンクリート製）が残っていたが、令和3年（2021年）7～8月の緊急調査後に宅地造成工事のため破壊された。この中村町高射砲陣地（離宮予定陣地・宇治山田中隊陣地とも）は昭和20年（1945年）2月に名古屋高射砲隊の所管に代わり、九九式八糎高射砲が3門置かれたと考えられる。



呼続陣地(照空隊分隊)

笠寺陣地  
(いすゞ隊・あそ隊)

鳴海陣地(照空隊分隊)

鳴尾陣地(照空隊分隊)

八ツ屋陣地(照空隊分隊)

長草陣地

大府(知多・上野)飛行場

寺本陣地(照空隊分隊)

富田陣地(照空隊分隊)

吉川陣地

名和陣地(照空隊分隊)

太佐山陣地  
(てんりゅう隊)

木の山陣地(照空隊分隊)

連隊本部(聚楽園旅館)

聚楽園陣地(照空隊分隊)

太田川陣地(照空隊大隊・分隊)

柴田陣地  
(あさま隊)

潮見陣地(照空隊中隊・分隊)

九号地陣地(照空隊分隊)

平山陣地  
(なから隊)

長光寺(宿舍)

○ 軍事施設

○ 軍需工場など

株式会社名古屋航空機  
製作所飛行場

港陣地  
(くは隊)

第3図 大佐山周辺軍事施設等配置図

0 1000m  
(1:30,000)

第1章 調査の経緯と遺跡の環境

番号	企業・工場名	所在地	主要製品	備考
1	住友金属工業 名古屋軽合金製造所	名古屋市港区千原町の割	鋳造部品・圧延管・航空機材料・ジュラルミンを原料とする鋳造品	
2	熱田蒸気発電所	名古屋市熱田区図書町	発電	熱田火力発電所とは別所在地
3	金城鑿岩機（さくがんき）製造	名古屋市南区江戸町	削岩機・弾丸・銃剣	
4	航空部品小工場群と繊維工場	名古屋市南区呼続町	航空機部品製造・繊維	
5	住友電気工業 名古屋製作所	名古屋市南区呼続町窪	超硬質合金切削工具・砲弾弾帯 SM 線製造	近藤紡績所跡地
6	東海電極製造 名古屋第3工場	名古屋市南区戸部下	炭素製品製造	
7	新家（あらか）工業	名古屋市南区呼続町	自転車リム製作	
8	三菱重工業 名古屋航空機製作所 道德工場	名古屋市南区図書町	100 式司令部偵察機組立	日清紡績を転用
9	東海電極製造 名古屋第3工場	名古屋市南区図書町	炭素製品製造	
10	東海電極製造 名古屋第2工場	名古屋市南区荒浜町	炭素製品製造	
11	名古屋螺子（らし）製作所 本社・名古屋工場	名古屋市南区呼続町見取	航空機用螺子・工作機	
12	新家（あらか）工業	名古屋市南区呼続町	自転車リム製作	
13	名古屋港木材倉庫	名古屋市南区笠寺町加福	貯木	
14	豊国機械工業 笠寺工場	名古屋市南区笠寺町	?	
15	岡本工業 笠寺工場	名古屋市南区笠寺町字立脇	航空機機体、制動機、降着装置、車輪	
16	東洋冷却器	名古屋市南区笠寺町	自動車用ラジエーター	旧名・東洋ラヂエーター製作所
17	東野（たかの）精密工業	名古屋市南区笠寺町	信管・照準器	
18	中央発條（はつじょう） 鳴海工場	鳴海町汐田	航空機用ばね、機関銃用ばね、自動車用ばね	ワシノ精機大府（大高）工場の可能性もあり
19	矢作製鉄	名古屋市港区東築地町	鉄鋼	
20	大同製鉄 築地工場	名古屋市港区東築地町・龍宮町	航空機部品、発動機部品、高射砲	
21	東邦電力 名古屋火力発電所	名古屋市港区大江町	火力発電	
22	特殊軽合金 名古屋工場	名古屋市港区大江町	鋳造、鍛造、圧延	
23	三菱重工業 名古屋航空機製作所	名古屋市港区大江町	海軍機・陸軍機生産	
24	浦賀船渠 名古屋造船	名古屋市港区昭和町	造船	
25	矢作水力 名古屋東火力発電所	名古屋市港区昭和町	火力発電	1939 年廃止
26	大同機械製作所 昭和工場	名古屋市港区昭和町	機械加工	
27	矢作製鉄	名古屋市港区昭和町	鉄鋼	
28	矢作水力工業部 電気化学工場	名古屋市港区昭和町	?	
29	矢作水力工業部	名古屋市港区昭和町	水酸化ナトリウム	旧・昭和曹達
30	三菱重工業 名古屋航空機製作所 大江工場	名古屋市南区星崎町	?	※「identification is doubtful」と攻撃目標地図に付されている為、記載間違いか。
31	大同製鋼 大江工場	名古屋市南区星崎町中切	航空機部品、発動機部品、高射砲	
32	大同製鋼 宝生工場	名古屋市南区宝生町	航空機部品、発動機部品、高射砲	
33	大同製鋼 星崎工場	名古屋市南区星崎町繰出新田	航空機部品、発動機部品、高射砲	
34	名古屋合板	名古屋市港区船見町	合板	
35	王子製紙	名古屋市港区船見町	製紙	
36	缶詰工場	上野町名和	缶詰	
37	三菱重工業 名古屋航空機製作所 大高工場	大高町中坪	飛龍機械部品、水力方式部品、金属板	大日本紡績を転用 中島飛行機の可能性もあり
38	豊田製鋼	上野町荒尾	鉄鋼	
39	小型ポンプ・油圧装置製造工場	名古屋市港区新船町	小型ポンプ・油圧装置	
40	航空部品小工場群	名古屋市港区新川町	航空機部品製造	日本飛行機株式会社の工場？
41	愛知航空機 築地工場	名古屋市港区築地町	航空機	
42	日産化学工業	名古屋市港区築地町	化学肥料	
43	日本車両製造 鳴海工場	鳴海町柳長	貨物列車	

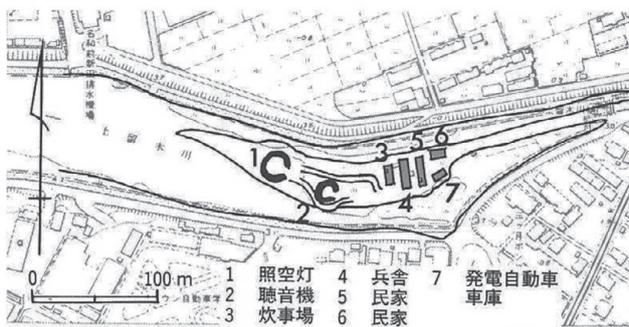
記号	名称	備考	記号	名称	備考
イ	名古屋市電 野立築地口線		リ	名古屋鐵道 築港線外側線	
ロ	名古屋市電 築港線		ヌ	名港貯木場	
ハ	名古屋市電 東築地線跡	1940 年廃線	ル	加福貯木場	
ニ	名古屋鐵道 常滑線		ヲ	8 号貯木場	
ホ	国有鐵道 東海本線		ワ	名古屋教育水族館跡	山田才吉建設 1935 年閉館
ヘ	名古屋鐵道 東部本線	旧・愛知電気鉄道	カ	国有鐵道 名古屋港（みなと）線	
ト	名古屋市電 大江線		コ	名古屋市電 築地線	
チ	名古屋鐵道 築港線		タ	名古屋鐵道 知多線	旧・知多鐵道

第3図付表 軍需工場・その他施設





第6図 太佐山高射砲陣地跡 (1946年米軍による空撮写真に加筆トレース)

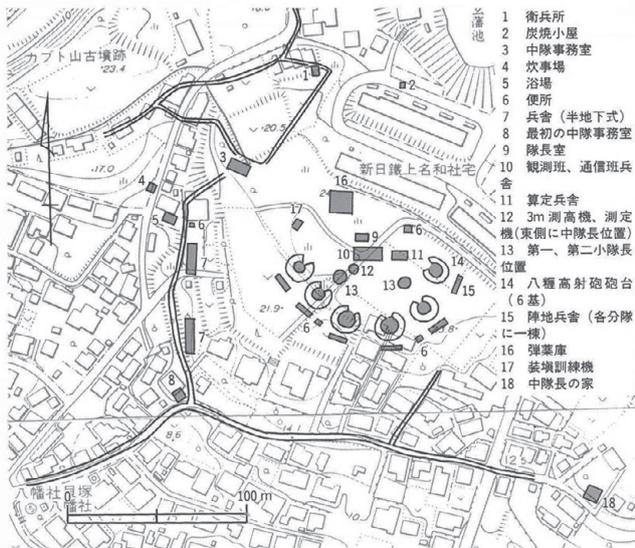


第7図 名和陣地(照空隊)配置図  
第7図は伊藤厚史(1992)より



第8図 名和陣地跡現況

第1章 調査の経緯と遺跡の環境

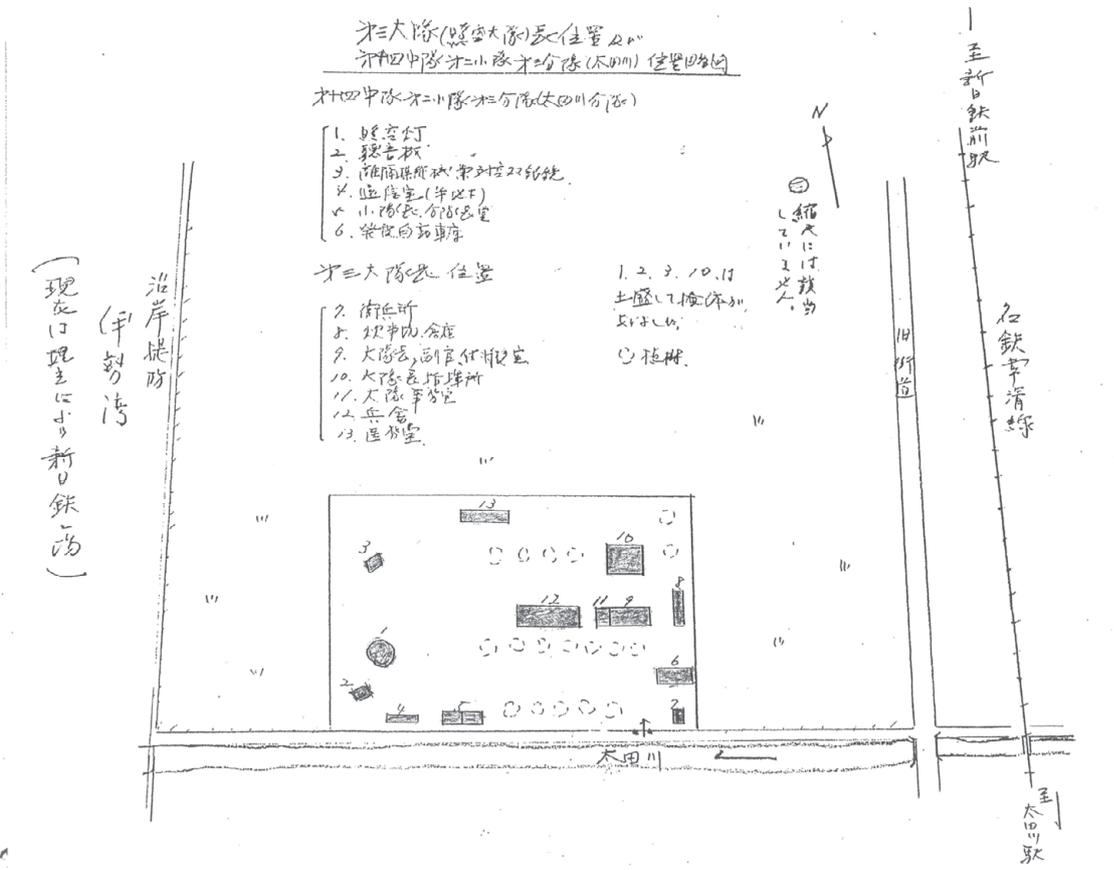


第9図 平山陣地配置図

第9図は伊藤厚史(1992)より

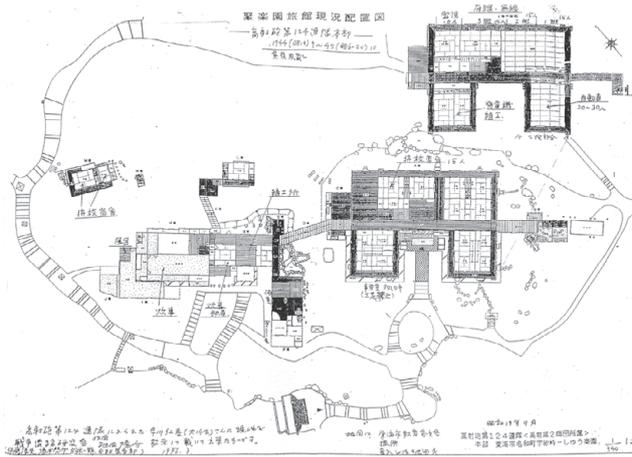


第10図 平山陣地跡現況



第11図 太田川陣地(照空隊)配置図

第11図は田村栄吉郎(発行年不明)より



第12図 聚楽園旅館宿舍配置図

第12図は田村栄吉郎(発行年不明)より  
(手書きの文字は池田陸介氏による)



第13図 聚楽園旅館跡現況



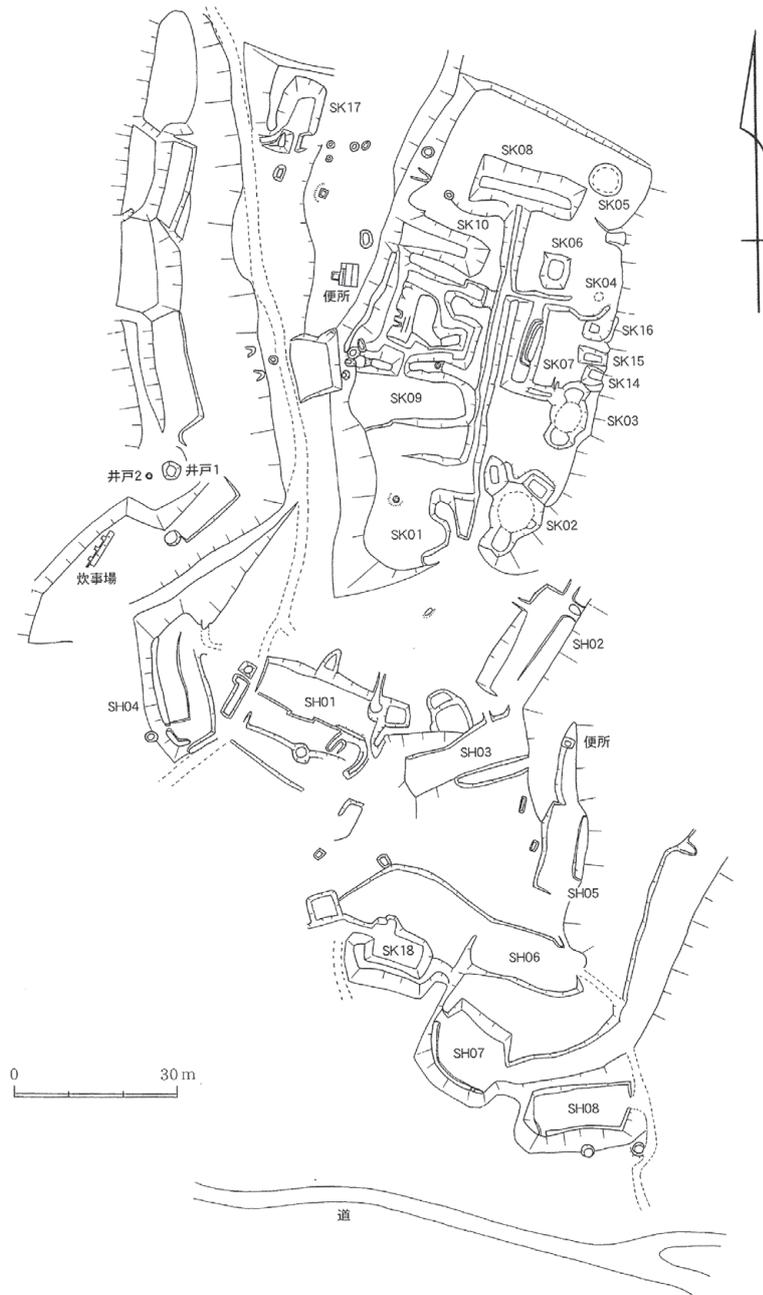
第14図 伊勢湾に臨み知多沿岸第一の勝地 風光明媚聚楽園全景

第14図は聚楽園大佛事務所(発行年不明)より

名称	陣地名	通称名	所在地	現状	残存状況	備考
高射砲第124聯隊本部			東海市名和町砂崎	旧旅館 聚楽園公園	滅失	昭和19年9月以降
高射砲第7中隊	太佐山 (名和)	てんりゅう	東海市名和町膳棚、太佐山	山林 緑陽公園	残存	8高、6門
高射砲第9中隊	平山 (名和)	ながら	東海市名和町平山	荒地、宅地	滅失か	8高、6門、昭和20年5月大府・吉川へ移転
第124聯隊第3大隊本部	太田川	はやぶさ	東海市大田町浜新田	工場、宅地	滅失	
照空第14中隊第4分隊	太田川		東海市大田町浜新田	工場、宅地	滅失	大隊本部と同じ
照空第14中隊第5分隊	聚楽園		東海市荒尾町西丸山	畑地	滅失	
照空第14中隊第6分隊	名和		東海市名和町北三日月	土留木川中州	一部残存	
照空第16中隊第1分隊	富田		東海市富木島町向イ	富木島中学校	滅失	
知多(大府)飛行場		上野飛行場	東海市・大府市	道路、宅地	滅失	三菱重工業の建設

第2表 東海市にあった戦争遺跡

第2表は樋田ほか(2021)のうち伊藤厚史氏作成表を加筆修正した。



第15図 太佐山高射砲陣地跡遺構全体図

第15図は伊藤厚史(2004)より

〈参考文献〉

- ・『東洋第一 上野山 大佛殿(絵葉書)』(発行年不明)聚樂園大佛事務所発行
- ・伊藤厚史「第5章 名古屋高射砲隊の概要 第5節名古屋高射砲陣地の構造」『見晴台遺跡発掘調査報告書—近代編—』1992 名古屋市見晴台考古資料館
- ・池田陸介・伊藤厚史ほか『愛知の戦争遺跡ガイド 愛知・平和のための戦争展実行委員会』1997 戦争遺跡研究会
- ・『愛知県の主な軍部隊と軍施設記録集』(発行年不明) 田村栄吉郎
- ・伊藤厚史「名古屋高射砲隊・てんりゅう隊陣地跡について」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第6号 2004 名古屋市見晴台考古資料館
- ・岩脇彰・山本達也「伊勢神宮と宇治山田防衛隊」『三重の戦争遺跡〔増補改訂版〕』2006 三重県歴史教育者協議会
- ・『東海軍管区の防空陣地』2017 清水啓介
- ・『明日へ—今、伝えたい戦争のこと—』2021 東海市の戦争を記録する会
- ・樋田泰之ほか『令和2年度太佐山高射砲陣地跡確認調査報告』2021 東海市教育委員会
- ・山本達也「三重の軍事遺跡8 伊勢市中村町の高射砲陣地について」『軍装操典』145号 2021 全日本軍装研究会

## 第4節 調査の方法

今回の調査は、公園整備に先立つ範囲確認調査である。今回の調査は、発掘に伴うものではなく、測量調査が主となるため、グリッドの設定は行わなかった。

遺跡記号については、太佐山(TZY)とし、令和2年度(2020年度)の2回目の調査であるためTZY20-2とした。遺構名については、遺構の性格での標記とし、伊藤厚史氏の調査<sup>1</sup>と混同を避けるようにした。

重要遺物に関しては、測量調査の性格上すべて表面採集であるが、地点上げ遺物扱いとして、第1次調査からの通し番号としてd-045から始まる番号を付し、トータルステーションを用いて出土地点を記録した。このd番号は遺物観察表と実測図でも共通して使用している。

各地点では、デジタルカメラを用いて記録撮影を行ない、並行してドローンを用いての記録撮影も行なった。使用したドローンは、DJI社製「Mavic Mini」である。

出土遺物の洗浄・実測など整理作業は、調査終了後に行なった。



## ドローン仕様

DJI社製 Mavic Mini

有効画素数：1200万画素

全長：245×289×55mm

重量：199 g

スマートフォンアプリ「DJI Fly」で操作

(使用スマートフォン：apple社製 iPhone12 Pro)



遺物整理の様子(遺物洗浄・遺物実測)

1：「名古屋高射砲隊・てんりゅう隊陣地跡について」伊藤厚史『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第6号  
名古屋市見晴台考古資料館 2004

## 第5節 調査経過

太佐山高射砲陣地跡確認調査業務委託(その2)は、令和3年(2021年)1月27日に株式会社四門名古屋支店と業務委託契約を締結し、翌28日に着手した。

主な作業工程は以下のとおりである。

1月末に仮設事務所プレハブを設置し、調査は2月1日から開始した。まず調査地の現況は放置され繁茂した竹林であり、立ち入りすら困難な状況であったため、測量時の視界確保目的で、調査区北西部の中隊事務所跡・兵舎跡4周辺から竹木の伐採作業を開始し、2月26日まで南東方向へ伐採作業を展開した。伐採した竹木は、測量の妨げにならないように兵舎跡等の各平場の中央部に積み上げて集積するようにした。

ある程度伐採作業が進んだ段階で2月24日から測量作業を並行して開始し、3月9日に完了した。

各遺構は、適時デジタル一眼レフカメラを用いて写真記録を撮るとともに、トータルステーション・電子平板及び測量ソフト「遺構くん」を用いて測量記録を行なった。また、出土した遺物の量は、整理コンテナで2箱で、全て昭和時代以降の遺物である。

伐採作業中の2月11日及び、測量完了後の3月10日の2回に分けて、伊藤厚史氏(名古屋市教育委員会文化財保護室)に遺構範囲の指導・確認をいただいた。

その後、3月12日に仮設事務所プレハブを撤去し、全ての現場作業を終了した。その後、株式会社四門清須支店において図面編集等の1次整理作業を実施し、3月31日付けで成果品の納入を行なった。

その後令和3年度(2021年度)には2次整理作業及び報告書作成のため、令和3年(2021年)8月6日付けで株式会社四門名古屋支店と業務委託契約を締結したのち、8月10日から株式会社四門清須支店において作業を開始した。遺物の一次洗浄から開始し、実測・デジタルトレース・遺物写真撮影を行なった。その後、報告書本文執筆や図版作成、編集・印刷・製本等の作業を翌令和4年(2022年)3月31日までに行ない、本書の刊行に至ったものである。

### 太佐山高射砲陣地跡確認調査(その2)作業体制

現場監督員	宮澤浩司・早川由香里(東海市教育委員会社会教育課)
調査員(主)	樋田泰之(株式会社四門 清須支店主任調査員)
調査員(副)	坂野俊哉(株式会社四門 清須支店主任調査員)
調査補助員(整理作業)	伊藤 眸(株式会社四門 清須支店調査員)
施工管理技師	山田文彦(株式会社四門 文化財事業部文化財調査課)
計測員	樋田泰之(株式会社四門 清須支店主任調査員)(兼任)
ドローン操縦者	田中雄大(株式会社四門 文化財事業部文化財調査課)
発掘作業員	北出 巧・神野攻一・鈴木智恵・高塚 健
整理作業員	清水香枝・藤森紀子・植松早苗・嶋田育世

《調査日誌抄録》

令和3年(2021年)

1月28日(木):曇(15℃:以下カッコ内は当日の最高気温)仮設事務所プレハブ及び仮設トイレ設置。仮設事務所内電気工事。調査区のおおよその範囲を色テープで囲う。清須支店より道具類搬入。

1月29日(金):曇(10℃) 作業者がすぐに着手できるように伐採作業を先行して行なう。

1月30日(土):曇(6℃) 同上

1月31日(日):晴(6℃) 同上

2月1日(月):晴(11℃) 新規雇用入場者教育(3名)。中隊事務所跡・兵舎跡3より伐採・集積作業開始。中隊事務所跡から電源ソケット1点出土。

2月2日(火):晴(14℃) 伐採・集積作業。兵舎跡3北側から北東方向へ炊事場へ続くと思われるスロープを確認した。

2月3日(水):みぞれのち晴(6℃) 伐採・集積作業を一時中断し、伐採予定の竹木に対してスプレーによるマーキングを行なう。

2月4日(木):曇(6℃) 兵舎跡2及び便所2周辺の伐採・集積作業を行なう。

便所2周辺には、大量の蜜柑の枯木が投棄されており、除去に努めた。浅い掘り込みが2か所ほど確認できた。

2月5日(金):曇のち晴(11℃) 中隊事務所跡・兵舎跡2の伐採・集積作業を行なう。中隊事務所跡南側から南西方向へ向かうスロープを確認した。

2月6日(土):晴(15℃) 中隊事務所跡・兵舎跡2・兵舎跡4・兵舎跡5・弾薬庫2の伐採作業を行なう。中隊事務所跡・兵舎跡3の間から南西方向へ向かうスロープを確認した。

2月8日(月):晴(10℃) 中隊事務所跡・兵舎跡2・兵舎跡4・兵舎跡5・弾薬庫2の伐採・集積作業を行なう。

2月9日(火):晴(8℃) 兵舎跡1・兵舎跡4・弾薬庫2の伐採・集積作業を行なう。弾薬庫2から西側32mの位置でコンクリート製の土留めを確認した。遺構が調査区外にも広がっている可能性が高いことが判明。

2月10日(水):曇(11℃) 兵舎跡4・兵舎跡5の伐採・集積作業を行なう。

2月11日(木):曇(14℃) 名古屋市教育委員会伊藤厚史氏来跡。遺構が当初の想定より広がる可能性がある、との指摘。

2月12日(金):曇(15℃) 兵舎跡5・便所2の伐採・集積作業を行なう。基準点測量実施。

2月15日(月):雨のち晴(15℃) 午前、雨のため現場作業中止。兵舎跡5の伐採・集積作業を行なう。

2月16日(火):曇(9℃) 兵舎跡5・弾薬庫2の伐採・集積作業を行なう。水準点測量実施。

2月17日(水):曇(8℃) 被服庫跡・弾薬庫2の伐採・集積作業を行なう。

2月18日(木):曇時々雪(5℃) 被服庫跡・炊事場跡の伐採・集積作業を行なう。炊事場跡の西側でコンクリート製の基礎を確認した。

2月19日(金):晴(9℃) 炊事場跡の伐採・集積作業を行なう。昨日確認したコンクリート製基礎のほかに、3か所でコンクリートの破片が散布していることを確認した。

2月22日(月):晴(21℃) 兵舎跡1・兵舎跡6の伐採・集積作業を行なう。

2月24日(水):晴(11℃) 兵舎跡1の伐採・集積作業を行なう。兵舎跡1の遺構測量。



第1章 調査の経緯と遺跡の環境

- 2月25日(木):曇時々晴(13℃) 新規雇用入場者教育(1名)。中隊事務所跡・炊事場の伐採・集積作業を行なう。中隊事務所跡・兵舎跡1・兵舎跡2の遺構測量を実施。
- 2月26日(金):雨のち曇(10℃) 中隊事務所跡・炊事場跡の伐採・集積作業を行なう。伐採・集積作業は完了。中隊事務所跡の遺構測量を実施。
- 3月1日(月):晴(18℃) 各遺構及び太佐山全体のドローンによる写真記録を行なう。中隊事務所跡の遺構測量を実施。
- 3月2日(火):雨(16℃) 雨のため作業中止。
- 3月3日(水):晴(13℃) 中隊事務所跡・兵舎跡3・炊事場跡・井戸の遺構測量を実施。
- 3月4日(木):曇(15℃) 兵舎跡4・兵舎跡5・便所2の遺構測量を実施。
- 3月5日(金):曇のち雨(14℃) 兵舎跡5及びその西側の遺構測量を実施。降雨のため、15:00で作業終了。
- 3月8日(月):雨のち晴(14℃) 被服庫跡・弾薬庫2の遺構測量を実施。
- 3月9日(火):晴(14℃) 兵舎跡6・被服庫跡の遺構測量を実施。測量作業完了。
- 3月10日(水):晴(17℃) 名古屋市教育委員会伊藤厚史氏来跡。
- 3月11日(木):晴(18℃) 仮設事務所内電気撤去工事。
- 3月12日(金):曇のち雨(12℃) 仮設事務所プレハブ及び仮設トイレ撤去。本日にて、現場における全ての作業を完了

8月10日(火):株式会社四門清須支店にて発掘データの整理作業・報告書作成業務を開始。

令和4年(2022年)

3月31日(木):本書刊行。



兵舎跡2 北西から  
(上段:作業前状況  
下段:作業後状況)

## 第2章 太佐山高射砲陣地跡の調査

### 第1節 遺構

#### 1 陣地跡の基本構造

太佐山<sup>1</sup>は標高45m程の低山であるが、周辺の丘陵が35m前後の標高であることから、高射砲陣地建設場所に選定された。現在でも、名古屋港方面や名古屋高速4号東海線からの眺望によって、その立地環境を確認することができる。

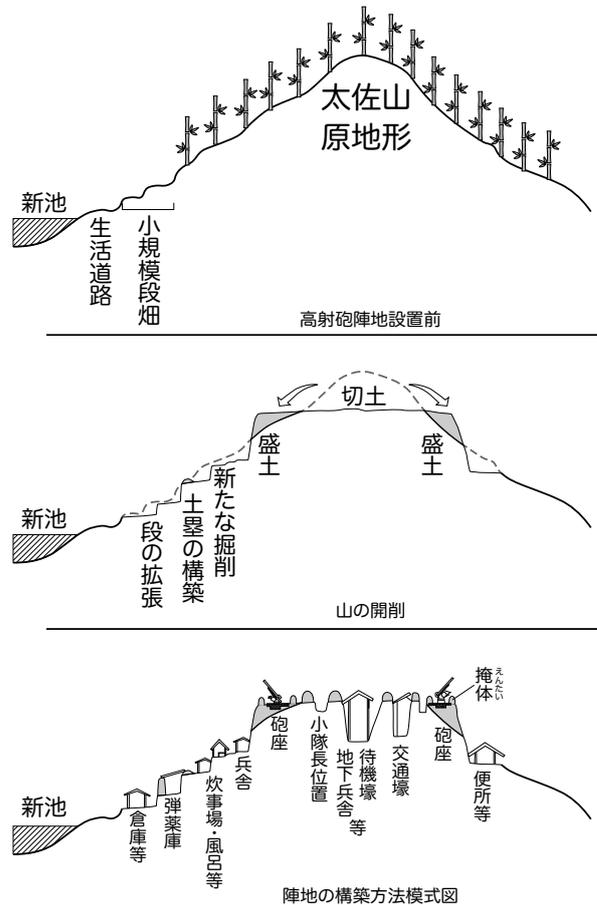
陣地跡の現状について、多くの部分は竹林で覆われ一部は蜜柑畑となっているが、一次調査と前後して、大廻間池方面からの道路周辺は緑陽公園整備の工事が開始されている。

今回の二次調査は山腹に展開した陣地における生活空間の測量調査であったが、その過程で得られた知見や現地住民の証言などから、陣地構築の大まかな様子を知ることができたので、模式図(第16図)を用いて説明する。

太佐山の尾根部分(砲座を中心とした戦闘空間)の構築方法に関しては一次調査の報告書で述べたので省略するが、新池に続く南側斜面では主に兵士たちの日常生活に関する諸施設が構築された。

戦前から近隣に住んでいた住民の証言によると、農業用溜め池である新池の周囲には以前から生活道路があり、そのすぐ北側の斜面には2段ほどの小さな段畑が存在していた。

踏査の結果いちばん標高が低く新池の生活道路に近い段畑に関しては少なくとも一段が残存しており、今回「兵舎跡6」と呼称する平場は、この畑地の一段上に存在する状況などから、既存の段畑を加工して構築された可能性が高い。またこれらとは別に、更にもう一段上がった西側には被服庫として使われていた平場が存在し、尾根道からは等高線に沿った回廊状の通路(平場)で繋がっ



第16図 太佐山高射砲陣地の構築モデル



第17図 兵舎跡3現況

1: 太佐山の呼称については、現在の字名としては「たざやま」であるが、名和地区の住民の多くは「たさやま」と呼称している。

ていた。その西北側には当初弾薬庫として構築された遺構(南側は分厚い土塁を壁として構築)が造られていた。

これらの兵舎跡は、太佐山の山頂から南側の新池に向かって下って行く尾根道の一部を通路として取り込み、主に尾根道の西側斜面を開削して構築されている。尾根道の東側は斜面が急なことから、比較的狭い平地(兵舎跡1・4など)が造成されていた。原地形を考えると、「兵舎跡2」は尾根斜面を直接開削して構築されたものと思われる。

これらとは別に、北からの主要道路西側には小規模な谷地形が認められ、段畑状に平地が複数段構築されている。「兵舎跡3」から更に一段下がったところに5基の焚き口を持った煉瓦積みの竈跡が残存する平地があり、隣接し北東にやや下がったところに残る井戸(2基)とともに炊事場として機能していた。竈の残欠と思われるものは平地の南西と南側にも確認され(竈跡1～3)それぞれに煉瓦や炭、板ガラスなどの集積がみられた。記録によれば最初の炊事場は規模の拡大のために取り壊されて現在の位置に再構築されたとのことであり、竈跡1と2が当初のものであろう。竈跡3に関しては構造がやや不明確だが、浴場または洗面所として機能していた可能性が高い。

なお炊事場跡および井戸跡から更に下がった西側には大小2つの小規模な溜め池跡(約5×10mと約6×12m)が残っており、元地主から聴取した話などから、戦後は農業用に利用されていたようだが、原形は陣地開削時に造られたものである可能性が高い。(坂野俊哉)

今回の調査は、遺跡の全体像を把握するための測量調査が主目的であったため、発掘作業は伴わなかったものの、各遺構の平坦地を造り出すうえで地山を大規模に切り開いていることが観察できた(第17図)。

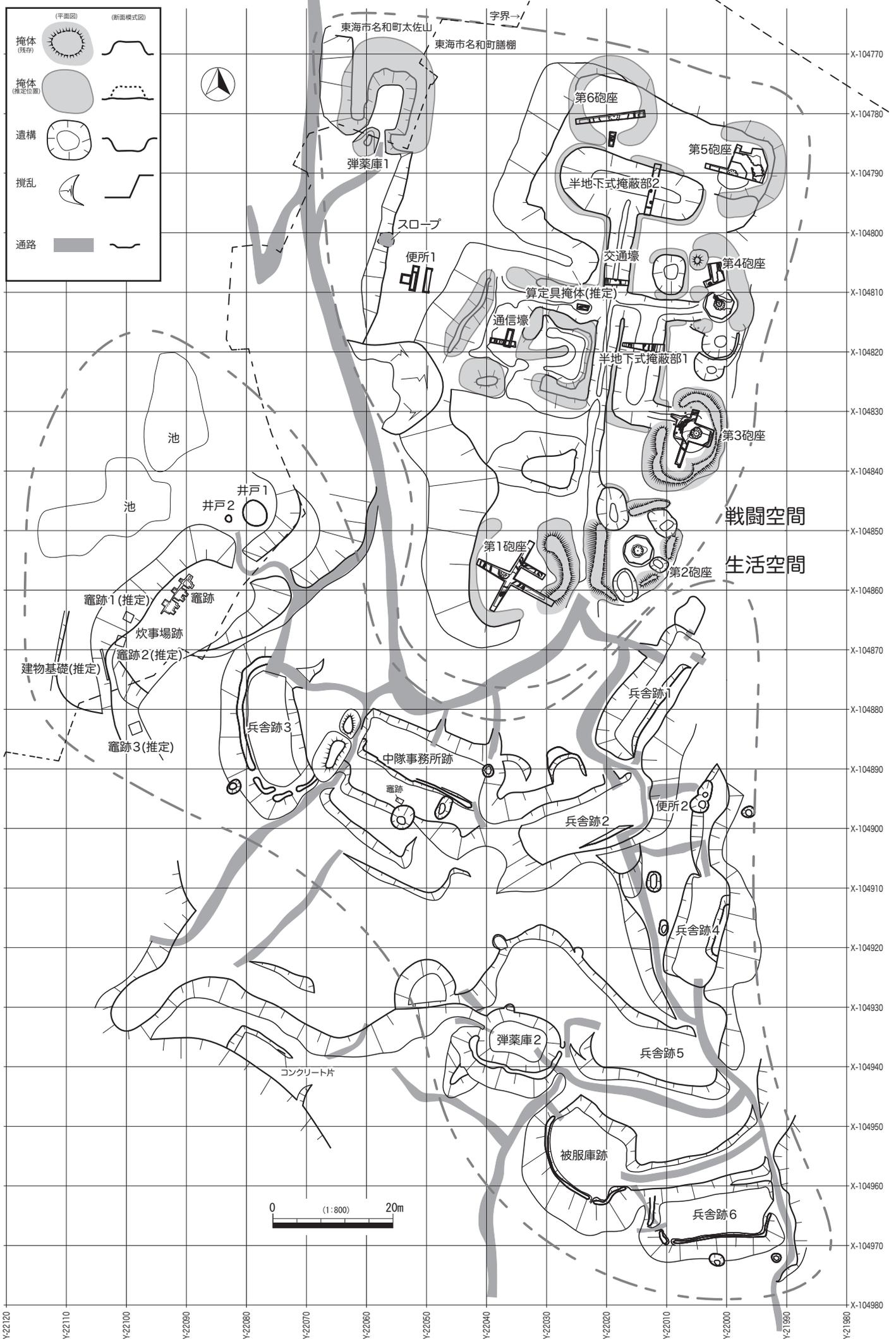
前回調査した砲座や通信壕・交通壕などが丘陵のピークにあたる標高42～45mに位置(砲座自体の検出レベルは42.5m前後)し、一段下がった西側に便所1が39m、さらに一段下がって弾薬庫1が33mで確認されているが、今回の調査は第2砲座に南接した兵舎跡1の北側で42mを測り、一番南に位置する兵舎跡6の裾にあたる20mの高さまで比高差が22m程もあった。

## 2. 遺構の表記について

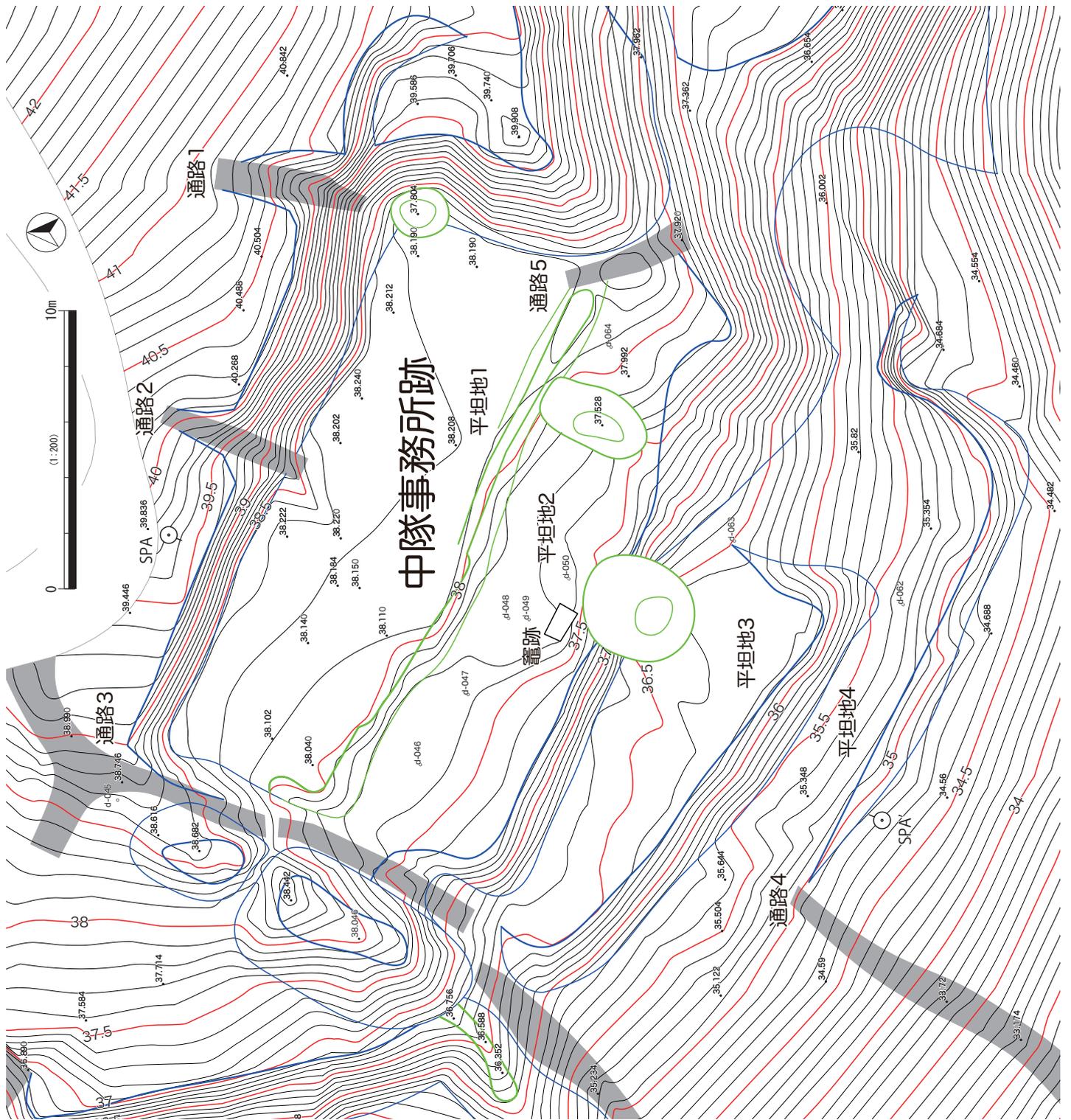
遺構名の表記・遺構の性格については、伊藤厚史氏による調査報告(2004)(以下伊藤報告(2004))を参考とした。同書では遺構記号+遺構番号の表記を基本としているが、第1次調査同様、今回の調査でも、戦争遺跡という特殊性も鑑みて文化庁の定めた遺構記号では表現しきれない部分もあることから、遺構記号や遺構番号での表記を行わず遺構の性格での表記とした。

## 3. 遺構について

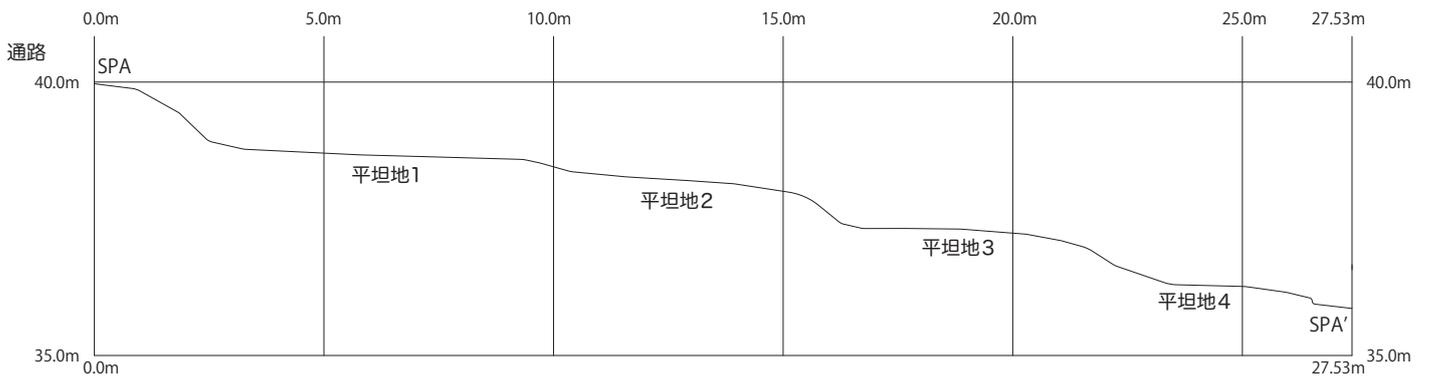
今回の調査では、陣地のうち生活空間にあたる部分の調査である。ここでは、①兵舎跡群(丘陵の南側の山腹に展開する造成面(平坦地)部分)と、②炊事場跡(丘陵の西側の一段低い部分)に分けて記述する。遺構の面積についても記述したが、斜面上部を含めた大まかな範囲での面積であるので、平坦地の面積も併記した。この平坦地の面積が、兵士一人当たりの生活空間の面積などを算定するための指標となれば幸いである。



第 18 図 太佐山高射砲陣地跡 遺構全体図



中隊事務所跡エレベーション図 西より



第 19 図 中隊事務所跡平面図

## ①兵舎跡群

兵舎跡群は、太佐山高射砲陣地の中でも丘陵の南側に位置し、緩やかな斜面を開削して平坦地を設けるとともに、それぞれの平坦地を繋ぐための兵士一人通れるくらいの通路が設けられている。また、兵舎群の南西には弾薬庫が1基設けられ、兵舎群の東側には土坑が2基連なった状態で確認された。後者は便所と思われる。

平坦地を繋ぐ通路については、地山を大きく削平して「造られた」通路と、人が同じ場所を何度も歩くことで地面が踏み固められて自然発生的に「作られた」通路の2種類が存在する。

また、今回の調査の中で測量の前にあらかじめ踏査をしてから伐採範囲を決めて作業を行っていたが、当初の作業計画(5,420㎡)に入っていなかった中隊事務所の南側や弾薬庫2の西側へも念のために範囲を広げて踏査を行なったところ、コンクリート製の土留めが見つかったことや、他にも斜面を開削して平坦地を造作した箇所も見られたこと等から陣地開削が及んだ範囲は想定より広がっていたと考えられ、今回の確認調査は全体で10,400㎡あまりにも及んだ。



弾薬庫2西 コンクリート片検出状況 南から



弾薬庫2西 平坦地検出状況 東から

## 中隊事務所跡

遺構規模は、南北28.8m、東西27.5mを測る。範囲の面積は708㎡であり、うち平坦地は495㎡である。伊藤報告(2004)では、昭和20年(1945)中隊事務室と報告されている。将校(この陣地では中隊長1人=中尉、小隊長2人=少尉が該当か)の居住する空間や執務室があったと考えられる。

4段の平坦地で構成される(北側より平坦地1・平坦地2・平坦地3・平坦地4とする)。第1砲座・第2砲座へ続く通路から分かれた2つの通路が、平坦地1へと繋がっており、これも第1砲座・第2砲座へ続く通路から分かれた1つの通路が平坦地1～3の西側に沿って南西方向へと下っている。これらを東側より順に通路1・通路2・通路3と仮称する。また、平坦地4の西端より南西方向へ、通路3より約10～14m東側の位置には通路3と並行するような形で通路4がある。また平坦地1の南東側の盛土が切れる部分で、南東方向へと下る通路5がある。通路1・2については、地山を削平して明確な通路が造られており、通路1は幅0.7m・比高差1.6m、通路2は幅1.0m・比高差2.0mである。通路は緩やかな斜面となっており、階段状の起伏は見られない。残りの通路3～5については、言わば「けもの道」のようなイメージであり、人が同じ場所を何度も歩くことで地面が踏み固められて作られた自然発生的なものである。大まかな範囲を測量し、等高線と

見比べた際にも当該箇所に等高線の揺れがみられる。

平坦地1には、北東部分で通路1の南東をかすめるように径2.0m前後、深さ0.5mの土坑が1基存在する。また平坦地の南東部分には約0.2mの盛土が約10mにわたって存在している。また盛土の西側は平坦地2に向かってややせり出しており、平坦地2との出入口になっていた可能性がある。

平坦地2の西側にはコンクリート片が広く散らばっており、建物の外壁とみられる鉄網の入ったモルタルが大半を占め、小型の土管や瓦なども見られる。玉石の入った基礎に使いそうなコンクリートも僅かであるが認められる。また、平坦地の中央南側には、コンクリート製の竈があり、東西1.2m・南北0.7m・高さ0.8m(残存長)の規模であり、北側に開口部があり、高さ0.18m・幅0.33mである。質の良くない煉瓦状のコンクリートを積み重ねた後にモルタルで表面をコーティング仕上げた模様である。開口部が焚口であるとする上、上面に鍋や釜を置いた痕跡があるはずだが見当たらなかった。平坦地2の東側には、長軸4.0m・短軸2.2m・深さ0.5mの土坑が1基存在する。

平坦地2と3の斜面を切るような形で長軸4.1m・短軸3.5m・深さ1.5mの大型土坑が存在し、コンクリート片や土管、ガラスなどが詰められていた。意図的に廃棄した痕跡が認められる。

平坦地4の南東側・南西側でほぼ埋没していたが厚み0.03m程度のコンクリート製の板状のものが検出されている。土留めの用途をなしていたと思われる。

平坦地の標高値は、平坦地1が38.22m、平坦地2が37.7m、平坦地3が36.5m、平坦地4が35.5mである。



中隊事務所跡 検出状況 北から



中隊事務所跡 平坦地1 検出状況 西から



中隊事務所跡 平坦地2 検出状況 西から



中隊事務所跡 平坦地3・4 検出状況 西から



中隊事務所跡 平坦地 4 検出状況 南西から



中隊事務所跡 コンクリート検出状況 南西から



中隊事務所跡 検出状況 南東から



中隊事務所跡 通路5の北側土塁検出状況 南から



中隊事務所跡 大型土坑検出状況 西から



中隊事務所跡 大型土坑検出状況 南から



中隊事務所跡 通路2 検出状況 南西から



中隊事務所跡 竈跡検出状況 北東から

### 兵舎跡1

兵舎跡2の北側に隣接する。遺構規模は、南北29.5m、東西8.9mを測る。範囲の面積は234㎡であり、うち平坦地は113㎡である。伊藤報告(2004)では、昭和20年(1945)1月入隊組の兵舎位置と報告されている。即戦力となる現役兵であるが、遅れて入隊したことから、兵舎跡2と第2砲座の間に急造したため、急な斜面に狭小な空間になってしまった可能性がある。

第1砲座・第2砲座へ続く通路から分かれた通路が1つあり、兵舎跡1西側の地山を削平して明確な通路として機能していたようであり、これを通路1とする。この他に兵舎跡1と兵舎跡2を縫うように走る通路から分かれ南側から兵舎跡1へ進入する通路2、平坦地の北東側で東側の斜面へ出る通路3、平坦地の北側にある緩やかな斜面へ続く通路4がある。通路1は幅1.4m・比高差2.0mである。通路はやや急な斜面となっており、階段状の起伏は見られない。通路2は幅1.3mでほぼ平坦な通路である。通路3～4は、人の往来によって作られた自然発生的な通路と思われる。

平坦地の南東部分には約0.2mの盛土が約17mにわたって存在している。

この平坦地では土坑やコンクリートなどは認められなかった。

平坦地の標高値は、38.20mであり、中隊事務所の平坦地1とほぼ同じ高さである。



兵舎跡1 検出状況 南西から ドローン撮影



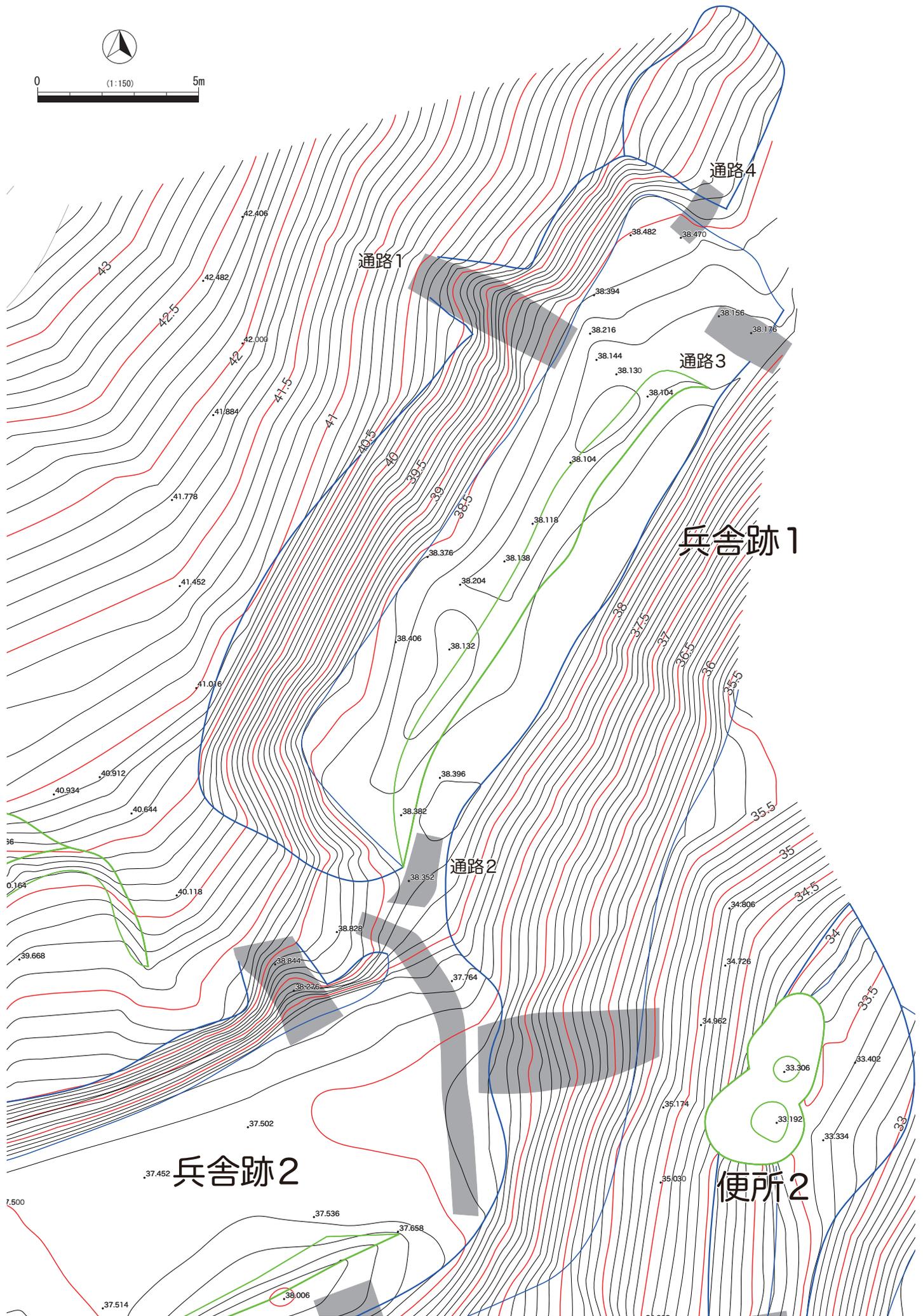
兵舎跡1 検出状況 西から



兵舎跡1 検出状況 北から



兵舎跡1 通路1 検出状況 南東から



第 20 図 兵舎跡 1 平面图

## 兵舎跡2

中隊事務所跡の東側、兵舎跡1の南側に隣接する。遺構規模は、南北22.8m、東西18.4mを測る。範囲の面積は305㎡であり、うち平坦地は167㎡である。伊藤報告(2004)では、昭和19年(1944)11月入隊組の兵舎位置、と報告されている。

兵舎跡1と兵舎跡2を縫うように走る通路から分かれ北側から兵舎跡1へ進入する通路1、平坦地の南側で南側の緩やかな斜面へ出る通路2、平坦地の東側にある便所2へ続く通路3、兵舎跡1と兵舎跡2を縫うように走る通路4がある。通路1は幅1.4m・比高差1.6mである。通路はやや急な斜面となっており、階段状の起伏は見られない。通路2～4は人の往来によって作られた自然発生的な通路と思われる。

兵舎跡2の北側では1段掘り窪められたような窪地が存在する。また、平坦地の南側には、舌状に張り出した緩やかな平坦地が接続する。この両者はどういった用途かは分からなかったが、兵舎跡2の一括の遺構として判断し、遺構規模・範囲の面積に含めた。

平坦地の南東部分には約0.2mの盛土が約9mにわたって存在している。

この平坦地では土坑やコンクリートなどは認められなかった。

平坦地の標高値は、37.5mであり、中隊事務所跡の平坦地2とほぼ同じ高さである。



兵舎跡2 検出状況 東から ドローン撮影



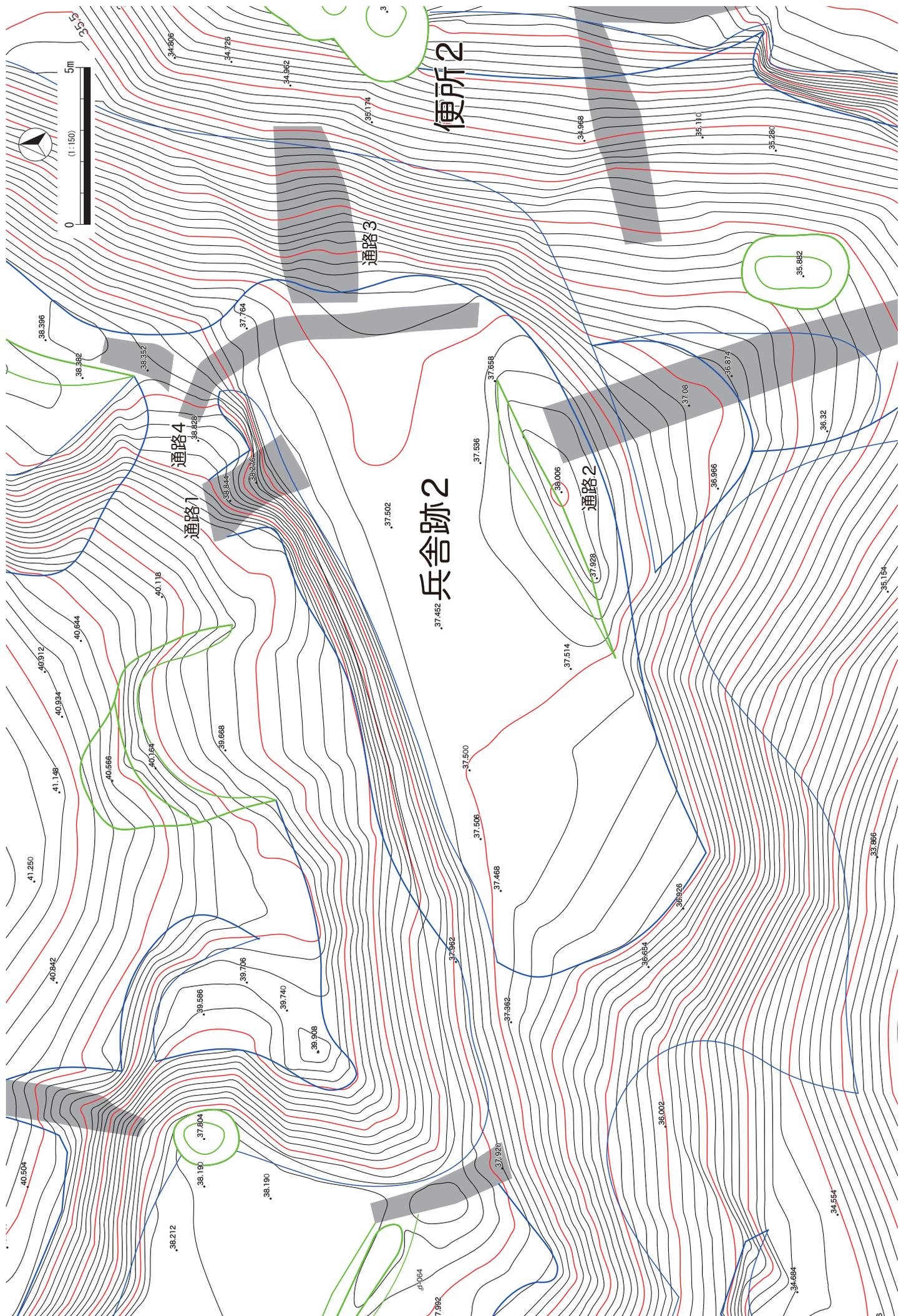
兵舎跡2 検出状況 南西から



兵舎跡2 地山開削状況 東から



兵舎跡2 通路1 検出状況 北東から



第 21 图 兵舎跡 2 平面图

### 兵舎跡3

中隊事務所跡の西側、炊事場跡の南東に隣接する。遺構規模は、南北 26.4 m、東西 14.3 m を測る。範囲の面積は 235㎡ であり、うち平坦地は 123㎡ である。兵舎跡 1・兵舎跡 4 と同様に急造したような印象を受ける。また、砲座をはじめとする戦闘空間とは、一步隔絶しているような印象もある。用途としては例えば、北西側に付属する炊事場に関連する施設として、糧食班の宿所であったとか、東側の中隊事務所の将校に付属する<sup>へいそつ</sup>兵卒の宿所であった可能性がある。

第 1 砲座・第 2 砲座へ続く通路から分かれた通路と接続すると思われる通路 1 (伐採した竹木などの集積をしたため、両者の繋がり<sup>は</sup>は明確にはできなかつた)、炊事場へと下っていく通路 2 がある。通路 1 は幅 1.8 m・比高差 1.6 m である。通路はゆるやかな斜面となっており、階段状の起伏は見られない。通路 2 は、人の往来によって作られた自然発生的な通路と思われる。

平坦地の裾には、南西部分で長軸 2.6 m・短軸 2.0 m・深さ 0.8 m の土坑が 1 基存在する。伊藤氏の教示では、警備にあたる衛兵(歩哨)<sup>ほしやう</sup>の立っていた場所の可能性があるとのことである。平坦地の西側部分には、コの字状に約 0.2 m の盛土が総延長約 35m にわたって存在している。南西隅・南側で計 3ヶ所盛土が切れており、出入口の用途とみられる。

この平坦地ではコンクリートなどは認められなかつた。

平坦地の標高値は、35.3 m であり、中隊事務所の平坦地 4 とほぼ同じ高さである。

なお、この兵舎跡 3 と中隊事務所の間は、他の斜面と比較しても比較的緩やかな傾斜となっており、原地形が残されている可能性もある。



兵舎跡 3 検出状況 東から ドローン撮影



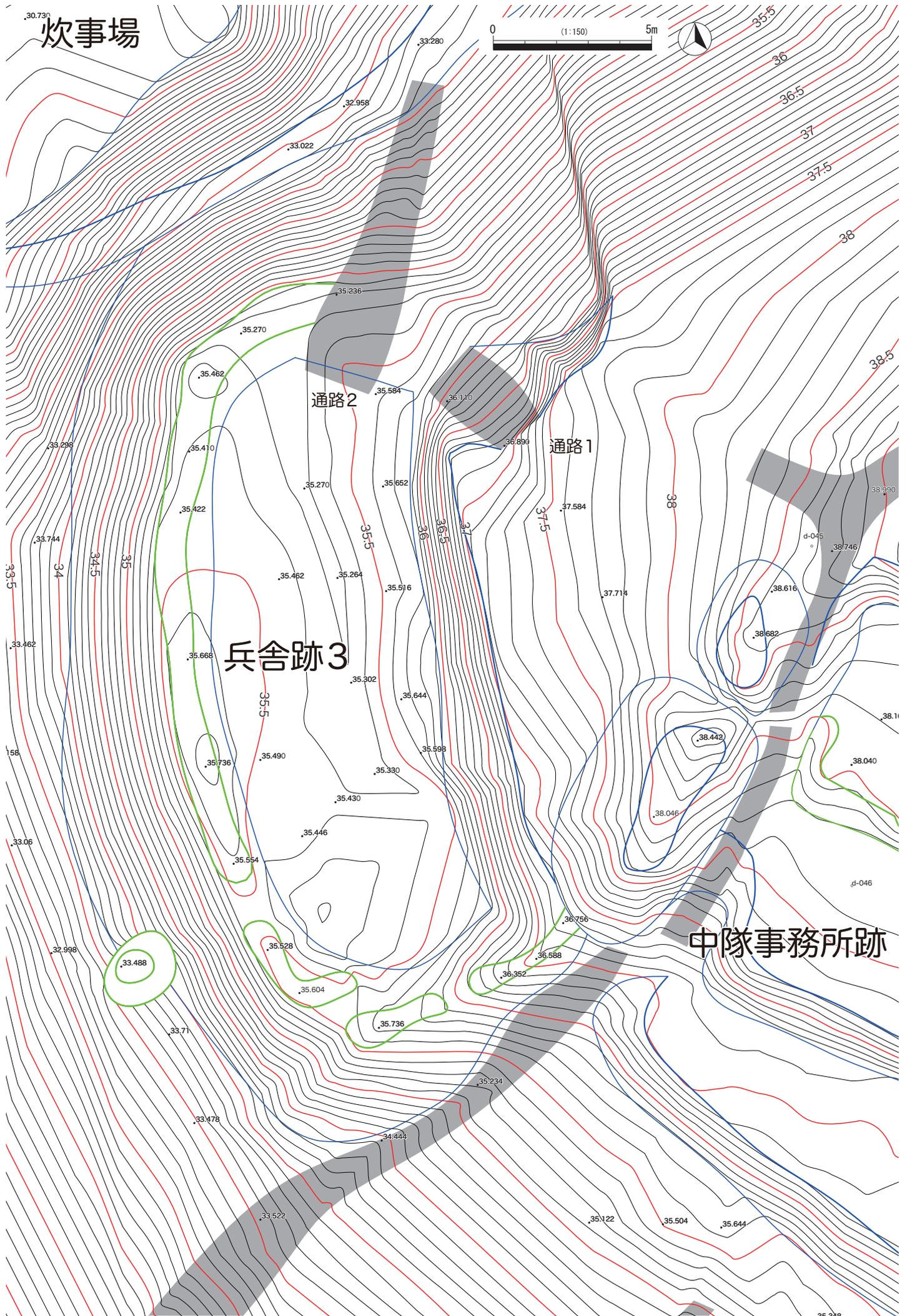
兵舎跡 3 検出状況 南東から



兵舎跡 3 検出状況 北東から



兵舎跡 3 土坑検出状況 東から



第 22 図 兵舎跡 3 平面図

#### 兵舎跡4

兵舎跡2の南側に隣接する。遺構規模は、南北18.8m、東西8.2mを測る。範囲の面積は154㎡であり、うち平坦地は103㎡である。伊藤報告(2004)では、初年兵教育用の兵舎位置、と報告されている。兵舎跡1・兵舎跡3と同様に狭小な斜面を切り開いて急造したような印象を受ける。

便所2へと続く通路は兵舎跡2の南東へとあがる通路に枝分かれする。これを通路1とした。兵舎跡2の平坦地の南側の舌状に張り出した緩やかな平坦地から兵舎跡4の西側を掠めて下る通路を通路2とした。平坦地の南側で兵舎跡5に繋がっていく通路を通路3とした。通路1は幅0.9m、通路3は幅1.4mでいずれもほぼ平坦な通路である。通路2は、人の往来によって作られた自然発生的な通路と思われる。

兵舎跡4の西側には、2基土坑が存在し、長軸3.4m・短軸2.3m・深さ0.5mの北側のものと長軸2.6m・短軸1.4m・深さ1.1mの南側のものがある。いずれも用途不明であるが特に南側のものは兵舎跡4全体が見渡せる。平坦地の東側部分には、約0.2mの盛土が約11mにわたって存在している。

この平坦地ではコンクリートなどは認められなかった。

平坦地の標高値は、32.8mである。



兵舎跡4 検出状況 南から ドローン撮影



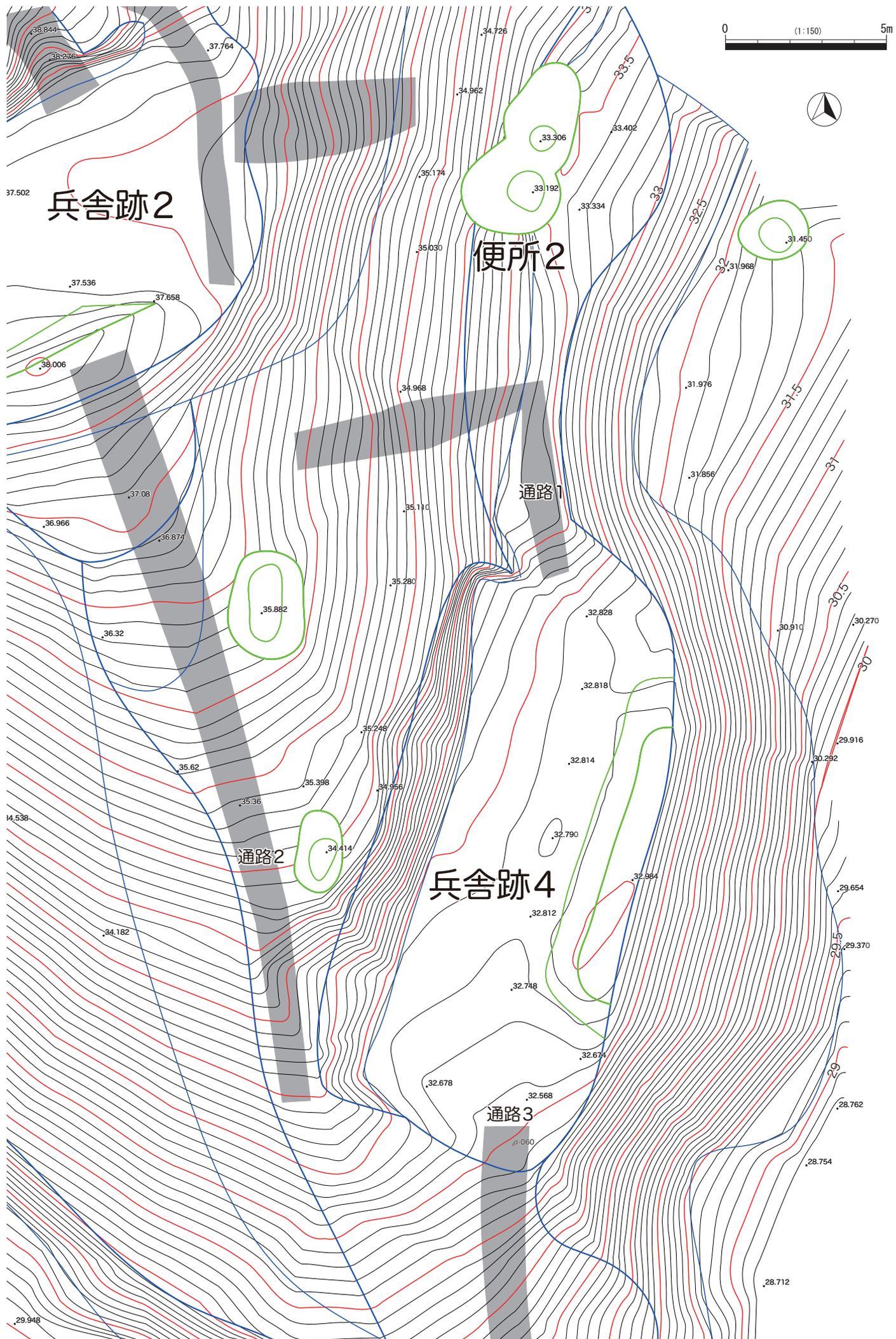
兵舎跡4 地山開削状況 東から



兵舎跡4 検出状況 北から



兵舎跡4 通路1検出状況 南から



第 23 図 兵舎跡 4 平面図





### 兵舎跡6

兵舎跡4の南側に隣接する。遺構規模は、南北13.5m、東西23.1mを測る。範囲の面積は185㎡であり、うち平坦地は120㎡である。伊藤報告(2004)では、平坦面と報告されている。西側にある被服庫跡との位置関係を考えると、兵舎跡6と被服庫跡をほぼ同時期に造作した後に被服庫跡へと繋がる東西方向の道を作ったような印象を受ける。また、砲座をはじめとする戦闘空間とは、一歩隔絶しているような印象もあり、直接戦闘に関わらない兵卒の宿所であった可能性がある。

兵舎跡5の東側から分かれて入る通路を通路1とした。また、被服庫跡の東側から下る通路、これを通路2とする。また、平坦地の東側から出入りする通路を通路3とする。通路2は、人の往来によって作られた自然発生的な通路と思われる。通路1は幅1.0m、通路2は幅0.7mでほぼ平坦な通路である。

平坦地の南裾には、2基土坑が存在し、南側中央部分で長軸2.4m・短軸2.0m・深さ0.7mの土坑、南東部分で径1.5m・深さ0.2m。伊藤氏の教示では、後者は警備にあたる衛兵(歩哨)の立っていた場所の可能性があるとのことである。平坦地の西・南・東部分には、コの字状に約0.1~0.2mの盛土が総延長約29mにわたって存在している。西側・南西隅・南側で計3ヶ所盛土が切れており、西側と南側は通路確保のため、その他は平坦地から出入りの用途の可能性がある。

また、この平坦地ではコンクリートなどは認められなかった。

平坦地の標高値は、23.3mである。



兵舎跡6 検出状況 西から ドローン撮影



兵舎跡6 検出状況 東から



兵舎跡6 通路2 検出状況 南から



兵舎跡6 南東部土坑検出状況 南から



ひふくこ  
被服庫跡

兵舎跡5と兵舎跡6の間に隣接する。遺構規模は、南北18.9m、東西19.3mを測る。範囲の面積は196㎡であり、うち平坦地は136㎡である。伊藤報告(2004)では、被服庫と報告されている。東側にある兵舎跡6との位置関係を考えると、兵舎跡6と被服庫跡をほぼ同時期に造作した後に被服庫跡へと繋がる東西方向の道を作ったような印象を受ける。また、砲座をはじめとする戦闘空間とは、一步隔絶しているような印象もあり、輜重(兵站)を担当していた兵卒の宿所であった可能性がある。

兵舎跡5の東側から分かれて入る通路及び平坦地を通路1とした。また、北西に隣接する弾薬庫2方面へ通じる通路、これを通路2とする。通路2は、人の往来によって作られた自然発生的な通路と思われる。通路1は幅2.7～3.4mでほぼ平坦な通路である。被服庫跡へ通じる平坦で幅が広いことから、被服庫跡へ物資を運び込む想定でつくられた可能性がある。

平坦地の南裾には、平坦地の北西～南東部分には、コの字状に約0.1～0.2mの盛土が総延長約24mにわたって存在している。北西隅・南側で計2ヶ所盛土が切れており、西側は通路確保のため、その他は平坦地からの出入りの用途の可能性もある。

また、この平坦地では土坑やコンクリートなどは認められなかった。数点の瓦を表面採集したが、後世の遺物の可能性もある。

平坦地の標高値は、25.9mである。



被服庫跡 検出状況 東から ドローン撮影



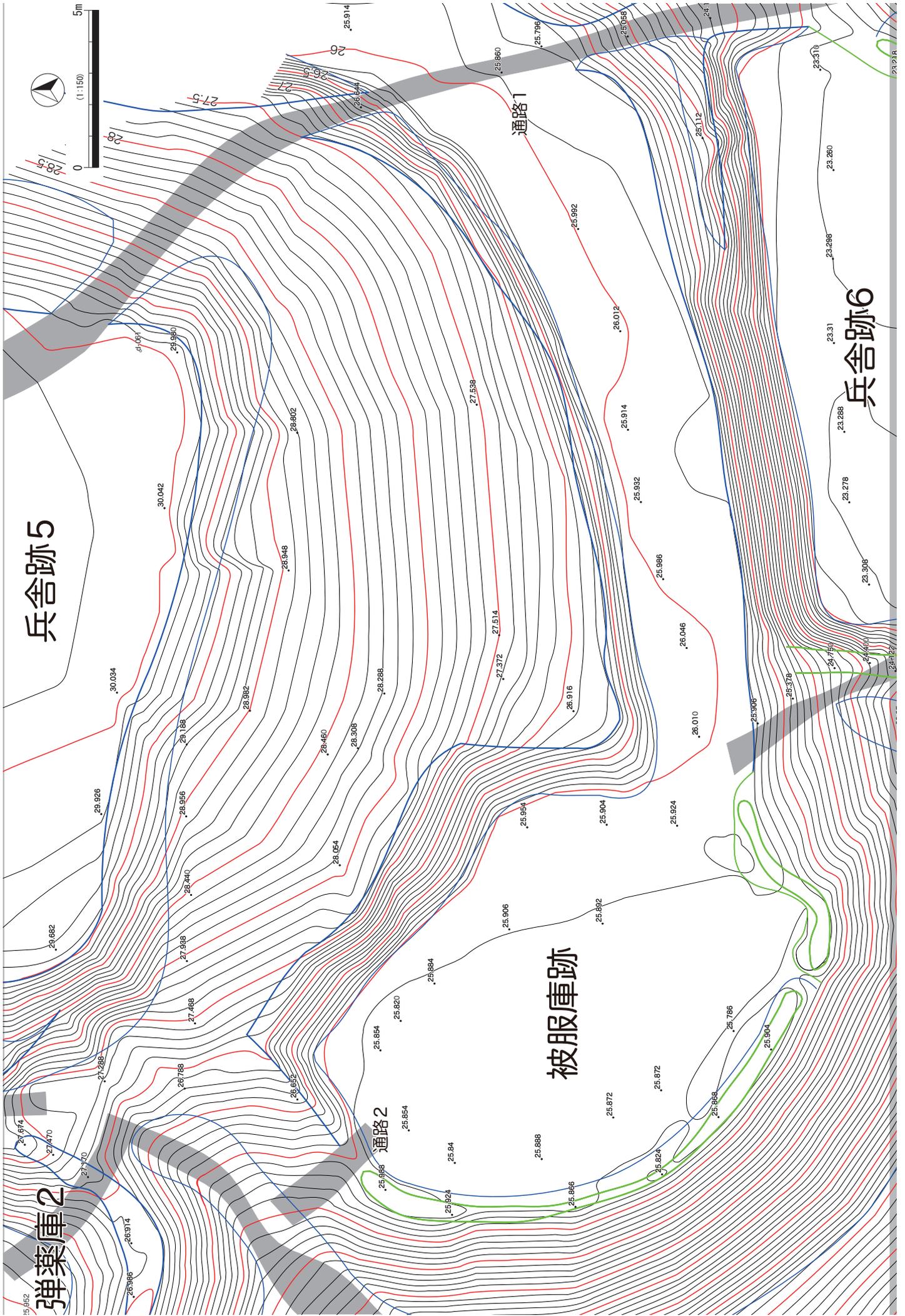
被服庫跡 検出状況 南から



被服庫跡 通路2 検出状況 北から



被服庫跡 通路1 検出状況 西から



## 便所2

兵舎跡2の東側8.5m、兵舎跡4の北側14.0mに位置する。伊藤報告(2004)では便所として報告されている。北側の楕円形の土坑と南側の円形の土坑と2つの遺構が連なっている。北側の土坑は、長軸3.0m短軸2.0mで深さ0.6m、南側の土坑は、長軸短軸共に3.0mで深さ1.0m程度である。どちらの土坑も斜面地にあるため、正確な深さは算出できないものの、遺構の短軸部分の高低差を足して2で割った高さを土坑の底部の標高から引いた差とした。なお、伊藤報告(2004)の記載は単一の土坑とされている。

南側の兵舎跡4とは緩やかな稜線で繋がっている。

第1次調査で報告した便所1はコンクリート構造物であるのに対し、便所2は素掘りの土坑である。埋土の堆積もさほど進んでおらず、1mピンポールで深さを確認したところ0.3～0.5m程度刺さった。北側の土坑は小便槽、南側の土坑は木製の板を渡したうえで大便槽として使っていたのかもしれない。



便所跡2 検出状況 東から



便所跡2 検出状況 北から

## 弾薬庫2

兵舎跡5の西、被服庫跡の北西に位置する。遺構規模は、南北13.4m、東西15.2mを測る。伊藤報告(2004)では、SK18(弾薬庫)と報告されている。高射砲で使用する弾薬を保管していた場所であり、戦闘空間近くに位置する弾薬庫1と比べると一回り大きい。『てんりゅう隊陣中記』昭和19年(1944年)11月3日の記事に「2発詰の頑丈な弾薬箱を(中略)弾薬庫に収納。2棟、満杯なり。」とあることから、この2つの弾薬庫がこれまでに完成していたと推定される。

西側に開放部があり、幅3.7m(底面幅0.6m)であり、出入口と考えられる。他に兵舎跡5側に緩やかな箇所があり、ここからも出入りしていた可能性がある。

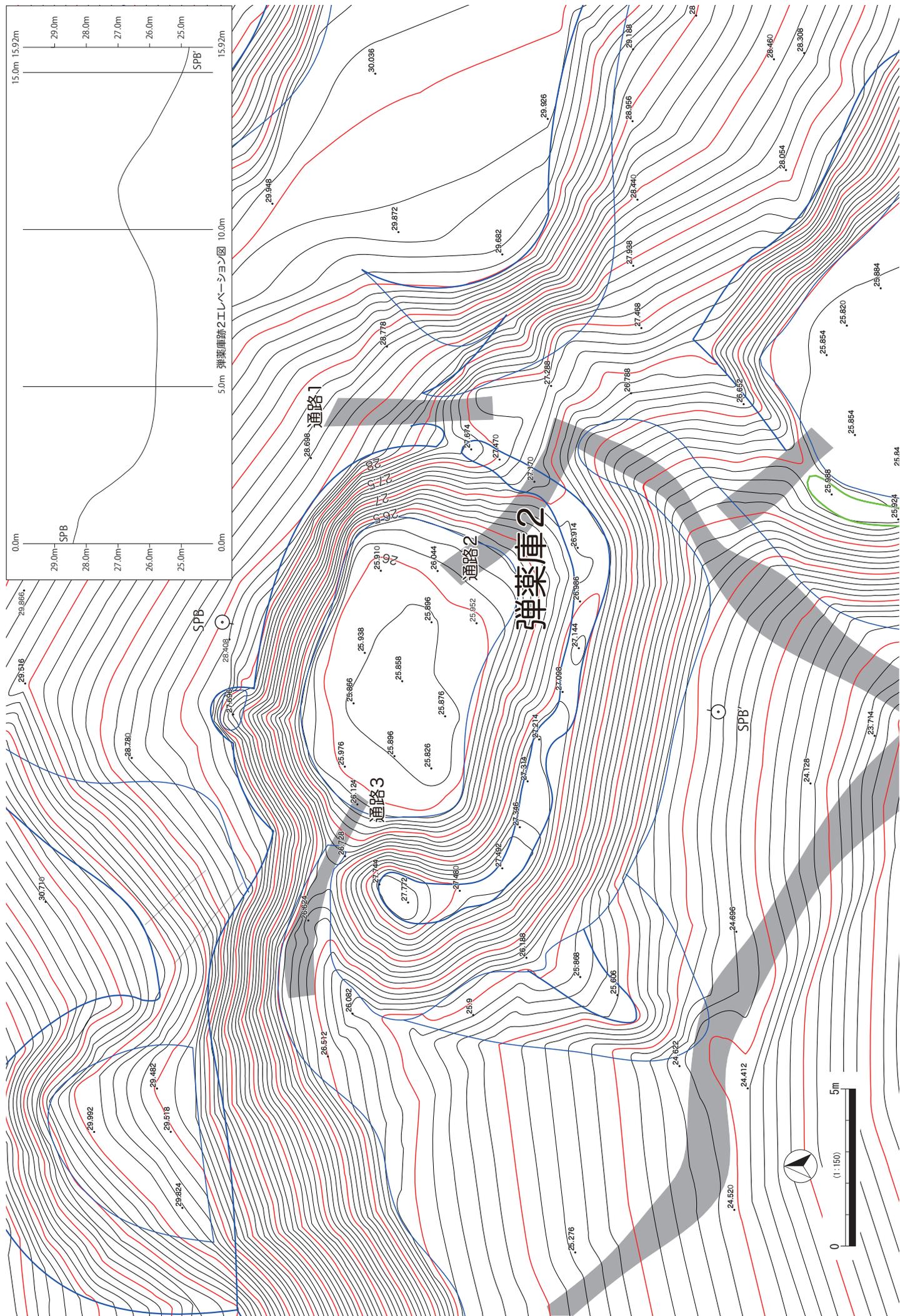
比較のために、弾薬庫1の図面も同縮尺で掲載を行なった。



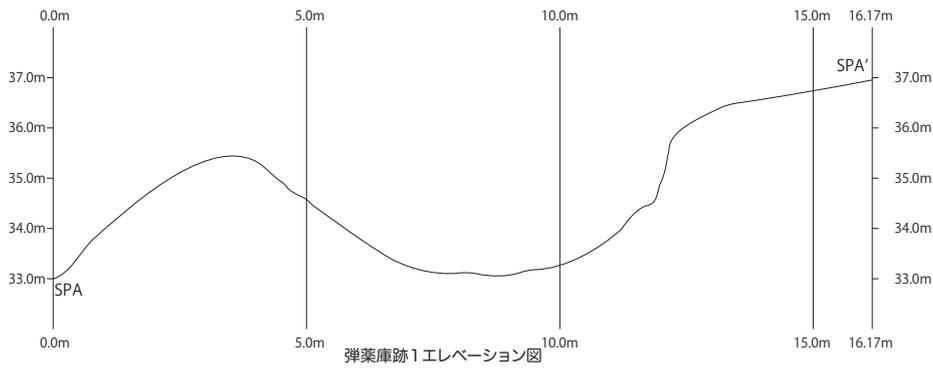
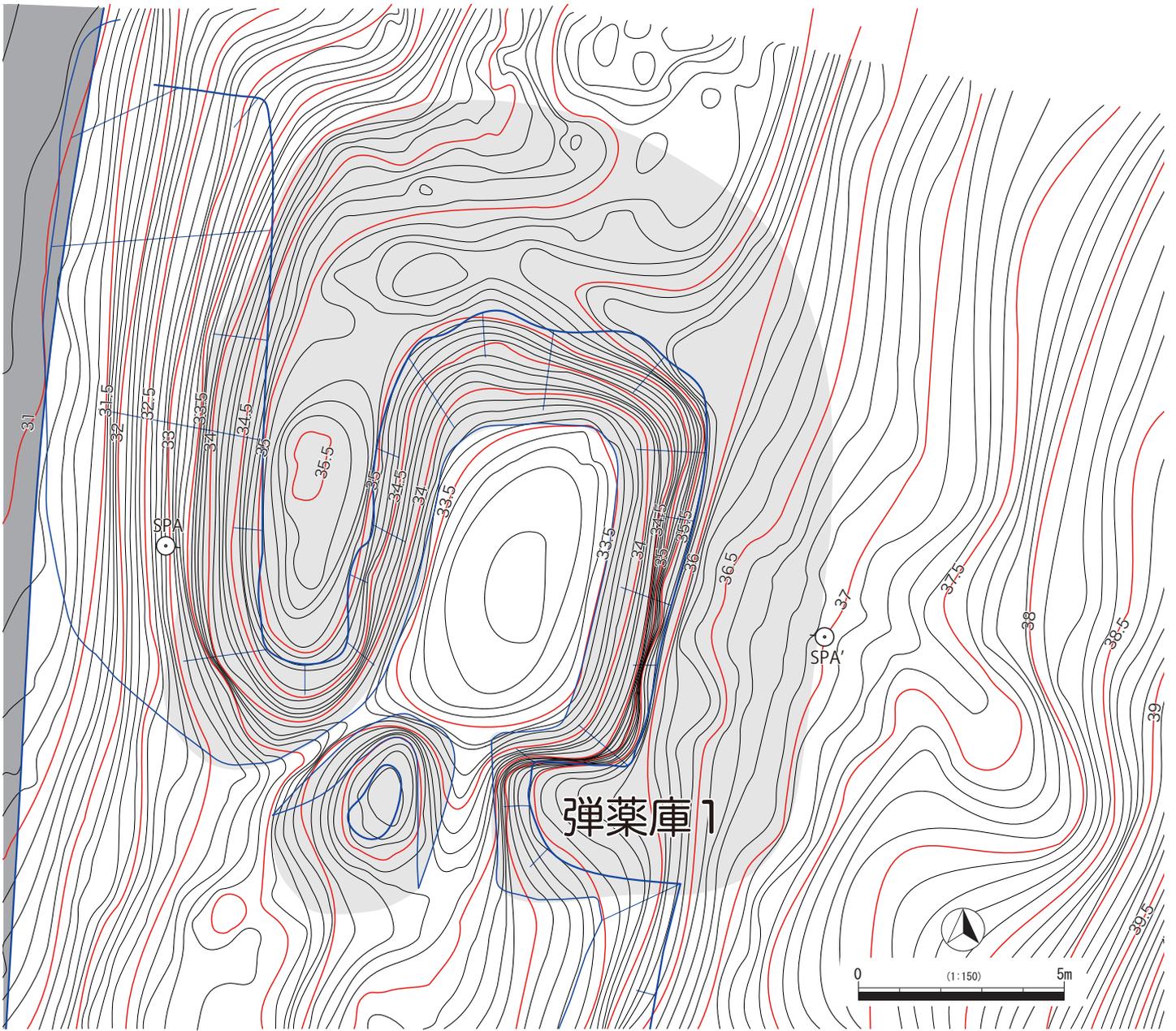
弾薬庫2 検出状況 北東から



弾薬庫2 検出状況 西から



第 28 図 弾薬庫 2 平面図



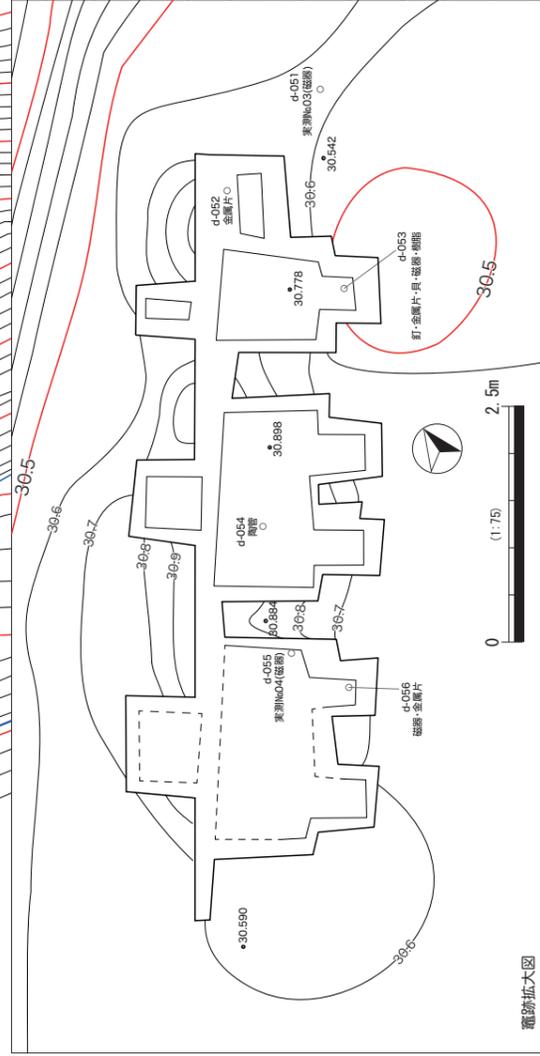
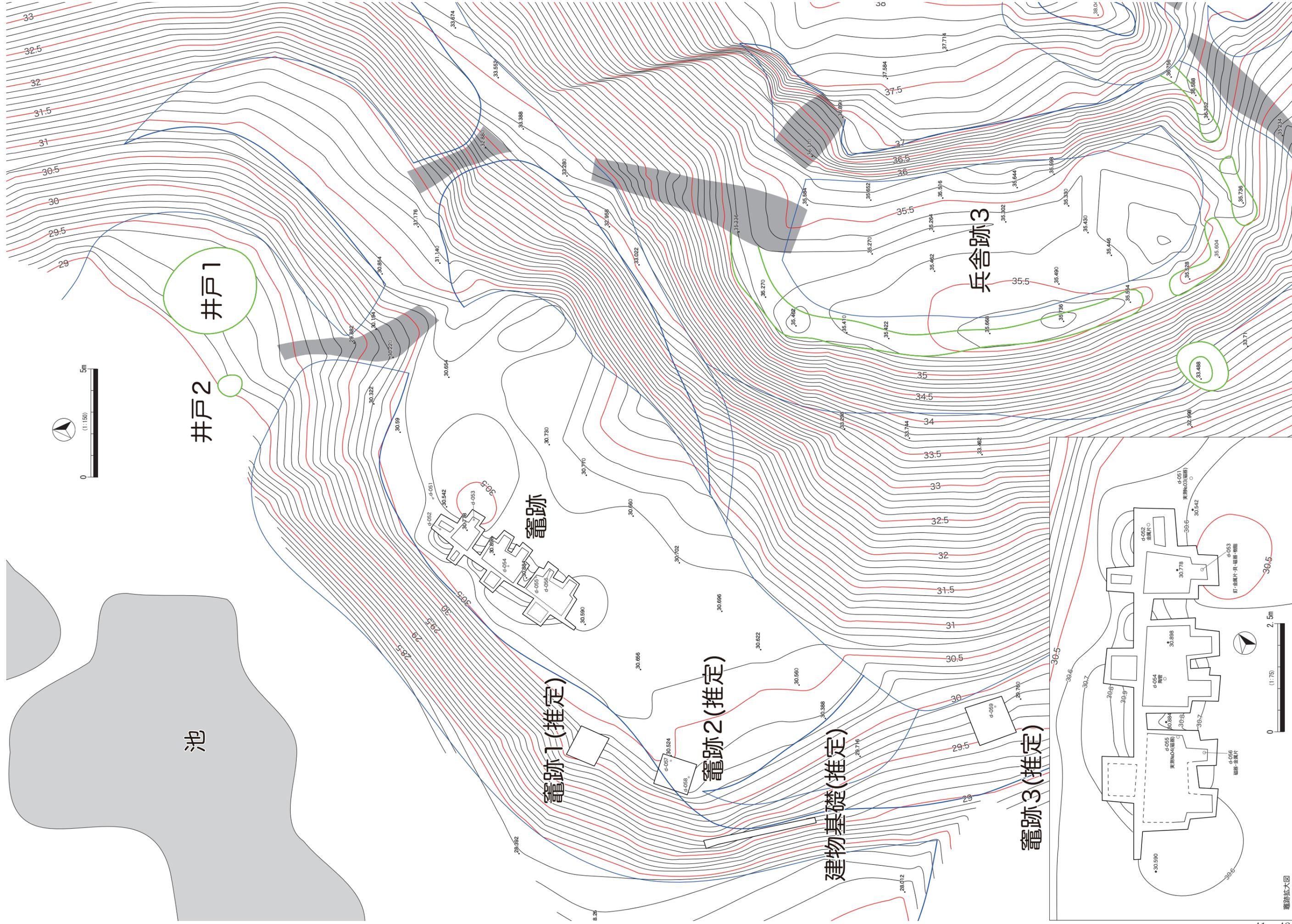
第29図 弾薬庫1 平面図



弾薬庫1 検出状況 南西から ドローン撮影



弾薬庫1 検出状況 北から ドローン撮影



第30図 炊事場跡平面図

## ②炊事場跡

炊事場跡は、太佐山高射砲陣地の中でも丘陵の西側に位置し、緩やかな斜面を開削して1つの大きな平坦地を設けている。炊事場跡の北側は、一段下った部分の池に隣接している。平坦地の規模は、南北12.7m、東西25.7mを測る。範囲の面積は674㎡であり、うち主要な平坦地部分は254㎡である。伊藤報告(2004)では、井戸1・井戸2・旧炊事場・炊事場との報告がある。うち旧炊事場については今回の確認調査対象外であったものの現地確認を試みたが、正確な場所が確認できなかった。

炊事場跡は、平坦地の北端に大型の竈跡1ヶ所、西側から南西部にかけて竈跡や建物基礎と考えられるコンクリート構造物が4ヶ所、平坦地を一段下りた北東側に井戸が2基存在する。

平坦地の標高値は、30.6mである。

## 竈跡

平坦地の北端に位置する。遺構規模は、長軸8.1m、短軸2.6mを測る。北東・南西方向が主軸方向とするとN-34.5°-Eである。伊藤報告(2004)では、炊事場と一括報告され「コークスガラブロックを積み、モルタルで塗った壁が長さ8mにわたり残る」と記述されていたが、ここでは炊事場跡を構成する個別遺構として報告を行なう。

前回の調査でもこの遺構については確認できていたものの、蔦や竹・木が生い茂り、伊藤報告(2004)で掲載されていた写真よりもかなり遺構の崩壊が進行していることは明らかであった。竹木の除去には極力務めてみたものの直径0.5m前後の木が2本生えており、伐採することは不可能であった。竈跡の表面のモルタルの大半は剥げ落ち、コークスガラ(石炭殻)のブロックは散乱し、破片の一部は近年立ち入った人々によるバーベキューの際の焼台の一部として利用されている有様であった。

竈跡を構成するコークスガラ(石炭殻)は1個が長軸22cm・短軸8cm・高さ6cm程の大きさであり、ブロックの中身は小礫も混じっている。モルタルは竈跡の外を0.5～1cm程の厚みで仕上げているだけでなく、ブロックを積み重ねた際の固定剤としてもモルタルが使用されている。

竈跡の焚口は東側に5ヶ所、煙道は西側に2ヶ所設けられている。3つの竈により構成されていたとみられ、北側の竈は焚口1つに対し煙道1つ、残り2つの竈は焚口2つに対し煙道1つである。北側の煙道は残りの2つのものに比べ3分の2ほどの大きさである。3つの竈はそれぞれ幅0.2～0.3m・長さ0.4～0.5mの壁で連結されており、北側の竈の北・南側の竈の南にも同様の壁があるが以降は構造物と繋がっていたような痕跡なども無いことから本体の耐久性を高める支保<sup>しほ</sup>の目的であったと考えられる。

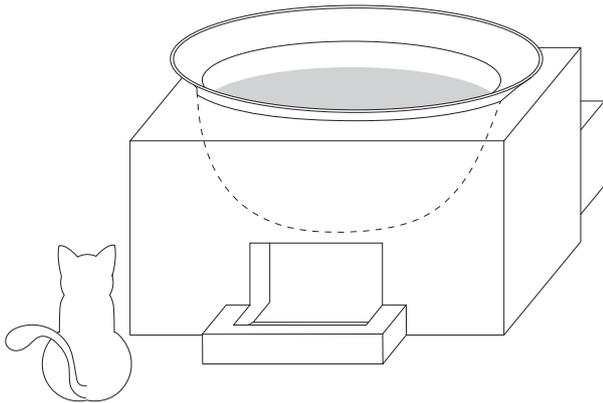
焚口5ヶ所は外寸幅0.7～0.8m・内寸幅0.3～0.4mとほぼ同じ規格である。焚口内部には15cmほど腐葉土や竹の根が堆積しており、底部にはガラスやレンガ片などが堆積していた。焚口の正面手前部分は炭を十能<sup>じゅうのう こうじんぼうき</sup>・荒神帚などで掻き出しやすいように傾斜がついている。

煮炊きなどの鍋や釜を置く本体部分は、遺構の崩壊により本来の形状を窺い知ることはできない。煙道については伊藤報告(2004)掲載写真において一番南側の竈で2つの煙突穴が確認できるものの、崩壊が進んだ現状では、うち1つの煙突穴の一部痕跡しか確認できない。穴の大きさは、周囲に落ちている破片などから復元値で横幅15cm程、縦幅22cm程と推定される。

標高値は、30.6 mである。

同様の竈跡は、笠寺陣地の置かれた見晴台遺跡（名古屋市南区）の平成22年（2010年）の第50次発掘調査で2基確認されているが、煙道構造は持たないか本体と一体であったと思われる。この2基の竈は繋がっておらず、今回の調査のように支保目的のような壁も存在しない。

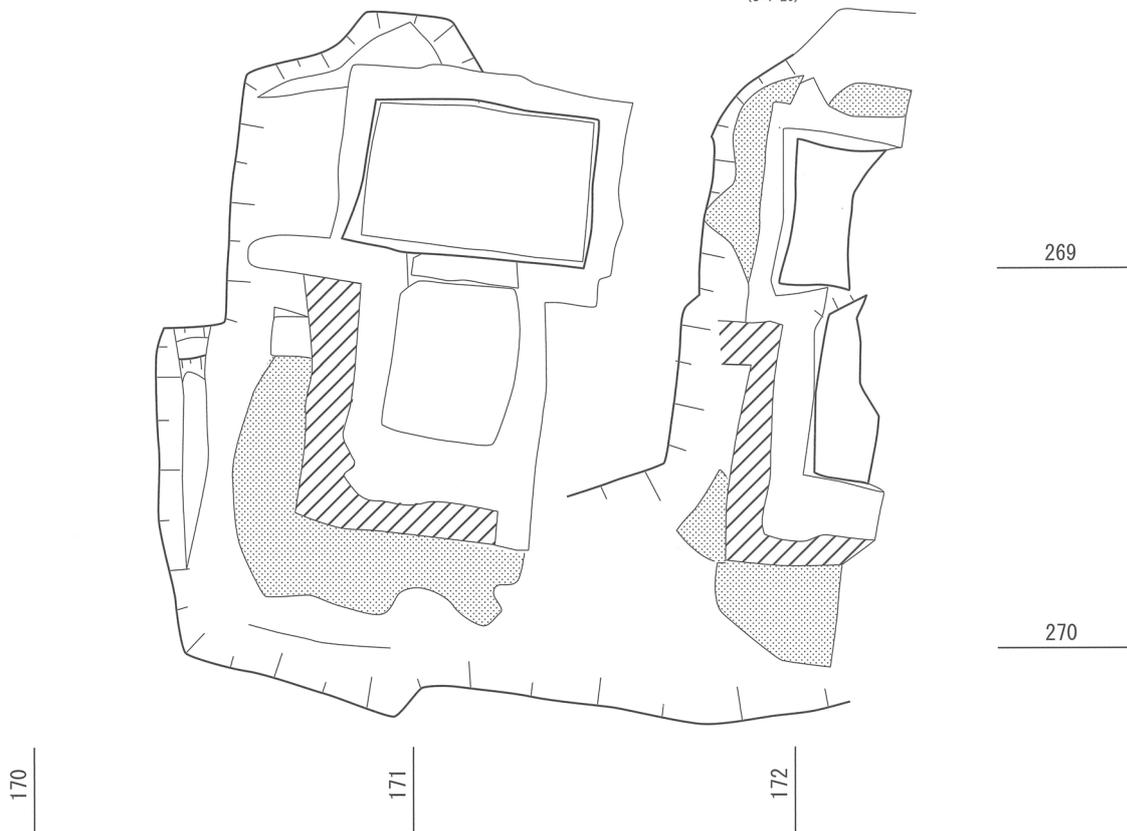
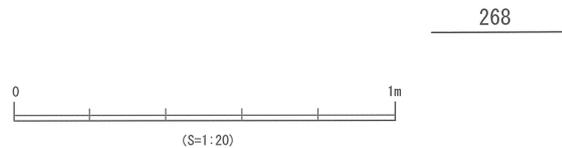
中央の竈の本体部分から、陶製の土管（外径14.0cm、内径11.7cm、残存長25.0cm）が1点地面に刺さった状態で見つかった（d-054）。陶管は特に被熱を受けたような痕跡は見られないため、後に廃棄されたものかもしれない。その他、この竈跡周辺を清掃中に磁器を2点採集した（実測遺物03・04）。



第31図 竈跡イメージ図



第32図 見晴台遺跡第50次 竈全景 東から



第33図 見晴台遺跡第50次 竈平面図（上が北）

第32・33図は伊藤厚史ほか（2021）より



竈跡 検出状況 南から



竈跡 検出状況 南東から



竈跡 検出状況 南東から



竈跡 検出状況 北東から



竈跡 検出状況 北から



竈跡 煙道部分内面 北西から



竈跡 検出状況 北東から



竈跡 焚口部分 南東から

### 竈跡 1(推定)

竈跡の南西 7.7 m の斜面に位置する。遺構規模は、長軸 1.6 m、短軸 1.2 m を測る。

平面図については、拳大サイズのコンクリート片と板状に割れたモルタルが散乱していたおおよその範囲である。竈跡 1～3 については第 4 章でも機能の推定などを後述する。

竈跡で見られたようなコークスガラ(石炭殻)のブロックは少量で、大径の礫も混じったコンクリートが主体で、燻し瓦の棧瓦も落ちていた。コンクリートを観察すると空洞(鬆)がみられるため強度が低いと推察され、砲座で使用されていたコンクリートより明らかに質が悪い。地表からは基礎部分や鉄筋などは観察できなかった。

標高値は、30.4 m である。



竈跡 1(推定) 検出状況 南から



竈跡 2(推定) 検出状況 南西から

### 竈跡 2(推定)

竈跡の南西 10m の斜面が落ち始める部分に位置する。遺構規模は、長軸 1.6 m、短軸 1.5 m を測る。

平面図については、板状に割れたモルタルと 10cm 前後のコンクリート片が散乱していたおおよその範囲である。竈跡で見られたようなコークスガラ(石炭殻)のブロック片はごく少量みられる。コンクリートを観察すると空洞(鬆)がみられ強度が低いと推察され、砲座で使用されていたコンクリートより明らかに質が悪い。地表からは基礎部分や鉄筋などは観察できなかった。

また、板状の磨りガラスや低圧碍子(ノップ)を表面採集した。磨りガラスは、細かく割れており、全体の大きさは不明であるが、縁部分だけでなく、角の部分 2 か所が確認された。磨りガラスの表面に絵柄などは見られず、厚みは 0.18mm である。磨りガラスの効果としては減光も考えられるので、低圧碍子も認められることから、この場所で照明設備があった可能性もある。

標高値は、30.4 m である。

### 竈跡 3(推定)

竈跡 2(推定)の南 15 m の緩やかな斜面に位置する。遺構規模は、長軸 1.8 m、短軸 1.6 m を測る。

平面図については、板状に割れたモルタルと 10cm 前後のコンクリート片が散乱していたおおよその範囲である。竈跡で見られたようなコークスガラ(石炭殻)のブロックはごく少量みられる。コンクリートを観察すると空洞(鬆)がみられ強度が低いと推察され、砲座で使用してされていたコンクリートより明らかに質が悪い。なお、形状が円弧状で断面形状が扇形のコンクリート片もみられた。地表からは基礎部分や鉄筋などは観察できなかった。



### 井戸1

竈跡のある平坦地から1段下りた部分に位置する。遺構規模は、南北2.9m、東西3.9mを測る。現況の深さは、2.0m程である。水が溜まっている様子は観察できなかった。伊藤報告(2004)でも、井戸1と報告されている。

この井戸は素掘りの井戸であるが、平成2年(1990年)8月当時の池田氏の報告によると、「腐った木のわく」がこの時点ではまだ残っていたようである。

標高値は、29.3mである。

### 井戸2

井戸1の西側4.6mに隣接する。遺構規模は、南北1.1m、東西1.0mを測る。コンクリート製の枠が上部にあり、その枠の高さも含めた現況の深さは、1.8m程である。伊藤報告(2004)でも、井戸2と報告されている。

コンクリート製の枠は、小礫が多く含まれており、現地で作ったのではなく、工業規格品と思われる。コンクリート製の枠の下方には常滑焼の井戸枠が積まれている。両者の隙間はモルタルで埋められている。現況では2段しか確認できなかったものの、伊藤報告(2004)によると5段積みと報告されており、ゴミ等による堆積が進んでいる。

標高値は、29.1mである。



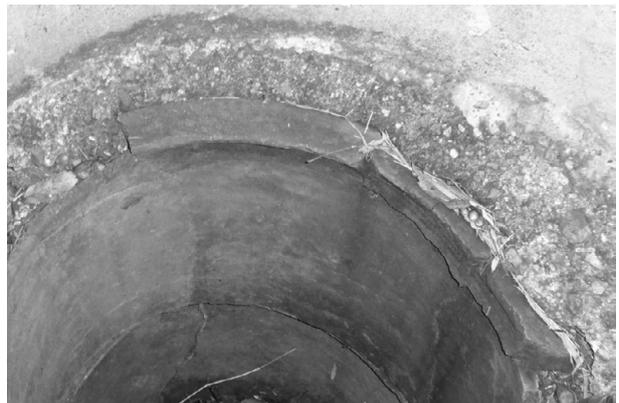
井戸1(左)・井戸2(右) 検出状況 ドローン撮影



井戸 検出状況 北東から ドローン撮影



井戸1 内部状況 西から



井戸2 内部状況 南から

(参考文献)

- ・伊藤厚史・三谷智広『見晴台遺跡発掘調査報告書(第49・50・51次)』2021 名古屋市教育委員会
- ・角永嘉一「第3章 出土遺物 1節 現代～近代」目黒区大橋遺跡調査会・大蔵省関東財務局『目黒区 大橋遺跡 下巻』1998
- ・池田陸介「高射砲陣地てんりゅう隊跡(1990.8.25)」『明日へ ー今、伝えたい戦争のことー』2021 東海市の戦争を記録する会

調査次	遺構名	伊藤報告(2004)	規模		標高値	関連遺構	備考
			東西	南北			
第1次	第1砲座	SK01	(4.6m)	(4.6m)	42.49m	・電纜管用榦 ・砲側待機所	・平面形は一辺約2.0mの八角形 ・鉄製ボルト1本残存
	第2砲座	SK02	4.7m	4.7m	42.47m		・平面形は一辺1.6～2.0mの八角形
	第3砲座	SK03	4.6m	(4.5m)	42.48m	・砲側待機所	・平面形は一辺1.7～1.8mの八角形
	第4砲座	SK04	4.6m	(4.3m)	42.48m	・電纜管用榦 ・砲側待機所	・平面形は一辺1.8～2.0mの八角形
	第5砲座	SK05	4.6m	(2.2m)	42.50m	・砲側弾薬置場	・平面形は一辺1.9mの八角形 ・鉄製ボルト1本残存
	第6砲座	滅失	4.9m	(0.7m)	42.49m	・電纜管用榦	・平面形は一辺約0.5m以上の八角形 ・鉄製ボルト6本残存
	半地下式掩蔽部1	SK07(地下兵舎)	7.4m	19.0m	41.46m	・溝跡	
	半地下式掩蔽部2	SK08(地下兵舎)	23.7m	8.0m	41.22m	・柱痕(?)	
	通信壕	SK11(通信所)	8.0m	10.0m	41.77m	・コンクリート基礎 (南北3.1m、東西1.1m)	
	算定具掩体(推定)	SK12	6.0m	5.5m	41.60m		
	交通壕	SD01	4.0m	48.0m	41.03m		
	弾薬庫1	SK17(弾薬庫)	7.8m	14.0m	33.00m		
	便所1	便所	4.8m	4.1m	39.00m		
第2次	井戸1	井戸1	3.9m	2.9m	29.33m		
	井戸2	井戸2	1.0m	1.1m	29.12m		
	竈跡	炊事場	2.6m	8.1m	30.58m		
	竈跡1(推定)	炊事場	1.6m	1.2m	30.40m		
	竈跡2(推定)	炊事場	1.5m	1.6m	30.40m		
	竈跡3(推定)	炊事場	1.8m	1.6m	29.46m		
	建物基礎(推定)	炊事場	0.3m	5.3m	29.02m		
	中隊事務所跡	SH01	27.5m	28.8m	38.22m		・標高値が一番上の平坦地の数値
	兵舎跡1	SH02	8.9m	29.5m	38.20m		・昭和20年1月入隊
	兵舎跡2	SH03	18.4m	22.8m	37.50m		・昭和19年11月入隊
	兵舎跡3	SH04	14.3m	26.4m	35.26m		
	兵舎跡4	SH05	8.2m	18.8m	32.79m		・初年兵教育用
	兵舎跡5	SH06	21.3m	10.5m	30.03m		
	兵舎跡6	SH08	23.1m	13.5m	23.31m		
被服庫跡	SH07	19.3m	18.9m	25.90m			
弾薬庫2	SK18(弾薬庫)	15.2m	13.4m	25.85m			
便所2	便所	3.0m	5.7m	33.10m			

第3表 遺構一覧表

## 第2節 出土遺物(図版第1～第2・第9～第10)

01は本体が磁器製の安全器である。電気回路の保護に用いられた装置である。8.5×7.1×3.7cmの箱型をしている。本来は蓋がついていたと考えられるが失われている。本体の1か所の側面に電気コードを引き込むための円孔が2つ開けられている。円孔の位置・形が不定であることから、本体を型打ち整形した後に手作業で穴を穿孔したと考えられる。内部機構は、真鍮製の金具が4か所にあり、それぞれが真鍮製のピン(直径0.4cm)で本体に固定されている。また電気コードを固定していた鉄製の螺子も4か所中3か所残存している。鉄螺子のサイズは、直径0.6cmのマイナス螺子であり、螺子径は0.4cm、長さは1.2cmである。金具は、螺子穴の開けられた厚さ0.15cmと0.05cmの長方形の2枚の板と螺子頭の上に厚さ0.15cmのU字型の板があり、前者でヒューズを固定し、後者で電気コードを直接挟んだとみられる。ヒューズは現在のようなガラス管のヒューズではなく、針金状の糸ヒューズか爪付きヒューズを使用していたと考えられる。真鍮製の金具の間には、直径0.9cmの穴が2か所開いており、螺子で壁や配電盤などに固定していたと考えられる。正式名称は、戦後ではあるが昭和24年(1949年)に工業技術庁が制定した『規格目録 日本規格 日本標準規格 臨時日本標準規格』でいうところの「安全開閉器」かもしれない。

02は低圧碍子である。電気配線で使われていたものであろう。低圧碍子には、クリートとノップと2種類があり、本品は後者にあたる。外面には透明釉が施されている。刻印は青色のマークで2か所あり、左側は製造者のロゴ、右側はJISマークの前身のJES(日本標準規格)に類するものかもしれない。

03は磁器である。外面体部には透明釉が施されているが、内面及び底面は施釉されていない。底面形状は3辺しか残存していないものの、本来は五角形ないし六角形であったと思われる。底面の外面中央部分に青緑色で「岐751」と刻印されており、クロム臭須が用いられている。この押印から昭和16年(1941年)から昭和21年(1946年)にかけて製造された、いわゆる「統制陶磁器」と呼ばれるものの一種であることが分かる。「統制陶磁器」については、後述する。「岐751」が付された容器は同型品ではないが、蓋付薬入れ(代用品)が確認されており、出土した磁器は薬瓶や化粧品瓶であった可能性がある。



95 蓋付薬入れ(代用品)  
岐751(臭須印) 土岐市下石町  
〔旧〕林 森之助 ヤマ森製陶所  
口径8.0 胴径8.5 器高10.6 個人蔵

第35図 陶製陶磁器 岐751(参考)

第35図は財団法人岐阜県陶磁資料館(2001)より

04は磁器である。体部厚は0.5cm前後とやや厚みがある。口縁部外側に緑色の二重圈線を有する。いわゆる「国民食器」とよばれ、工場・病院・軍隊施設などに供された給食用食器である。瑞浪市陶磁資料館文献(2012)によると、同様のデザインのは大正9年(1920年)には生産されていたようである。また、昭和9年(1934年)頃にはこういった意匠のものは製造権が設定されており、瀬戸陶磁器工業組合と岐阜県陶磁器工業組合連合会のうち西南部陶磁器工業組合・瑞浪陶磁器工業組合が許可されていたようである。その後、製造権の期限が失効したためか土岐津・妻木・

駄知<sup>だち</sup>・恵那地域でも生産されていたようであるが、基本的に東濃地方から瀬戸地方にかけて生産されていたものとみられる。高台が失われているため、確認することはできなかったが、03 同様に「統制陶磁器」でもあったかもしれない。

05 はガラス瓶である。表面・底面などに刻印は確認できなかった。色は青みのかかった薄緑色のソーダガラスであり、肩部に気泡がみられる。瓶の外側に製造時の型枠の合わせ目とみられる筋が口縁端部から底まで瓶の両サイドに 0.1cm 幅でついており、さらに底部外周にも 1 周する形で筋がみられる。また底部内面も片側が厚く反対側は薄くなっており 6mm 程傾斜していることから、少し質が悪いと思われる。口縁部はスクリュウ式である。器形からインク瓶と判断した。同様の資料は江古田遺跡(東京都中野区)・大橋遺跡(東京都目黒区)・郵政省飯倉分館構内遺跡(東京都港区)・東町二番遺跡(神奈川県厚木市)・鹿児島県鶴丸城跡(鹿児島県鹿児島市)などで出土している。

06 はサイダー瓶である。肩部に 2 か所「三ツ矢サイダー」、胴下部に「㊤ 340 ml」、底面に「SN (筆者注: シリアルナンバーの略か?) F 6 63」と陽刻されている。色は青みのかかった淡緑色のソーダガラスであり、05 よりは青みが強い。気泡は肩部に 1 か所、底部に 1 か所みられる。これも瓶の外側に製造時の型枠の合わせ目とみられる筋が口縁端部から底まで瓶の両サイドに 0.05cm 幅でついており、さらに底部外周にも 1 周する形で筋がみられる。底部内面もやや傾斜がみられる。口縁の観察から王冠栓と考えられる。「三ツ矢」と名の付くサイダーは複数の会社から発売されており、明治 21 年(1888 年)に明治屋が「三ツ矢平野水(注: 平野から湧く天然の炭酸水)」、明治 38 年(1905 年)に帝国鉱泉会社が「三ツ矢印平野シャンペンサイダー」、大正 11 年(1922 年)に日本麦酒鉱泉「三ツ矢サイダー」を発売している。この資料は、「㊤ (= 丸正<sup>まるしょう</sup>マーク)」がついていることから、昭和 31 年(1956 年) 4 月に改定された計量法より後の時代のものであることが分かった。同タイプのもは、南葛野遺跡<sup>みなみくずの</sup>(神奈川県藤沢市)で出土している。

07 はガラス容器でシャーレである。表面・底面などに刻印は確認できなかった。色は青みのかかった薄緑色のソーダガラスであり、全体的に細かい気泡がみられる。以下に現時点で知り得たシャーレの出土例を記す。

- ①新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター村松ステーション旧陸軍関連施設跡(新潟県五泉市)
  - ・陸軍の練兵場・射撃場・病院・兵舎・軍用飛行場等の跡地
  - ・2 点(遺物No.94 底径(145 mm) 器高(39.3 mm)/ 遺物No.95 底径(97 mm) 器高(18 mm)、廃棄土坑より出土。
  - ・他に陶磁器、医療器具(注射針、薬品瓶・バイアル瓶・目薬)、ガラス瓶(飲用瓶・調味料瓶)煉瓦等も出土。
- ②名勝平和記念公園内遺跡広島平和記念資料館本館下地点(広島県広島市)
  - ・近世～近代、被爆するまでの町の遺構
  - ・2 点(遺物No.他 189 底径(46 mm) 器高(10 mm)/ 遺物No.他 295 底径(68 mm) 器高(22 mm))、それぞれ廃棄土坑(被爆後)、被爆面埋土より出土。
  - ・他に陶磁器(湯呑、小坏、土人形)、ガラス製品(文具瓶、化粧瓶、酒瓶、ビー玉)等も出土。
- ③鹿児島県鶴丸城跡(鹿児島県鹿児島市)
  - ・近現代の第七高等学校、鹿児島大学等の跡地
  - ・1 点(遺物No.458 底径(46 mm) 器高(22 mm))、造成土から出土。
  - ・他に食器、ビール瓶、インク瓶、薬品瓶、注射器、プラスチック製の櫛・歯ブラシ、ボタン等も出土。
- ④中城御殿跡(首里高校内)(沖縄県那覇市)<sup>なかぐすくうどうん</sup>

## 第2章 太佐山高射砲陣地跡の調査

- ・沖縄県立第一中学校、首里高等学校(元・糸満高等学校首里分校)の跡地。
- ・1点(V区遺物No.240 底径(66 mm) 器高(13 mm))、造成土・攪乱土から出土。
- ・他にインク瓶、金属製ピンセット、中国産三彩、本土産近代磁器(砥部、瀬戸美濃系)等も出土。

08・09はガラス瓶である。08については表面・底面などに刻印は確認できなかった。09については底面に「○印にA」、「14」が陽刻で記されている。08の色は青みのかかった薄緑色のソーダガラスであり、09の色は茶色半透明である。いずれも体部に気泡がみられる。また、いずれも瓶の外側に製造時の型枠の合わせ目とみられる筋が口縁端部から底まで瓶の両サイドに0.05cm幅でついており、さらに底部外周を1周する形で筋がみられ、底部内面もやや傾斜がみられる。09については底部外面については凸凹<sup>でこぼこ</sup>しており、雌型<sup>めがた</sup>の形状がしっかり処理されていなかったかもしれない。09は体部・口縁ともに完形品であるが、08は口縁・頸部ともにほぼ失われており、栓は不明であるが、いずれもコルク栓であったのではなかろうか。用途としては、08は頸部が細口となっていることから化粧瓶もしくは薬品瓶、09は茶色半透明で紫外線による内容物の劣化を避ける目的であったと考えられることから、薬品瓶であったと思われる。

### (参考文献)

- 商工省工業品規格統一調査會『JES日本標準規格(縮版) 第13輯』1940 工業調査協會  
工業技術廳標準部『規格目録 日本規格 日本標準規格 臨時日本標準規格』1949 印刷局  
桃井勝「工場記号番号—昭和23年岐阜県陶磁器工業協同組合員工場記号番号—」『多治見市文化財保護センター研究紀要』第3号 1997 岐阜県多治見市教育委員会・多治見市文化財保護センター  
桃井勝「昭和16年3月 岐阜県陶磁工業組合連合会所属生産者別標示記号(統制番号) 昭和23年1月 岐阜県陶磁器工業協同組合連合会所属工場記号番号」『美濃の古陶』美濃古窯研究会会報No.8 1999 美濃古窯研究会  
財団法人岐阜県陶磁資料館『特別展 戦時中の統制したやきもの』2001 財団法人岐阜県陶磁資料館  
桜井準也『ガラス瓶の考古学』2006 六一書房  
桃井勝・河合竹彦ほか『萩谷コレクション 全国の戦時中のやきもの』2008 財団法人岐阜県陶磁資料館  
砂田普司『特別展 番号の付されたやきもの 戦時下の瑞浪窯業生産』2012 瑞浪市陶磁資料館  
安藤貞男「日中・第二次世界大戦中における陶磁器代用品について」『研究紀要』第14号 2012 瑞浪市陶磁資料館  
舟橋健「番号の付けられたやきもの～紀年銘のある製品と瑞浪の製品にみられる特徴～」『瑞浪市歴史資料集』第3集 2015 瑞浪市陶磁資料館  
平成ボトル倶楽部『日本のレトロびん』2017 グラフィック社  
萩谷茂行「陶磁器代用品の誕生と発展」『瑞浪市歴史資料集』第4集 2017 瑞浪市陶磁資料館  
永瀆功治・阿比留士朗ほか『鹿児島(鶴丸)城跡 御楼門跡周辺』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第205集 2020 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
田村規充 梶木敬太『名勝平和記念公園内遺跡 広島平和記念資料館本館下地点—広島市中区中島町所在—』公益財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第7集 2020 公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課  
亀島慎吾・太田樹也ほか『中城御殿跡(首里高校内)・櫛園跡 —首里高校校舎改築に伴う発掘調査(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第110集 2021 沖縄県立埋蔵文化財センター  
清水香ほか「第2章 新潟県五泉市新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター村松ステーション旧陸軍関連施設跡 第1次・第2次発掘調査報告」『新潟大学考古学研究室調査研究報告』第20号 2021 新潟大学考古学研究室

## 第3章 まとめ

### 第1節 太佐山高射砲陣地跡確認調査の意義

#### 1 はじめに

今回の太佐山高射砲陣地跡第2次調査(以下第2次調査)は、第1次調査で課題として挙げられていた兵士達の生活の場であった兵舎跡等が存在した陣地南側斜面の兵舎跡等の施設について測量調査を実施した。第1次調査とは異なり発掘調査を行っていないことから得られた情報は第1次調査と比べると限られたものではあったが、多くの成果を得ることができた。本節ではこうした調査成果をもとに現時点での太佐山高射砲陣地跡の評価を試みたい。

#### 2 調査成果

##### (1) 遺構について

第1章において先述のとおり太佐山高射砲陣地跡は通称太佐山丘陵の頂上部に砲座や司令部機能を有した施設が立地し、丘陵斜面のうち南側斜面を中心にその他の施設が立地している。その施設の性格については第1次調査報告書及び第2章で報告したように、伊藤厚史氏による兵士への聞き取りに基づいて比定している(伊藤2004)。現在の考古学では遺構の性格を発掘調査せずに把握することは事実上不可能であるが、今回のような戦争遺跡の場合は、聞き取りや記録によって把握することができる。ただし、実際に現地を調査することで、こうした聞き取りや記録に基づく評価を実証的に跡付けていかなければならないことは言うまでもない。先述のとおり第2次調査では発掘調査を行っていないため、確認した遺構の性格については確定したものではないことを断っておく。その上で確認できた遺構とその成果について述べる。なお、出土遺物については今回の調査が測量調査であったこともあり、特筆すべき遺物の出土を見ていないため、本節では割愛する。

##### 1 中隊事務所跡

斜面上部、北側の陣地中心部に一番近い場所に位置する。測量図からは3つの平坦地からなり、平坦地2とした平坦地にはモルタルとみられるコンクリート片が多数散布していた。このコンクリート片については、鉄網(ラス)が入っていることと、その散布状況から中隊事務所建物に伴う可能性が極めて高く、壁材の仕上げとして施されたモルタルであると考えている。今後発掘調査を行うことで正確な規模や構造を把握することができるであろう。また、竈跡として報告した煉瓦状のコンクリートを用いた遺構については、暖房と炊事を兼ねた目的の施設の可能性がある。後述する兵舎跡などの他の遺構と比べるとコンクリートを使用しており、竈跡があるなど、建物の造りが全く違うことから、中隊事務所であるとする聞き取り結果と矛盾するものではない。3つに分かれた平坦地は、斜面に沿って平坦地を造成して建てられた事務所建物(平坦地2)の周囲(南北)に設けられた空地であり、多くの兵士が行き来する中隊事務所にとって必要な空間であったと考えられる。なお、伊藤氏が兵士への聞き取りから指摘する陣地中心部へ通じるスロープ(緊急通路)は、この中隊事務所跡では2箇所確認した(通路1・2)。これも戦闘時に多数の兵士が行き来するために必要だったのだろう。

## 2 兵舎跡

兵舎跡は6箇所確認した。厳密には平坦地として確認した9箇所の内、炊事場跡、中隊事務所跡、被服庫跡として遺構の性格が比定された3箇所を除いた平坦地を兵舎跡と比定した。一見すると規模の違いはあまりなく、ほぼ同規模の平坦地にみられるが、盛土や通路などを除いた平坦地の実測結果によれば103～167㎡と広さに幅がある。また、その配置は不規則ながらも太佐山丘陵の地形に沿って配置されているようである。中でも兵舎跡1、2、4、5、6については、丘陵の尾根上に構築された道に沿って分岐する形で平坦面が造成されている。この尾根上の道は南側のため池(新池)につながっている。このため池は兵士たちの日常生活にとって貴重な生活用水となっていたようで、陣中記にもため池や生活用水に関する記述が登場している。後述するように複数の道がため池から陣地へ延びているが、この尾根上の道が一般的であったようである。このことから、尾根上の道を中心とする兵舎跡群が主な兵舎であったのではないかと推測する。

それぞれの兵舎跡の構造については、発掘調査を待つ必要があるが、兵舎跡1、2については戦闘空間である陣地中央部へ通じるスロープ(緊急通路)を確認している。伊藤報告(2004)によれば、兵舎跡1が昭和20年1月入隊組、兵舎跡2が昭和19年11月入隊組の兵舎であったとされる。これに対して陣地中央部へ通じるスロープ(緊急通路)がない兵舎跡4については初年兵教育用の兵舎であったとされる。この兵舎の性格については元兵士からの聞き取りによるものとのことであるが、伊藤報告(2004)ではスロープの有無からも兵舎跡の性格の違いを指摘しており、今回の調査でもこの違いを再確認することができた。

また、調査所見によれば兵舎跡1は急斜面に平坦地を急造して構築した可能性があるとされる。地形の制約を受けつつもある程度の規格性を有している砲座周辺の戦闘空間と比べると、これら兵舎群については場当たり的とも言える不規則な配置である印象を受ける。戦闘空間が最重要であった様子がうかがえる。

なお、兵舎跡3、5、6については、伊藤報告(2004)ではその性格は不明とされている。このうち兵舎跡3については炊事場跡及び中隊事務所跡に近接していることから、本報告では炊事関連施設や中隊事務所関連施設の可能性を指摘した。また、兵舎跡5については、伊藤報告(2004)における元兵士の証言図から物干し場の可能性を指摘した。平坦面の面積は兵舎跡2に次いで大きく、他の平坦地で認められる盛土がないことから比定している。兵舎跡6については元兵士の証言図にも記載がないが、調査所見から盛土を有する平坦地であることから兵舎1、2、4と同様の宿舎である可能性がある。

## 3 被服庫跡

伊藤報告(2004)において比定されていた平坦地であり、元兵士の証言に基づいている。具体的にどのような構造物であったかは今回の調査では不明である。道から長く延びた通路を有し、方形を指向する平面構造の他の兵舎跡と異なる平面であることから宿舎としての兵舎跡とは一線を画している。このことから被服庫跡と比定する蓋然性は高い。

#### 4 弾薬庫跡

第1次調査で確認した弾薬庫跡と同様の構造である。『てんりゅう隊陣中記』（第1次調査報告書参照）によると、昭和19年（1944年）10月に2棟の弾薬庫を建設したとあり、名古屋市域への空襲が開始される直前の11月には2棟の弾薬庫へ高射砲弾を満杯まで運び入れている。今回確認した弾薬庫2は、戦闘空間から離れているが、太佐山丘陵南側のため池（新池）沿いの道からは近く、斜面であることを差し引けば、弾薬の搬入にはそれ程不便ではなかったのではないだろうか。

#### 5 炊事場跡

第2次調査において中隊事務所跡と同様に構造物が残る遺構群である。竈跡、井戸跡、建物基礎（推定）を確認している。伊藤報告（2004）における元兵士の証言図によれば炊事場は新旧2か所あることになっており、浴場もこの区域にあたる。今回の調査ではこれまで旧炊事場とされる場所からは遺構・遺物を確認することはできなかった。しかしながら新たな遺構として竈跡1、2、3（推定）を確認した。いずれの遺構もコンクリート片や板状のモルタル片が散布しており、何らかの構造物が存在していたと考えられる。今回竈跡として報告した理由としては建物跡としては散布範囲が小規模であることが挙げられる。これらの遺構が竈跡であるとする、証言図とは位置関係が異なるものの旧炊事場に関連する遺構である可能性がある。

平坦地北側で確認した比較的大規模な竈跡は新炊事場に伴うものと考えられる。コークスガラ（石炭殻）を主体とするブロックで構築されている。平時であればコークスガラ（石炭殻）がこうした竈の建築資材として利用されることは一般的ではなく、太平洋戦争末期という時期における資材の不足を如実に物語っている。本遺構は樹木の繁茂や心無い人々による破壊行為によって伊藤報告（2004）の時点と比べて遺構の崩壊が進行している。その進行度合いは砲座などの遺構とは比べ物にならない程ひどいが、遺構の崩壊が進んだ背景には資材不足によるとみられるコークスガラ（石炭殻）の使用も一因であろう。この竈跡の上部構造物については現時点では不明である。地表観察では建物基礎は確認できていない。地下に埋没している可能性もあるが、簡単な屋根があるだけの構造物である可能性もある。

#### 6 その他

その他の遺構で特筆すべきは道（通路）である。兵舎跡同士をつなぐ生活のための道や戦闘空間へ素早く向かうためのスロープ等それぞれ性格が異なる道が存在する。中でもため池である新池から丘陵頂上の戦闘空間まで尾根上を伝うように延びる道は、最も主要な道であった可能性が高い。特に階段が設けられるでもなく、現在歩いてみると傾斜もきつい道である。第1次調査で報告した陣地北側から砲座のある戦闘空間へ至る道が幅も広く、傾斜も緩やかな立派な道であったことと比べると驚きすら覚える。これは高射砲を搬入するためという事情があったことを差し引いても、戦闘が最優先されていたことを示しているのではないだろうか。この他、人が通行することで自然発生的に形成された通路も複数確認した。その全てが太佐山高射砲陣地に伴うものであるかどうかは定かではないが、現時点で確認した遺構として報告することは意義があると考えている。

## 第2節 太佐山高射砲陣地跡の保存に向けて

### 1 問題の所在

太平洋戦争末期の昭和19年(1944年)10月から構築され、終戦までのわずか10か月の間存在した太佐山高射砲陣地跡は、戦後75年以上もの間大きな変化が加えられることもなく残っているとされてきた。この度公園整備に伴い実施した2回にわたる確認調査は事前の予想を上回るものであった。調査によって高射砲陣地跡の大半の遺構が残存していることが判明し、元兵士達が残した『てんりゅう隊陣中記』の存在は往時の様子を容易に想像することを可能にした。このような事例は全国的に見ても稀なことであろう。そして、この太佐山高射砲陣地跡は公園の一部として保存していく方向で検討されている。本節では今後太佐山高射砲陣地跡を保存していくに際して、今何が残っているのか、どこまでが分かっているのか、そして何が保存にあたっての課題となるのかについて触れることで、今後の保存に向けた一助とし、本報告の総括に代えたい。

### 2 太佐山高射砲陣地跡の特色

太佐山高射砲陣地跡は第1次調査報告書の小結において以下の5点が特色であると評価した。

- ア 小規模な丘陵頂上という限られた立地条件の中、大規模に造成して陣地を構築していることが分かった。
- イ 短期間で大規模な造成工事を行いつつも、砲座の水準は全て同一であるなど精度の高い施工を行っていた。
- ウ 6門の砲座が全て残存していることに加え、砲座付属施設も残存している可能性が高いことが分かった。
- エ 砲座以外の付属施設についてもほぼ全て残存している可能性が高いことが分かった。
- オ 半地下式掩蔽部や交通壕など、上空からの陣地の秘匿を目的とした構造が用いられていることが分かった。

上記の特色は戦闘空間である陣地中心部の調査結果を主としたものである。従って上記特色に今回の第2次調査の結果からうかがえる特色を追加する形での再評価を試みる。

- カ 兵舎を中心とした非戦闘空間についてもほぼ全て残存していることが分かった。

第2次調査においては測量調査のみであったため、本来であれば得られる情報は第1次調査よりもかなり限定的なものになるはずであった。しかし実際には往時の地形が良好に残存しており、証言記録等から施設の性格を否定することが可能であった。2回にわたる調査の結果、太佐山高射砲陣地はほぼ全域が良好な状態で残存していることを確認できた。

- キ 兵舎等の配置は、戦闘時を強く意識した配置となっていた。

調査で兵舎跡として否定した平坦地の多くは太佐山丘陵頂部にある砲座周辺(戦闘空間)に近接しており、兵舎跡1については、他の兵舎との間の戦闘空間に近い位置に何とか造成した様子もうかがえる。また、中隊事務所跡についても同様の位置関係にある。さらに、戦闘空間へ通じる近道としての通路(スロープ)が設けられていることも確認した。速やかに戦闘配置につくことができるような配置となっていることが分かる。

また、戦闘空間である陣地中心部は痩せ尾根を大規模に造成して平坦地を築いていたのに対して、兵舎跡群は元々の傾斜地を利用して最低限の平坦地を造成する程度であり、陣地中心部のような施設配置の斉一性は見られない。以上の点からあくまでも戦闘最優先で築かれた陣地であったことが看取できよう。こうした様子は『てんりゅう隊陣中記』（第1次調査報告書参照）においても散見される。

ク 施設の用途や戦闘の状況を詳細な証言記録によって復元することができる。

先の確認調査報告書において掲載した『てんりゅう隊陣中記』や、本報告に参考として掲載した陣地用地に関する記録等は、太佐山高射砲陣地跡の遺構を理解することに大きく寄与している。本市には太佐山高射砲陣地跡以外にも戦争遺跡が存在しているが、文献資料はほとんど残っていない。太佐山高射砲陣地跡においては陣中記のような詳細な戦闘記録も残されており、現地の遺構・遺物だけでは分かりえない具体的な兵士達の動きを知ることができる。これは多くの戦争遺跡にはない太佐山高射砲陣地跡の特色であると言える。

以上、2次にわたる調査から判明した太佐山高射砲陣地跡の特色を8点挙げた。こうした特色から、太佐山高射砲陣地跡は陣地全体が残り、記録も残るといって全国的に見ても希少な戦争遺跡であると言える。

### 3 太佐山高射砲陣地跡の保存における課題

前項において、太佐山高射砲陣地跡が全国的に見ても希少な戦争遺跡であることを指摘した。太佐山高射砲陣地跡の調査の契機となった緑陽公園整備事業において、太佐山高射砲陣地跡は保存する方向で検討されている。ここでは、保存にあたっての課題について考えてみたい。

まず挙げられるのは、遺構の保護である。陣地中心部には半地下式掩蔽部や交通壕をはじめとする地面を掘りこんで構築した遺構が数多く存在する。調査ではこうした遺構のほとんどで法面の崩壊が進んでいることが判明している。素掘りの遺構であることから、こうした遺構をどのようにして崩壊を防ぎ、保存していくのかは大きな課題である。

次に、丘陵全体に繁茂した樹木の問題がある。昭和21年(1946年)に米軍が撮影した航空写真(第6図)では、太佐山高射砲陣地跡周辺に樹木は存在しない。兵舎群のある斜面についても建物が確認でき、全域に樹木があったわけではない。その後75年以上もの期間で生育した照葉樹を中心とした樹木の根は遺構に複雑に入り込みこれを破壊している。炊事場跡における竈跡(図版第8参照)がその顕著な例である。これに加えて竹林の繁茂が大きな問題となっている。放置された竹が増殖することで生じる竹害は全国的にも問題となっている。太佐山高射砲陣地跡では、まさに竹害が発生し、既存の樹木を駆逐している様子が手に取るようにわかる。第1次調査範囲である戦闘空間においては、竹は既存の樹木に入り込み、増殖している段階であり、今回の第2次調査範囲である兵舎群のある生活空間においては竹林が卓越し、歩行することすら困難な文字通りの放置竹林となっている。竹の地下茎は浅く広範囲に広がり、一部でも残ると再び竹が生えてくるため、伐根は手間のかかる作業である。太佐山高射砲陣地跡のような戦争遺跡の場合、遺構は表土直下もしくは露出していることが多く、竹が繁茂している場所ではその地下茎が遺構に入り込んでしまっている。遺構を保護しつつ、竹や他の樹木による遺構の破壊をいかに防ぐべきかについては大きな課題であると言える。

最後に保存すべき範囲が広大であることがある。2次にわたる調査で太佐山丘陵の頂上部から南側にかけての広大な範囲が太佐山高射砲陣地跡であることが明らかとなった。そしてその全てが良好な状態で残存していることから、その保存・活用範囲をどこまでにするのかが課題となる。本質的には全ての遺構を保存し次代へ伝えていくべきであろうが、活用を図る上では遺構を保護しつつも公開する必要がある。さらに、見学者が安全に見学できるような通路などの施設の整備も必要である。太佐山高射砲陣地跡は2万㎡余りもの範囲に遺構が点在しており、その性格も多岐にわたる。保存と活用を両立できるような方策を検討していかななくてはならない。

### 結語

これまで太佐山高射砲陣地跡の調査成果と、そこから明らかとなった特色、そして保存に向けた課題について述べてきた。2次にわたる調査によって、これまで判然としなかった太佐山高射砲陣地跡の姿が明らかとなり、文献資料や証言記録との照合によって陣地がどのように使われていたのかも分かってきた。太佐山高射砲陣地跡は、太平洋戦争末期における本土防空の具体的な様相を知ることができる戦争遺跡であり、陣地全体が残っている高射砲陣地跡である。これに類する事例は管見の限りそれほど多くはなく、笠寺高射砲陣地跡(愛知県名古屋市)が代表例であるが、全ての遺構が現存しているわけではない。

(宮澤浩司)



笠寺公園(名古屋市南区)の見晴台考古資料館屋外展示施設整備状況(高射砲砲座)



太佐山より名古屋市緑区方面を望む（ドローン撮影）



太佐山より伊勢湾方面を望む（ドローン撮影）

## 第4章 卷末資料

### 第1節 新発見資料の紹介・検討

#### 1 新資料発見の経緯

今回、第1次・第2次の確認調査の最中、東海市役所において合併前の旧上野町役場時代に作成された2綴りの文書が見つかった。

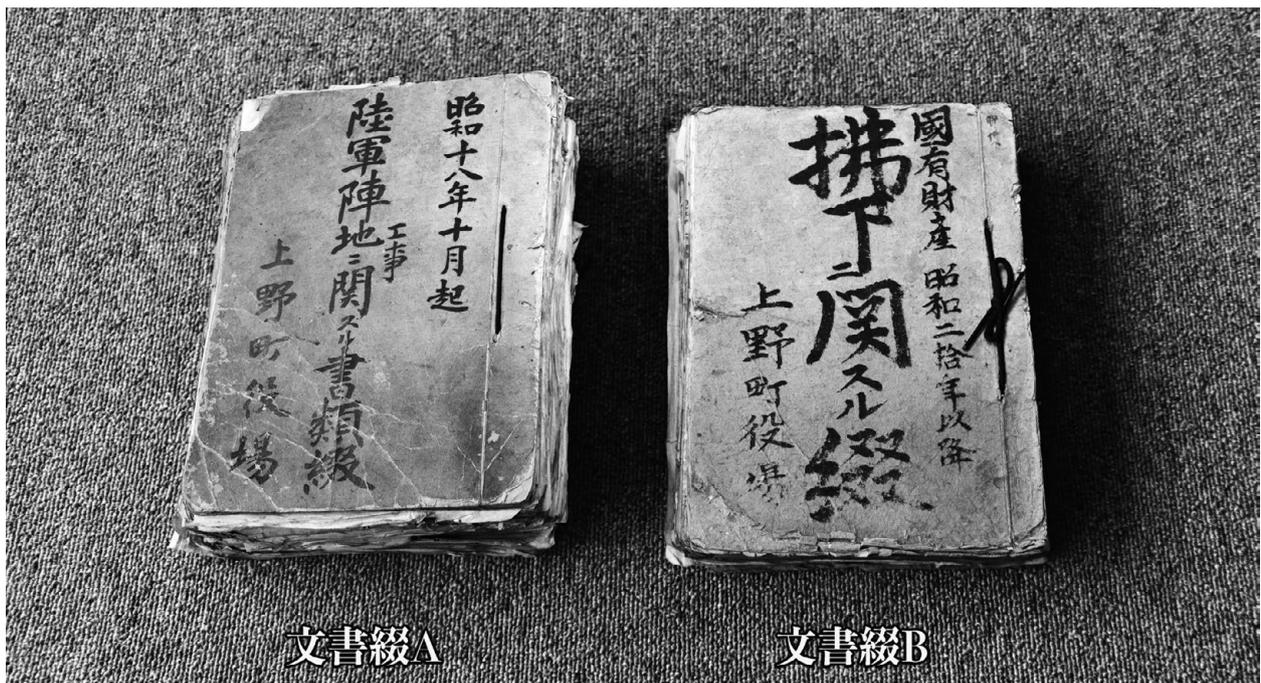
見つかった資料はそれぞれ『昭和十八年十月起 陸軍陣地工事ニ関スル書類綴』と『国有財産昭和二十年以降 拂下ニ関スル綴』の二冊である。

これらの資料はまるで太佐山高射砲陣地跡の調査に合わせたかのように発見されたが、偶然時を同じくして発見されたものである。発見された資料は、国有財産の払い下げに関する書類であったため、永らく保管されてきたものであったようである。旧上野町時代を経て東海市となってからも道路に関する書類と共に管理されてきた。しかしながら、近年保存文書の見直しを行った際に、本資料を含む複数の書類は既に役割を終えた文書であると判断されたことから、郷土資料としての価値はあるかどうか社会教育課へ問い合わせがあったため、発見に至ったものである。

その後、本資料を含む旧町時代からの書類群は、東海市立郷土資料館の資料として新たに受け入れて収蔵することとなった。今回、第2次確認調査の報告書作成にあたり、太佐山高射砲陣地の構築とその後の返還の一連の土地に関する手続きが詳細に記録されており、太佐山高射砲陣地の歴史を理解する上で重要な資料であると考えられることから、巻末資料として掲載するに至った。

なお、掲載にあたっては、個人名などについては個人情報の観点から非公開処理を施した。ただし、報告者である坂野俊哉氏の祖父にあたる人物（故人）が文書中に土地所有者として登場していたことが資料調査中に判明した。この部分については掲載にあたって許可を得ていることからあえて非公開処理を施していない。

（宮澤浩司）



第36図 新発見文書

## 2 太佐山高射砲陣地跡地の払い下げに関する一例について

今回の高射砲陣地跡現地調査を契機に、東海市役所で当時の文書綴二冊が発見された。発見の経緯に関しては前項に詳しいのでそちらを参照されたい。

この資料により陣地建設に関連し、土地の接収から終戦を経て払い下げに至る大まかな経緯が判明した。予定地内には偶々筆者の祖父が所有していた山林(120坪)が含まれており、当時の状況を知るため坂野家が所有していた土地の払い下げに至る大まかな経緯を紹介し、文書綴からの個々の文書を引用しつつ説明を試みる。

**文書綴 A：『昭和十八年十月起 陸軍陣地工事ニ関スル書類綴 上野町役場』(第36図左)**

(以下 S18 と略、個々の文書は4桁の通番とし 0001 から 0505 まで。ただしこれはデータ整理用の数字であり書類の枚数ではない)

**文書綴 B：『國有財産 昭和二十一年以降 拂下ニ関スル綴 上野町役場』(第36図右)**

(以下 S20 と略、同上で 0001 から 0289 まで)

両方とも多くの文書を紐で綴じ厚紙の表紙を付けた文書綴であり、それぞれ数百枚以上の文書が綴じられている。表紙の厚紙には当時の管轄であった上野町役場の名前が墨書されている。

先ず文書綴 A であるが、内容の大半は昭和 19 年(1944 年)4 月に竣工した知多飛行場(三菱重工業名古屋航空機製作所の試験飛行場で、30ヶ月もの難工事を経て完成。俗に大府飛行場とも)の建設に関わる土地収用関係の文書であった。それらのなかに高射砲陣地関係の書類が断片的に見られる。

太佐山の陣地については関係者の証言などから、用地選定後直ちに(昭和 19 年(1944 年)10 月上旬から)建設工事が本格化し、下旬には早くも高射砲 6 門を山頂に設置している。砲床について、設置当初は資材不足などの諸事情により木製の井桁砲床(第 40 図)として設置され、翌年春までに強固なベトン砲床(第 41 図)に造り替えられている。

建設は狭小な山頂(痩せ尾根)の削平を経て砲座を中心とした戦闘区域の建設が最優先され、次第に山腹の各施設を整えていったものと推測される。

このように平時に於ける軍関係の施設建設なら用地の接収は起工以前に終了していたはずであろうが、戦況悪化下での緊急な陣地建設という事情もあつてか、個々の地主との交渉記録はほとんどみられない。

なお、太佐山陣地の西北約 600m の丘陵中腹には先行して平山陣地が建設されており、そこに配置された「ながら隊」関係の文書が何枚か散見される。太佐山陣地との関係も深いので、おおむね時系列に従い主な文書を紹介する。

● S18-0032(「陸軍」名入りの便箋)(第37図)

連絡

陣地決定ノ件通牒

昭和十九年十月十三日 ながら隊長(杉平印)

上野町町長殿

首題ノ件別紙要図ノ如ク決定致シタルニ付朱線内土地所有者ヲ左記様式ニ依リ本十三日十二時迄ニ五部提出相成度

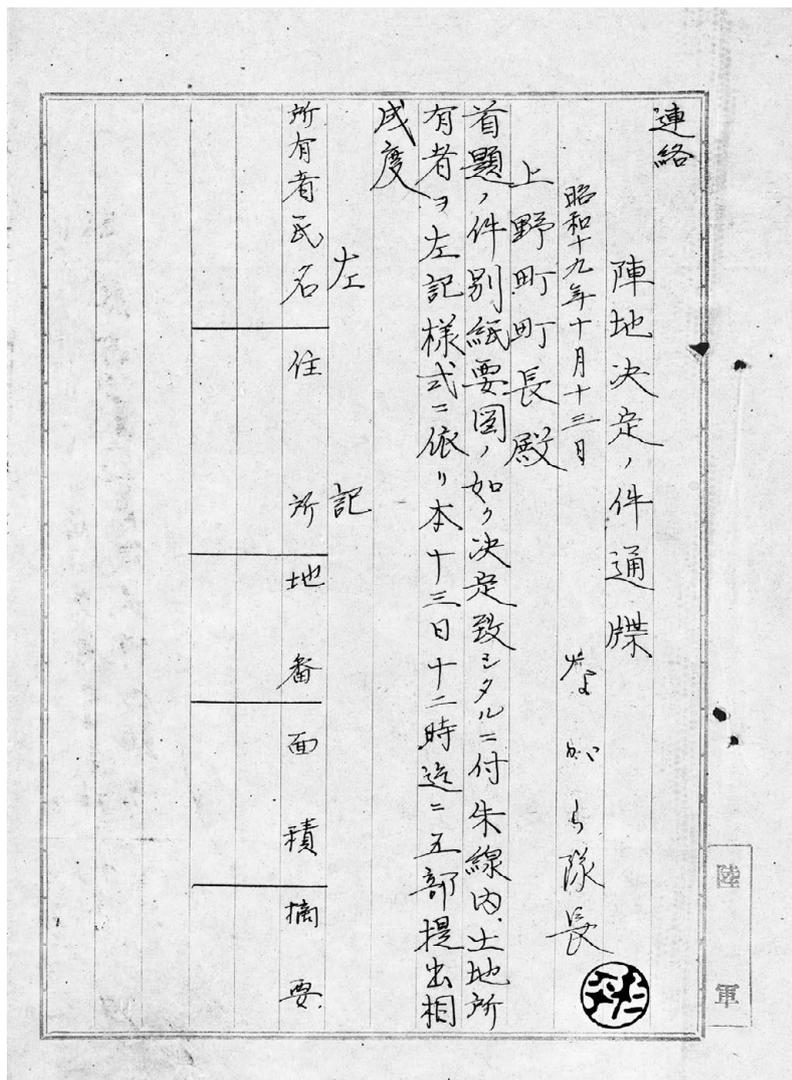
左記

所有者氏名 住所 地番 面積 摘要

(以下8ページにわたり66名の所有者氏名ほかが列挙)

※いくつかの他の記録では、平山陣地は昭和19年(1944年)9月からの稼働が記録されており、多少の齟齬がみられる。また、後述する太佐山陣地の建設も10月上旬から開始されたという証言もあり、両陣地が同時に建設されたことになり、記録の混乱がみられる。

(以下※印は筆者註)



第37図 S18-0032

● S18-0063

昭和拾九年十一月〇日

知多郡上野町長早川英次郎

殿

農作物除去御願ヒノ件

本日ながら部隊より陣地工築上貴殿所有地タル

南玄蕃口地必要地トシテ指定相成候ニ付現地

農作物至急除去相願度趣キノ通知方依頼

相受候条此段及依命通牒候也

(以下に9名の氏名)

---

※前資料に関連した、陣地決定後土地所有者への農作物除去依頼。陣地の建設工事と同時進行で出されたものと推測。陣地予定地が耕作地であった状況を示すもの。

● S18-0066(「愛知縣」名入りの規格便箋)

經第九九二號

昭和十九年十二月六日 愛知縣土木部長(角印)

知多郡上野町長殿 (丸印: 受付第44號 19.12.8 知多郡上野町役場)

陸地測量標使用ノ件通知

標記ノ件ニ関シ陸地測量部ヨリ貴町所在ノ三角点

ヲ中部第四一〇二部隊ニ於テ測量ノ爲自昭和十九年十二月一日至二十年三月三十一日

期間内使用相成旨通牒有之候条御承

知相成度

---

※平山陣地または、すでに建設の始まっている太佐山陣地に関連する測量ではないかと推測される。受付印昭和19年12月8日の前日、東南海地震(M8.0)が発生している。

● S18-0067(「愛知縣知多郡上野町役場」名入りの規格便箋)

地上物件移転並収益補償申告者氏名

---

※以下28名の氏名が記載されており、そこに祖父である坂野茂渡名も記載されている(初出)。日時の記載は無い。

● S18-0109(「陸軍」名入りの便箋)

至急(赤字)

陣地偽装用樹伐採ニ関スル件依頼

昭和二十年二月二十四日                      ながら隊長(杉平印)

上野町長殿

今般上司ヨリ徹底的陣地偽装実施ノ指示有之シ

爲陣地附近左記場所ノ闊葉樹若干伐採ヲ所有主

へ承諾方依頼被下度願上候

尚之ガ御回答ヲ相纏メ二月二十八日迄ニ御通知願上候

左記

北玄蕃、兔廻間、欠下、石原、

---

※此の依頼文書を受け、平山陣地周辺の山林所有者に対し町長名で発せられた同様の依頼書が綴られている。既に空襲が激化しており、樹木による陣地の擬装がどれほどの効果を発揮したかは不明である。

● S18-0478(わら半紙にガリ版刷り)(第38図)

極秘(朱印)

受付第484号 20.2.24 知多郡上野町役場(日付丸印)小島印

東海二防發第一〇號

洞窟等ノ調査依頼ニ関スル件通牒

昭和二十年二月二〇日      東海第二部隊長(部隊長角印)

上野町長殿

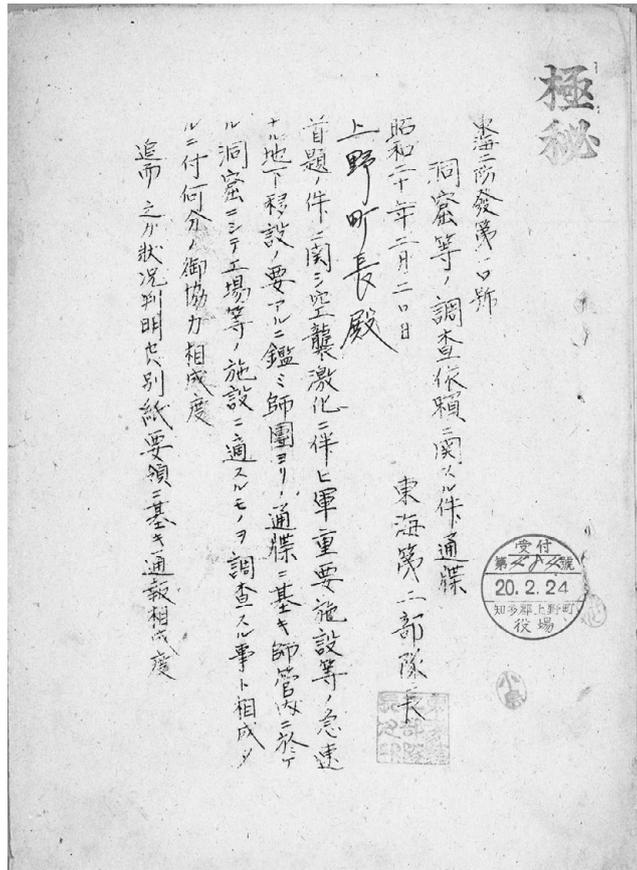
首題ノ件ニ関シ空襲激化ニ伴ヒ軍重要施設等ノ急速

ナル地下移設ノ要アルニ鑑ミ師團ヨリノ通牒ニ基キ師管内ニ於ケ

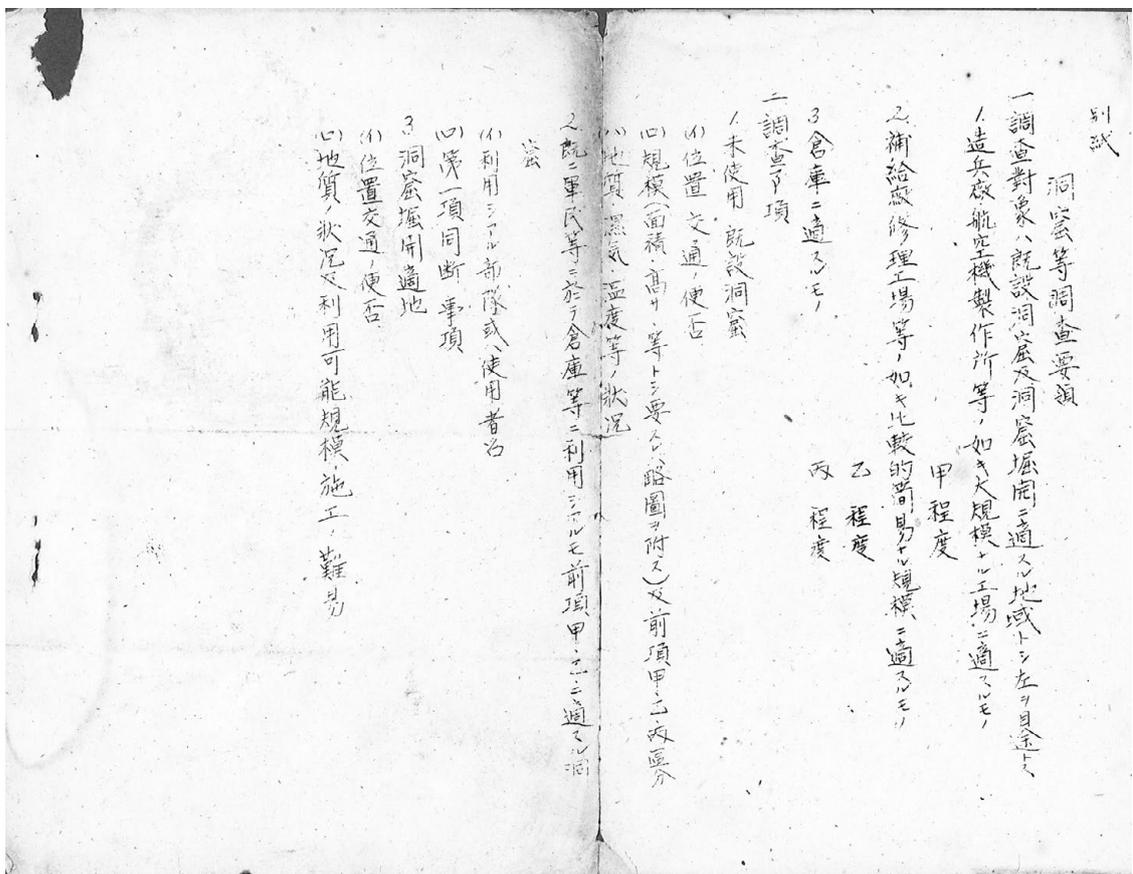
ル洞窟ニシテ工場等ノ施設ニ適スルモノヲ調査スル事ト相成タ

ルニ付何分ノ御協力相成度

追而 之ガ状況判明セバ別紙要領ニ基キ通報相成度



第38図 S18-0478



第39図 S18-0479

● S18-0479(第39図)

別紙

洞窟等調査要領

一. 調査対象ハ既設洞窟及洞窟堀開ニ適スル地域トシ左ヲ目途トス

1. 造兵廠・航空機製作所等ノ如キ大規模ナル工場ニ適スルモノ 甲程度
2. 補給廠修理工場等ノ如キ比較的簡易ナル規模ニ適スルモノ 乙程度
3. 倉庫ニ適スルモノ 丙程度

二. 調査事項

1. 未使用 既設洞窟
  - (イ) 位置 交通ノ便否
  - (ロ) 規模(面積・高サ・等トシ要スレバ略圖ヲ附ス)及前項甲乙丙區分
  - (ハ) 地質・濕氣・温度等ノ狀況
2. 既に軍民等ニ於テ倉庫等ニ利用シタルモノ前項甲・乙・ニ適スル洞窟
  - (イ) 利用シタル部隊或ハ使用者名
  - (ロ) 第一項同断事項
3. 洞窟堀開適地
  - (イ) 位置交通ノ便否
  - (ロ) 地質ノ狀況及利用可能規模・施工ノ難易

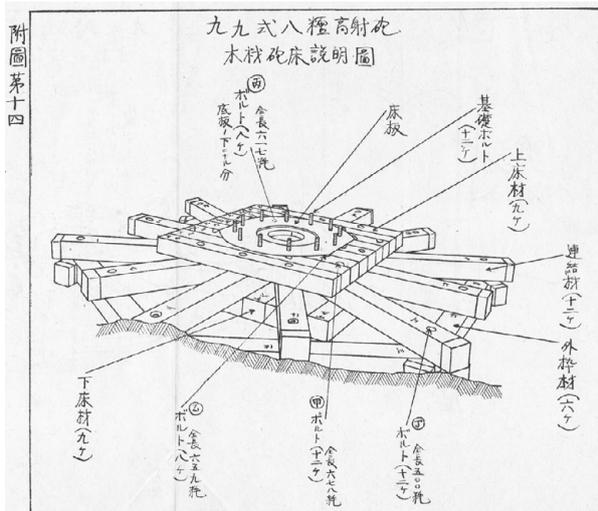
---

※各種軍需工場等の疎開先を求め発せられた有名な文書。B29による空襲激化し、前月には三河地震発生という状況下。岐阜県可児市久々利に残る三菱発動機の地下工場跡や三重県関市の鈴鹿海軍地下工場跡などは此の極秘通牒の結果掘削されたもの。

昭和20年(1945年)8月15日のポツダム宣言受諾を受け、太佐山陣地でもさまざまな動揺があったようである。『てんりゅう隊陣中記』によると、同年9月から晩秋にかけて、残留を命じられた12名を除き朝鮮籍兵や他中隊からの転属兵たちも次々に帰国手続や原隊復帰に就いた。12月には米兵7名が火器処理のために太佐山陣地に現われ、武器・弾薬の引き渡しや火器や砲座の爆破処理作業がおこなわれた。第4砲座のベトン砲床に見られた爆炸の痕跡(第41図)は、この時のものである。

それからしばらくの間は残留兵たちの手によって砲座の埋め戻しなどがおこなわれたようで、第1・第6砲座は周囲の掩体の土を利用して砲床を埋め戻し、土地全体がほぼ水平になるように整地されていた(第42図・第43図)。しかし、砲座を中心とした全ての施設の埋め戻しが終わることなく、昭和20年末には残務処理終了との扱いで復員扱いとされたようである。

昭和20年2月の、『洞窟等ノ調査依頼ニ関スル件通牒』以後、終戦を経て昭和21年(1946年)の前半に至るまでの期間の高射砲陣地に関する文書は見られない。



附圖第十四

第40図は第一陸軍研究所(1944)より  
第40図 木製井桁砲床説明圖



第41図 第4砲座検出状況 南西より



参考写真：掩体と砲側弾薬庫を含む砲座ジオラマ



第42図 第1砲座伐開後の様子



第43図 第6砲座伐開後の様子

次に文書綴Bだが、国有財産の払い下げ手続の記録文書が綴じられている。内容は高射砲陣地や飛行場跡地関係の書類が大半を占める。

● S20-0003(「愛知縣知多郡上野町役場」名入りの12行便箋)

一号 官有雜種財産拂下申請処理表

名和天龍隊 拂下事項 二一、五、二一、許可

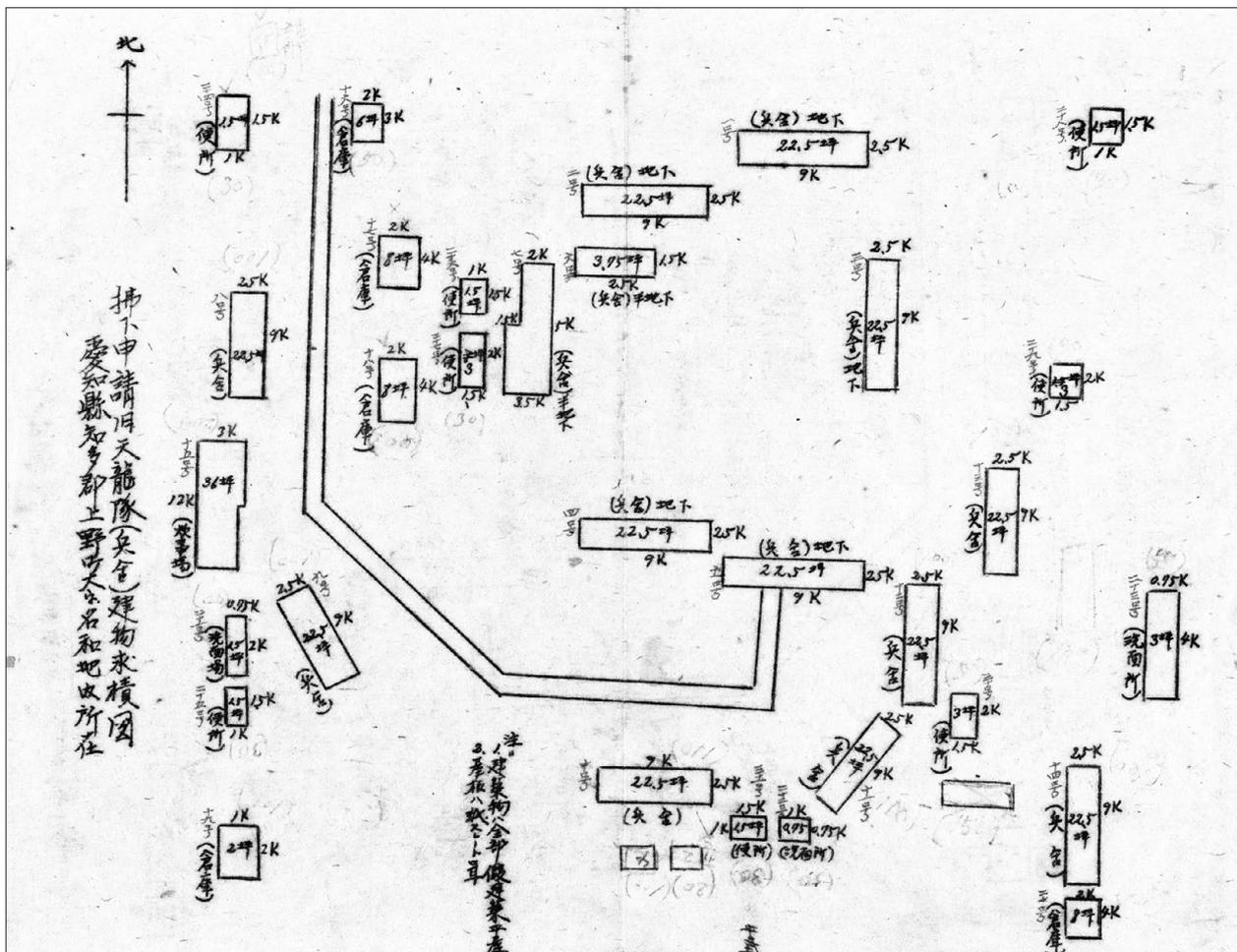
※種目として建物や土地が挙げられ、姫島、荒尾などにあった諸施設名が一覧表になっている。太佐山陣地の建物に関しては「名和 天龍隊」と記され、昭和21年5月21日に払い下げ許可と記載。

● S20-0042(第44図)

拂下申請旧天龍隊(兵舎)建物求積図

愛知縣知多郡上野町大字名和地内所在

※終戦直後、太佐山陣地に残された建物の配置模式図と、個々の面積を記入したもの。



第44図 S20-0042

● S20-0126(第45図)

委任状

旧天龍隊陣地復旧費並ニ四月以降ノ借地ニ充当スル為メ  
全陣地建物無償譲渡相成候ニ就テ之レガ処理ヲ上野  
町長ニ一任致シ何等異議申立テ致サズ候

委任状依テ如件

昭和二十一年六月十五日

〇〇〇〇 印

〇〇〇〇 印

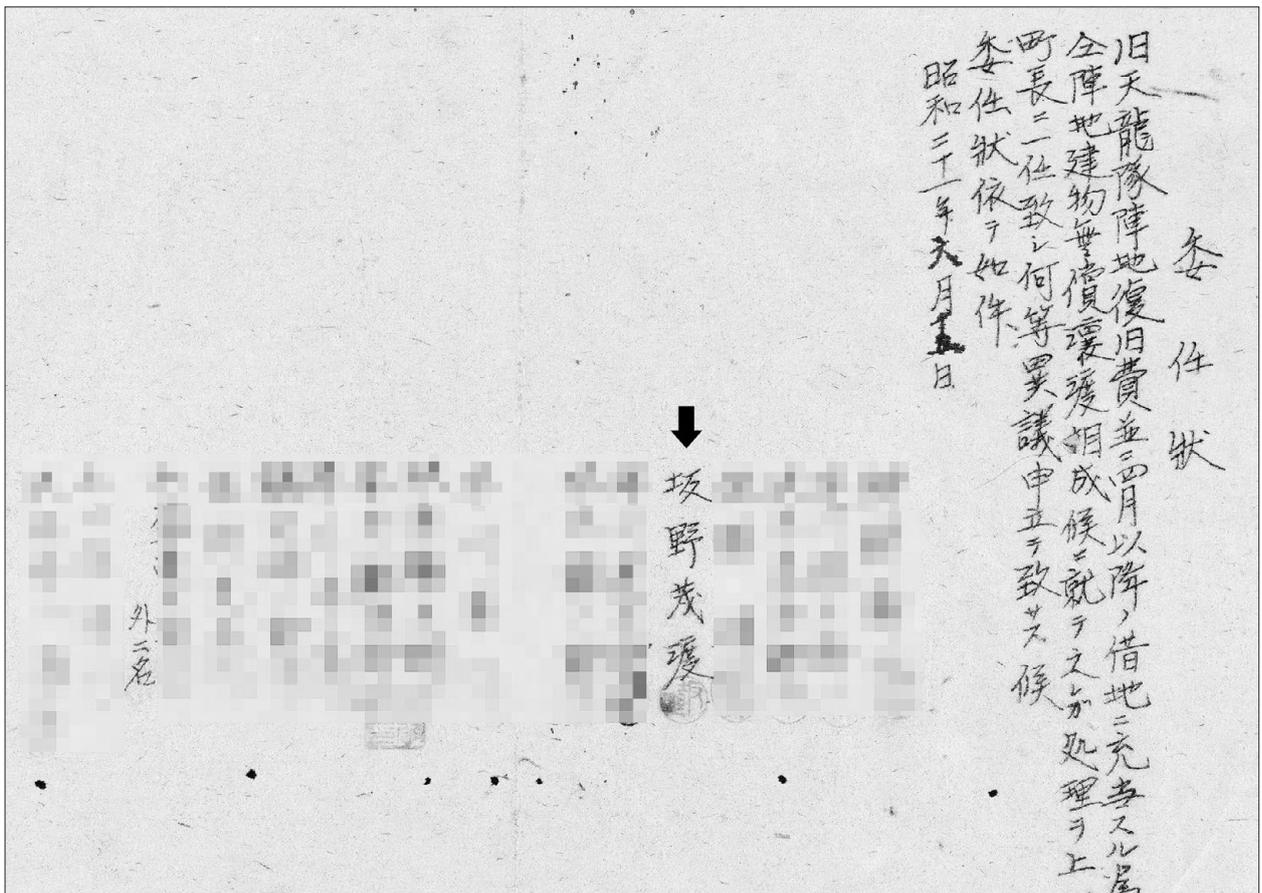
〇〇〇〇 印

〇〇〇〇 印

※坂野茂渡 印

(以下11名の氏名と捺印)

※元の地主に対しては、終戦後残された陣地の建物を配分した上で払い下げ扱いとし、借地料との相殺処理がおこなわれた。事実上異議申立は不可能であったと推察される。



第45図 S20-0126

● S20-0226-0227(「知多郡町村公用紙」名入りの規格便箋)

天龍隊ノ拂下建物ト其ノ代價表

※1から34までの各施設と部外の監視所の大きさ(間)・坪数・単価・価格と受領者が記されており、34が「砲台6ヶ」で面積は空欄で単価56円、価格480円、某氏が受領者として記載されている。この文書とは別に、この表の下書きと考えられる罫線の無いメモが1枚綴じられており(S20-0202)(第46図)、そちらには「砲台6ヶ」単価80×6=480円と書かれている。受領者相当の部分には「(個人名)3 神明堂2 (個人名)1」という記載があり、この「神明堂」が祖父の経営していた薬局の屋号であることから、払い下げ処理のいずれかの段階で現在にまで残る砲座2基を割り当てられていたことが判明した。また、合計金額が記されたすぐ下に「但坪価ノ約七割ノ代金ニテ精算ス」とも記されており、メモに記された単価80円が表では7掛けの単価56円となっているが、6座の合計価格は336円となるべきところが480円と表記されている。このあたりの経緯は不明である。

天龍陣地建物大ナ並ニ 概詳價額						
番号	大ナ(尺)	大ナ(間)	大ナ(坪)	単価	價額	
1	15 <sup>尺</sup> × 20 <sup>尺</sup>	3 <sup>間</sup> × 3.3 <sup>間</sup>	10 <sup>坪</sup>	280.40 <sup>坪</sup>	× 10 = 2804.00	上野町 (親戚)
2	玄 洞			28.	× 1 = 28	
3	7 × 4	1.16 × 0.67	0.5	17.30	× 0.8 = 13.84	
4	27 × 12	4.5 × 2	9	620.100	× 9 = 5580.90	上野町 ( )
5	27 × 12	4.5 × 2	9	756.120	× 9 = 6804.00	上野町 ( )
6	(10 × 66) - 1.5	(3 × 11) - 1.5	31.5	2205.100	× 31.5 = 69457.50	
7	(20 × 50) + (17 × 26)	(3.3 × 5.3) + (2.83 × 2.2)	39.5	5530.200	× 39.5 = 218253.00	上野町 ( )
8	5 × 13	0.83 × 2.16	1.7	48.40	× 1.7 = 82.28	三ツ包 ( )
《 中略 》						
28	53 × 11	8.83 × 1.53	16.1	2818.250	× 16.1 = 45373.75	三ツ包
29	(31 × 13) + 2.5	(5.16 × 2.16) + 2.5	13.65	1911.200	× 13.65 = 26083.20	三ツ包
29'	17 × 10	2.83 × 1.66	3.7	518.200	× 3.7 = 1917.40	三ツ包
30	53 × 11	8.83 × 1.83	16.1	2480.220	× 16.1 = 39931.20	三ツ包
31	53 × 11	8.83 × 1.83	16.1	2818.250	× 16.1 = 45373.75	
32	56 × 11	9.3 × 1.83	17	2142.180	× 17 = 36415.80	
33	地下道	14.60 <sup>間</sup>		2100	× 60 = 126000	
34	砲台	6		480	× 6 = 2880	
部外	監視所			120	× 1 = 120	
				計	42,275.00	
				但坪価ノ約七割ノ代金ニテ精算ス		

第46図 S20-0202(関係分)

● S20-0228(土木設計用紙(乙)庶49)(第47図)

旧天龍隊陣地復旧補償料(借地料含ム)建物に依る相殺処理状況書

※坂野茂渡欄では120坪の借地面積に対し一坪あたりの借地料金は43円20銭で、120坪の内訳は甲種30+丁種90となっている。復旧坪数は390坪で復旧料金が780円、支払合計は822円20銭と記されている。欄の末尾に「松ノ木代表者坂野茂渡」名の記載もあり、こちらの支払合計は2,200円と記されている。「松ノ木代表者」の意味は不明だが、伐採した松の保証額であろう。

計		雑費		松ノ木代表者		坂野茂渡		工		火		旧天龍隊陣地復旧補償料(借地料含ム)建物に依る相殺処理状況書	
数量	単位	数量	単位										
120	坪	120	坪	30	坪	90	坪	30	坪	90	坪	30	坪
43.20	円	43.20	円										
4176.00	円	4176.00	円	1296.00	円								
780.00	円	780.00	円										
822.20	円	822.20	円										

第47図 S20-0228

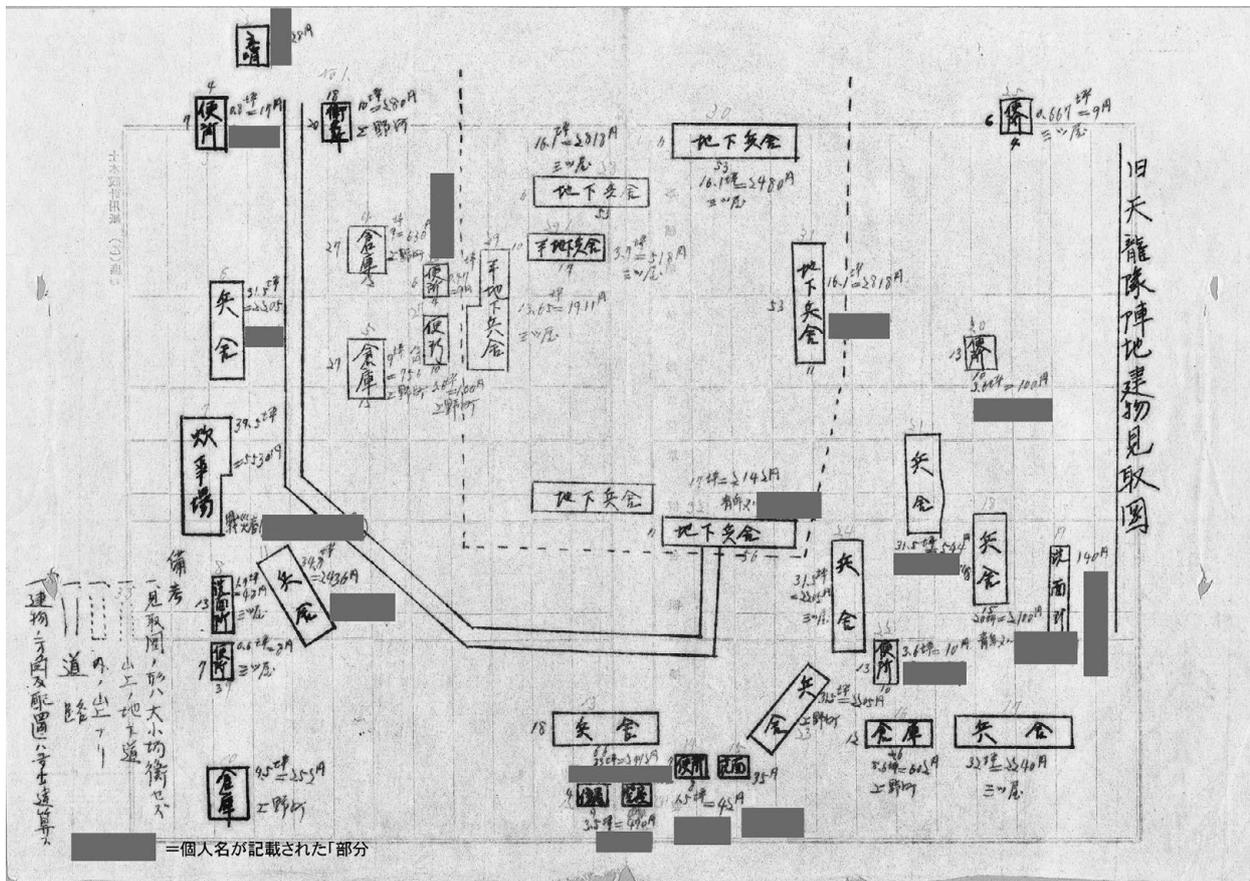


第48図 砲座部分調査風景(第1次)

● S20-0229(第49図)

旧天龍隊陣地建物見取図

※塗りつぶした部分には払い下げた個人名が記されていた。



第49図 S20-0229

● S20-0271(「愛知縣町村公用紙」名入り便箋)

上野町役場發第五二七号(朱梓印)

昭和二十一年六月十三日

愛知縣知多郡上野町長 早川英次郎(角印)

愛知縣知事早川三郎殿

元軍用施設高射砲陣地建物復旧料相殺拂下申請書

左記ニ依リ元軍用施設高射砲陣地建物復旧料トノ相殺ニ依ル拂下

ノ件御認可相成度配置図相添此段申請致シマス

記

一、所有地及名稱並ニ數量

知多郡上野町大字名和地内

元天龍隊陣地建物

數量 兵舎 七ヶ 二一〇坪

地下兵舎	五ヶ	六七坪五(全ド腐敗ス)
半地下兵舎	二ヶ	一四坪八( 〃 )
炊事場	一ヶ	三六坪
倉庫	五ヶ	三七坪
洗面場	三ヶ	五坪二五
便所	八ヶ	一六坪二五

## 二. 必要事項

1. 物件ノ腐敗並ニ破損ニ加フルニ復旧工事ノ至難ナルニヨリ、相殺処理ハ困難ナルカト思ツテ居リマシタ処、意外ニヨク關係者ニハ此ノ点諒解ガデキ今後違議ナキモノニ付キ、至急御認可賜リ度御願申上ゲマス
2. 本建物内ニハ内務省關係ノ保管物が一部分今尚有リマスガ此ノ分ニハ觸レズ又ハ撤去事ニ各個序々ニ処理シ御迷惑ヲ煩サズ尚此ノ方意外ノ建物ハ至急処理シ急速ナル復旧ニ依リ増産致シタク、依ツテ至急御認可下サレ度重ネテ御願申シ上ゲマス  
尚出来得ル事デシタラ、保管物資ノ急速ナル撤去方御斡旋下サラバ幸甚ト思イ併シテ御懇願申シ上ゲマス

太佐山陣地内に関しては、戦後まだ建物等が残っている時点で各施設の面積や構造の調査がおこなわれ、基本的な評価が為されていた。残された文書に見る限り、陣地跡の払い下げ許可が下りたのは昭和21年5月のことである。

同年6月15日の日付が記された復旧費などの処理に関する委任状(S20-0126)には16名の連判があるが、これらは『拂下建物ト其ノ代價表』(S20-0226)の受領者に見られる個人名とほぼ同じである。加えて、これら個人名の他に「名和国民学校」「上野町託児所」「上野町隔離病棟」などの施設名も見られ、僅かながら地域にも還元された様子を窺うことができる。

軍施設の払い下げに関しては基本的に国有財産である以上さまざまな制約があり、基本的な調査がおこなわれたはずである。最終的には天龍隊陣地復旧保償料明細書(S18-0440)と天龍隊陣地ノ復旧保償料支拂書(S18-0441)の書類では、復旧補償料として坂野茂渡に15円が支払われた扱いになっていた。当時の物価を現在に換算すれば3,000円程度になる。

今回発見された資料によって、戦時中に接収された不動産や器物についても、接収時の記録に基づき、想像以上に詳細な調査を経た上で土地所有者への払い下げがおこなわれていた様子を知ることができた。

今回紹介した経緯は、ごく大まかに文書綴から抽出された情報によるものである。文書綴には知多飛行場の払い下げに関する書類も多く含まれており、これらを分析することによって旧上野町に於ける戦後処理の実態を知ることができる。今後も機会が有ればこれらの経緯を明らかにしていきたい。  
(坂野俊哉)

第2節 各種参考資料

1 出土遺物の検討

第2章第2節で述べた遺物に関する記載をここで、参考資料などを含めて補完する。

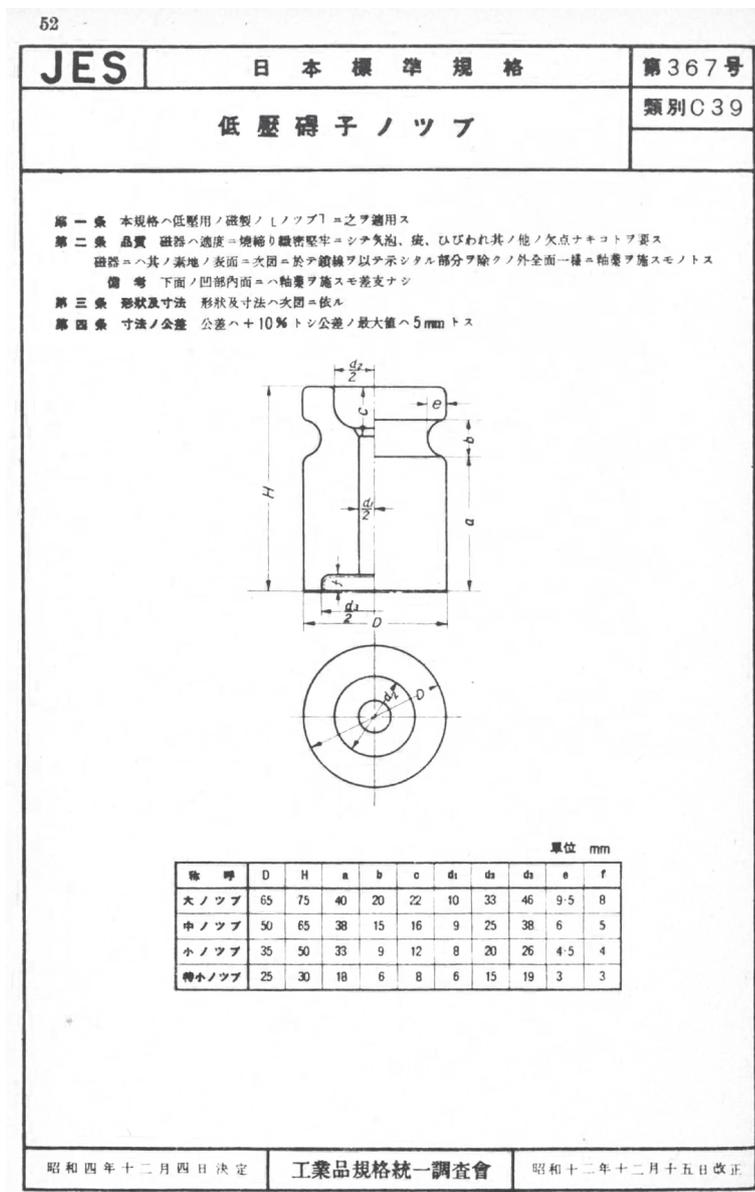
1 低圧碍子について

昭和15年(1940年)に商工省から発行された『JES日本標準規格(縮版)第13輯』には、「日本標準規格第367号」の「低圧碍子ノップ」が4種類規格されており、それぞれ「大ノップ」「中ノップ」「小ノップ」「特小ノップ」である。出土した低圧碍子はいずれにも該当しない。

規格資料によると「低圧碍子ノップ」は「磁製」で、品質は「適度ニ焼締り緻密堅牢ニシテ気泡、疵、ひびわれ其ノ他ノ欠点ナキトヲ要ス」「素地ノ表面ニ次図ニ於テ鎖線ヲ以テ示シタル部分ヲ除クノ外全面一様ニ釉薬ヲ施スモノトス」、形状及び寸法は「次図ニ依ル」、寸法の公差は「公差ハ+10%トシ公差ノ最大値ハ5mmトス」とあることから、第1次調査で出土した低圧碍子(実測番号

20 = 直径 25mm、高さ 43mm) と第2次調査で出土した低圧碍子(実測番号 02 = 直径 30mm、高さ 42mm) は、JES の規格寸法ではないものの、品質はほぼ保っていると思われる。

日本標準規格(JES: Japanese Engineering Standard)とは、大正10年(1921年)4月に商工省(現在の経済産業省)が設置した規格統一調査會が、欧米列強では工業製品の規格統一を図っていることを念頭に置いて、製品の品質・形状・方法などの規格を定めたものである。この日本標準規格は昭和16年(1941年)まで520件が定められ、随時更新されるとともに、戦中には臨時日本標準規格(臨JES)も931件定められた。戦後、日本規格(JES)を経て、昭和24年(1949年)日本工業規格(JIS: Japanese Industrial Standard)が定められ、令和元年(2019年)に日本産業規格(JIS)に改称されている。



第50図 低圧碍子(JES規格)

第50図は商工省工業品規格統一調査會(1940)より

## 2 統制番号の表示された焼きものについて

第2次世界大戦が始まると、様々な物資が不足したことにより産業の方針転換が図られることになった。そのなかでも陶磁器生産に関しては、昭和13年(1938年)からは金属類の不足に伴う代用品生産が始まり、続いて昭和16年(1941年)からは「生産者別標示記号(統制番号)」の制度が始まった。

統制番号は、陶磁器の生産地組合を示す文字と生産者番号の組み合わせで標示されており、古来より陶磁器生産が盛んであった東海地方以外にも、日本各地でこの統制番号は使われた。以下に主要なものを第4表として示した。

生産地記号	生産地組合	当時の生産拠点
「瀬」「セ」	瀬戸陶磁器工業組合	愛知県東春日井郡瀬戸市(現在の瀬戸市)
「品」	品野陶磁器工業組合	愛知県東春日井郡品野町(現在の瀬戸市)
「常」	常滑陶器工業組合	愛知県知多郡常滑町(現在の常滑市)
「名」	名古屋陶磁器工業組合	愛知県名古屋市
「三土」	三河土器聯合組合	愛知県碧海郡高浜町(現在の高浜市)
「岐」	岐阜県陶磁器工業組合連合会	岐阜県多治見市・土岐郡など(現在の多治見市・土岐市・瑞浪市・恵那市)
「万」	萬古陶磁器工業組合	三重県四日市市(現在の四日市市)
「伊」「イ」	伊賀焼陶磁器工業組合	三重県阿山郡丸柱村(現在の伊賀市)
「信」	信楽陶器工業組合	滋賀県甲賀郡信楽町(現在の甲賀市)
「京」	京都陶磁器工業組合	京都府京都市
「有」	有田陶磁器工業組合	佐賀県西松浦郡有田町
「肥」	藤津陶磁器工業組合	佐賀県藤津郡(現在の嬉野市など)
「波」	波佐見陶磁器工業組合	長崎県東彼杵郡波佐見町
「会」	會津陶磁器工業組合	福島県大沼郡本郷町(現在の会津美里町)
「相馬」	相馬陶器工業組合	福島県双葉郡浪江町大堀
「備」	岡山県陶磁器工業組合	岡山県和気郡伊部町(現在の備前市)

第4表 生産地記号・組合一覧表

第4表は桃井勝・河合竹彦ほか(2008)を参考に作成した

#### 第4章 卷末資料

このなかで、現在唯一岐阜県陶磁器工業組合連合会(以下、岐工連という)の当時の台帳が残っており、統制番号により生産された住所と代表者名(企業名)がわかる。台帳は戦時中の昭和16年(1941年)3月の『生産者別標示記號』と昭和23年(1948年)1月の『工場記號番號』の2つがある。

『生産者別標示記號』には、岐工連傘下の7つの組合が記載され、岐1～岐1210まで記されている。その文献を翻刻し一覧表にしたものが桃井文献(1999)であり、改めて組合別に第5表に掲載した。

組合名	当時の住所	現在の住所	生産者登録番号
西南部陶磁器工業組合	多治見市、土岐郡笠原町、市之倉村、鶴里村、可児郡小泉村	多治見市、土岐市	1～270、 1180～1210
土岐津陶磁器工業組合	土岐郡土岐津町高山・土岐口、泉町大富・久尻・定林寺、明世村河合、肥田村肥田・浅野、多治見市高田・小名田	土岐市、多治見市	271～640
妻木陶磁器工業組合	土岐郡妻木町	土岐市	641～725
下石陶磁器工業組合	土岐郡下石町	土岐市	726～905
駄知陶磁器工業組合	土岐郡駄知町・曾木村	土岐市	906～1035
瑞浪陶磁器工業組合	土岐郡瑞浪町、土岐町、稲津村	瑞浪市	1036～1085
恵那陶磁器工業組合	恵那郡陶町、吉田村、鶴岡村、明智町	瑞浪市、恵那市	1086～1173

第5表 生産者登録番号(岐阜県内組合別・戦中)

第5表は桃井勝(1999)を参考に作成した

上記資料によると、今回の調査で出土した磁器に付された「岐751」は下石陶磁器工業組合所属の土岐郡<sup>おろし</sup>下石町(現在の土岐市下石町)の「林 森之助」が製造者であることがわかる。また、この資料が作られた昭和16年(1941年)前後から終戦後までが生産時期と考えられる。

組合名	当時の住所	現在の住所	生産者登録番号
多治見市陶磁器工業協同組合	多治見市、可児市、可児郡御嵩町	左に同じ	1～50
高田陶磁器工業協同組合	多治見市高田町	左に同じ	61～116
瀧呂陶磁器工業協同組合	多治見市、土岐郡笠原町、高山市	多治見市、高山市	121～176
笠原陶磁器工業協同組合	土岐郡笠原町	多治見市	201～300、 1101～1106
市之倉陶磁器工業協同組合	土岐郡市之倉村	多治見市	301～374
土岐津陶磁器工業協同組合	土岐郡土岐津町、肥田村	土岐市	386～501
泉陶磁器工業協同組合	土岐郡泉町	土岐市	526～575
肥田陶磁器工業協同組合	土岐郡肥田村	土岐市	621～674
妻木陶磁器工業協同組合	土岐郡妻木町	土岐市	681～730
下石陶磁器工業協同組合	土岐郡下石町	土岐市	731～868
駄知陶磁器工業協同組合※1	住所記載なし	土岐市	881～959、961、 1131～1133
瑞浪陶磁器工業協同組合	土岐郡瑞浪町、土岐町、釜戸村、稲津村、明世村	瑞浪市	961～993
恵那陶磁器工業協同組合	恵那郡陶町、明知町、鶴岡町、大井、吉田村	瑞浪市、恵那市	1001～1043、 1045～1058、 1061～1064 上絵付加工業 501～516
岐阜県陶磁器上絵加工工業協同組合	多治見市、土岐郡笠原町、妻木町、泉町、土岐津町、肥田村、瑞浪町、土岐町	多治見市、土岐市、瑞浪市	1～114
駄知陶磁器上絵加工工業協同組合	土岐郡駄知町	土岐市	520～583
岐阜県西部陶磁器商業協同組合	多治見市、土岐郡笠原町	多治見市	150～485※2

※1：昭和23年(1948年)7月に工場記号番号を複製

※2：記号番号が空白の会社・工場も13件ある。

#### 第6表 生産者登録番号(岐阜県内組合別・戦後)

第6表は桃井勝(1999)を参考に作成した

戦後になって、岐工連が傘下の組合の組合員に「工場記号番号」をつけて報告するように求め、それをまとめたものが『工場記号番号』である。『生産者別標示記号』の作成から時間が経過し、組合名も変わり、組合員の廃業・新設もあるため、番号についてはやや違いがみられる。『工場記号番号』についても桃井文献(1997・1999)に記号番号・住所・会社(工場名)・代表者名が一覧表にされており、改めて組合名別に再掲した(第6表)。

『工場記号番号』によると「751」の部分に該当するのは前述の「下石陶磁器工業組合」の後継団体と思われる「下石陶磁器工業協同組合」に所属し、土岐郡下石町に所在する「伊藤 憲太郎」である。「伊藤 憲太郎」は『生産者別標示記号』では「岐746」と記載があるため、昭和16年(1941年)の台帳とかなり入れ替えが発生しているものと思われる。『工場記号番号』内に「林」姓は多数ある(下石だけで138件中37件)が、「林 森之助」は確認できない。代替わりによるものなのか、廃業したことによるものなのかは不明だが、終戦後の混乱の中で製陶業界も大きな影響を受けていたことが推察できよう。

(参考文献)

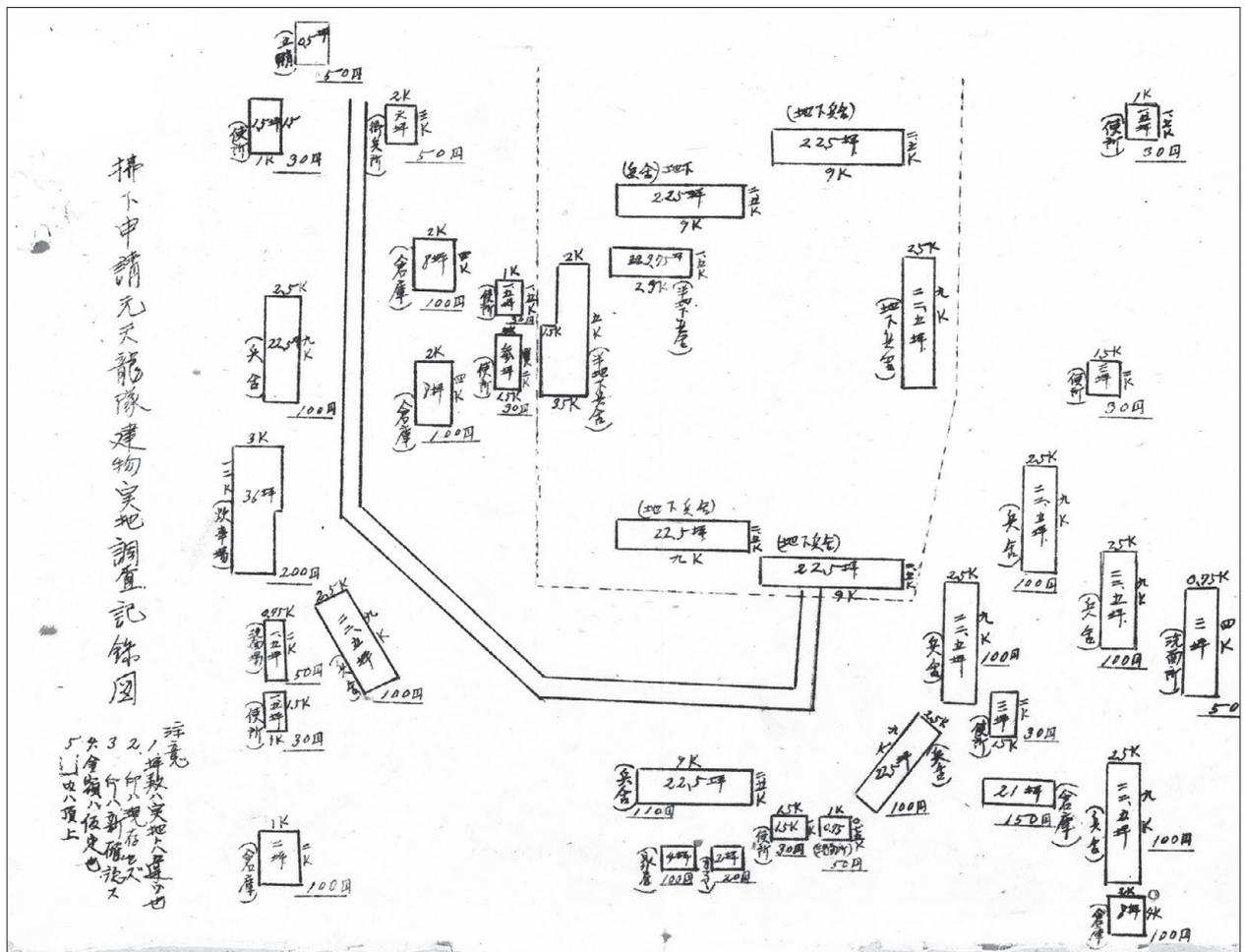
- 『工業品日本標準規格：自第一号至第二十七号』岐阜縣告示第百八十四號別冊 1927 岐阜縣  
商工省工業品規格統一調査會『JES日本標準規格(縮版)第13輯』1940 工業調査協會  
工業技術廳標準部『規格目録 日本規格 日本標準規格 臨時日本標準規格』1949 印刷局  
桃井勝「工場記号番号—昭和23年岐阜県陶磁器工業協同組合員工場記号番号—」『多治見市文化財保護センター研究紀要』第3号 1997 岐阜県多治見市教育委員会・多治見市文化財保護センター  
桃井勝「昭和16年3月 岐阜県陶磁工業組合連合会所属生産者別標示記号(統制番号) 昭和23年1月 岐阜県陶磁器工業協同組合連合会所属工場記号番号」『美濃の古陶』美濃古窯研究会会報No.8 1999 美濃古窯研究会  
財団法人岐阜県陶磁資料館『特別展 戦時中の統制したやきもの』2001 財団法人岐阜県陶磁資料館  
桃井勝・河合竹彦ほか『萩谷コレクション 全国の戦時中のやきもの』2008 財団法人岐阜県陶磁資料館  
砂田普司『特別展 番号の付されたやきもの 戦時下の瑞浪窯業生産』2012 瑞浪市陶磁資料館  
安藤貞男「日中・第二次世界大戦中における陶磁器代用品について」『研究紀要』第14号 2012 瑞浪市陶磁資料館  
舟橋健「番号の付けられたやきもの～紀年銘のある製品と瑞浪の製品にみられる特徴～」『瑞浪市歴史資料集』第3集 2015 瑞浪市陶磁資料館  
萩谷茂行「陶磁器代用品の誕生と発展」『瑞浪市歴史資料集』第4集 2017 瑞浪市陶磁資料館

2 新発見資料所収の記録図面と実際の太佐山高射砲陣地跡との比較

第4章第1節でふれたとおり、太佐山高射砲陣地跡に関する資料の一群の中に「S20-0042 拂下申請旧天龍隊(兵舎)建物求積図 愛知県知多郡上野町大字名和地内所在」(第44図)や「S20-0229 旧天龍隊陣地建物見取図」(第49図)のように終戦直後に陣地跡現地を調査して、残っていた建物の配置やその大きさ・面積、また、払下げ予定者の名前などを簡単な図面にまとめたものが複数存在する。先述の資料のほかにも「S20-0066 拂下申請旧天龍隊建物実地調査記録図」(第51図)も存在する。これら3枚の図面は、1つの基図を基として、謄写版などで複数コピーを作ったものに目的別に文言を記入したものが保存されたのであろう。

S20-0066 については個人名などの記載も無いことから、比較的取り扱いやすい資料であるので、この図面をもとにして陣地跡の測量記録図面との対比検討をおこないたい。

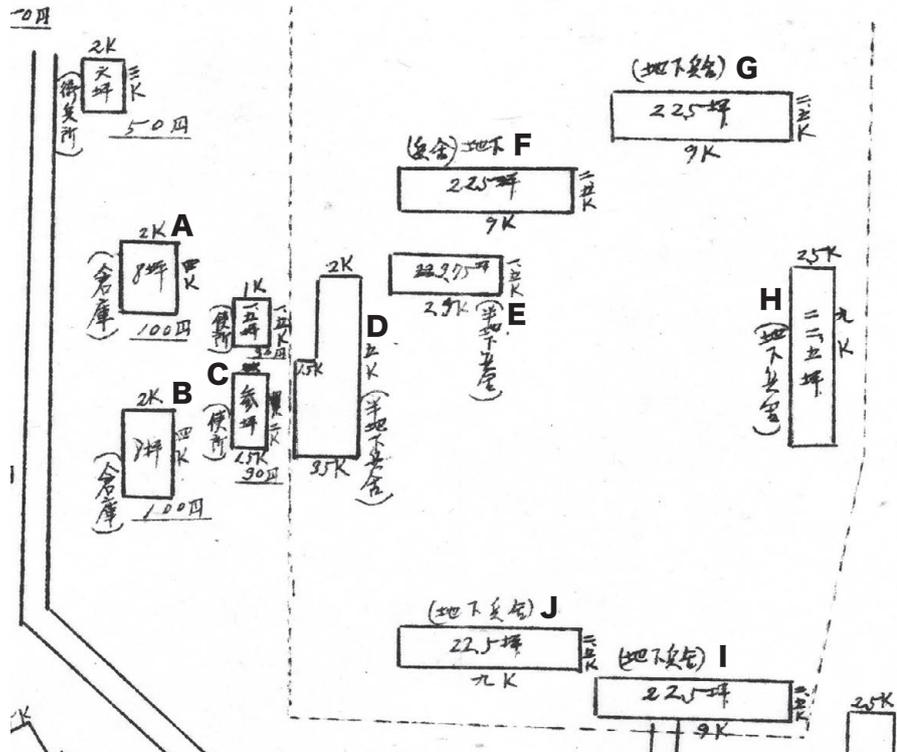
※左下の注意書きに「破線内は頂上」と記されており、砲座を含む戦闘空間範囲が示されている。



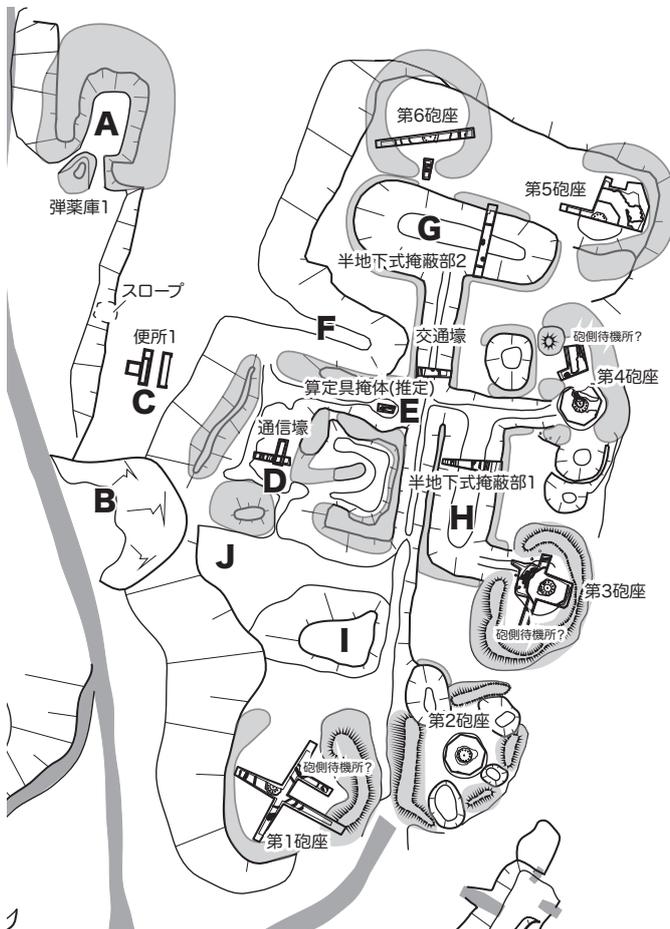
第51図 S20-0066

【砲座およびその附属施設など】

前回調査対象であった砲座群と諸附属施設についても、建物としての記載がみられる。6基の砲座については記載が見られないが、地下兵舎＝半地下式掩蔽部1と2の他に、「半地下兵舎」と記載された部分（算定具掩体と通信壕）も2箇所記されている。



※アルファベットは対応する施設と遺構を示す



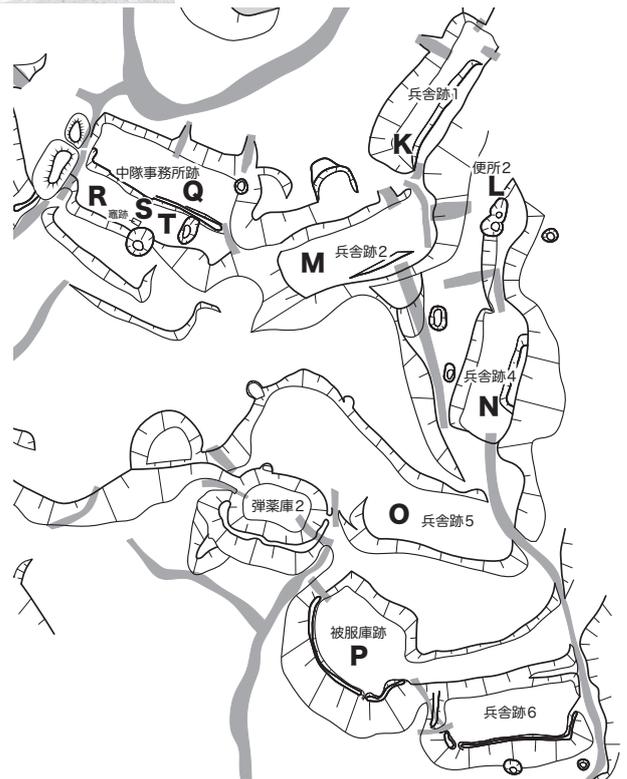
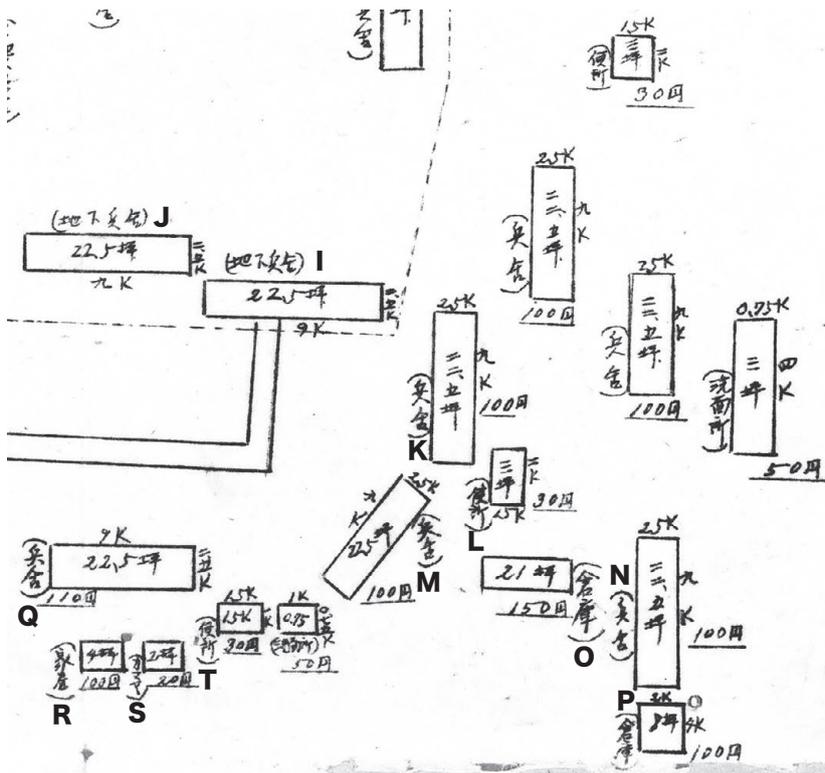
兵舎は基本的に2.5間×9間の大きさであった

【兵舎跡群】

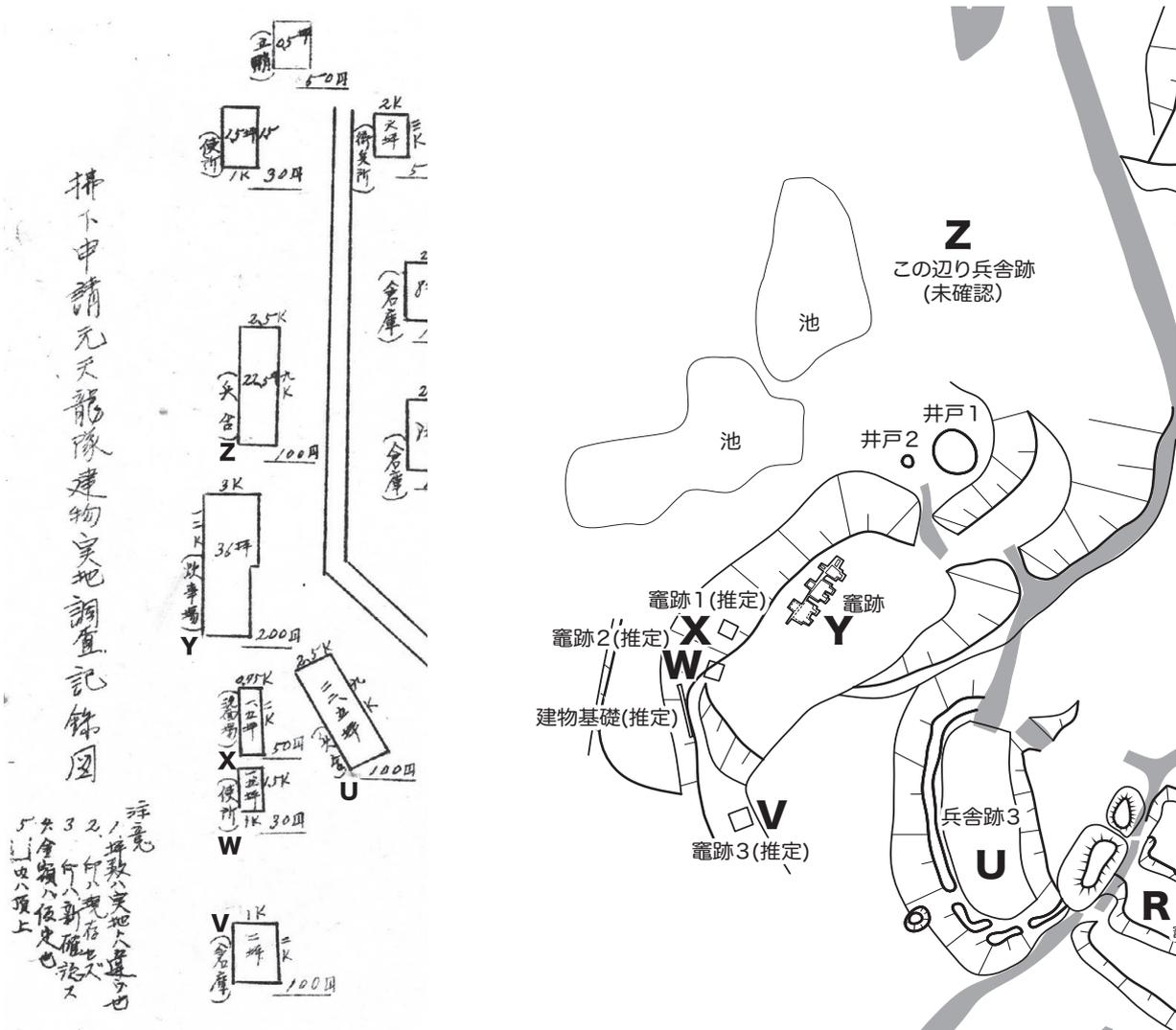
今回測量調査した兵舎群について、建物規模の記載が見られる。おおよその位置に記号を付したが、図面上方に位置する便所や兵舎、洗面所の位置は判然としない。それらに該当するような平場や上屋基礎などは、現地で確認していない。

兵舎跡5、被服庫跡についても「倉庫」と記載されており、用途を特定する上で参考材料になる。中隊事務所に該当する部分（平場1）が「兵舎」と記載されているが事務所を示すものであろう。平場2に相当する部分に4坪の「家屋」と2坪の「カマヤ」=窯屋が並び、その東側に「便所」と「洗面所」が存在した様子も窺い知ることができる。

現在の便所は、居住空間と同じ建物内に位置していることが大半であるが、当時は汲取式であるため、衛生面を考慮し、兵舎内とは別の付属施設とされていた。軍隊は集団生活であったので、1人の罹患者からたちまち部隊全体へ感染する可能性を考慮したうえのことである。



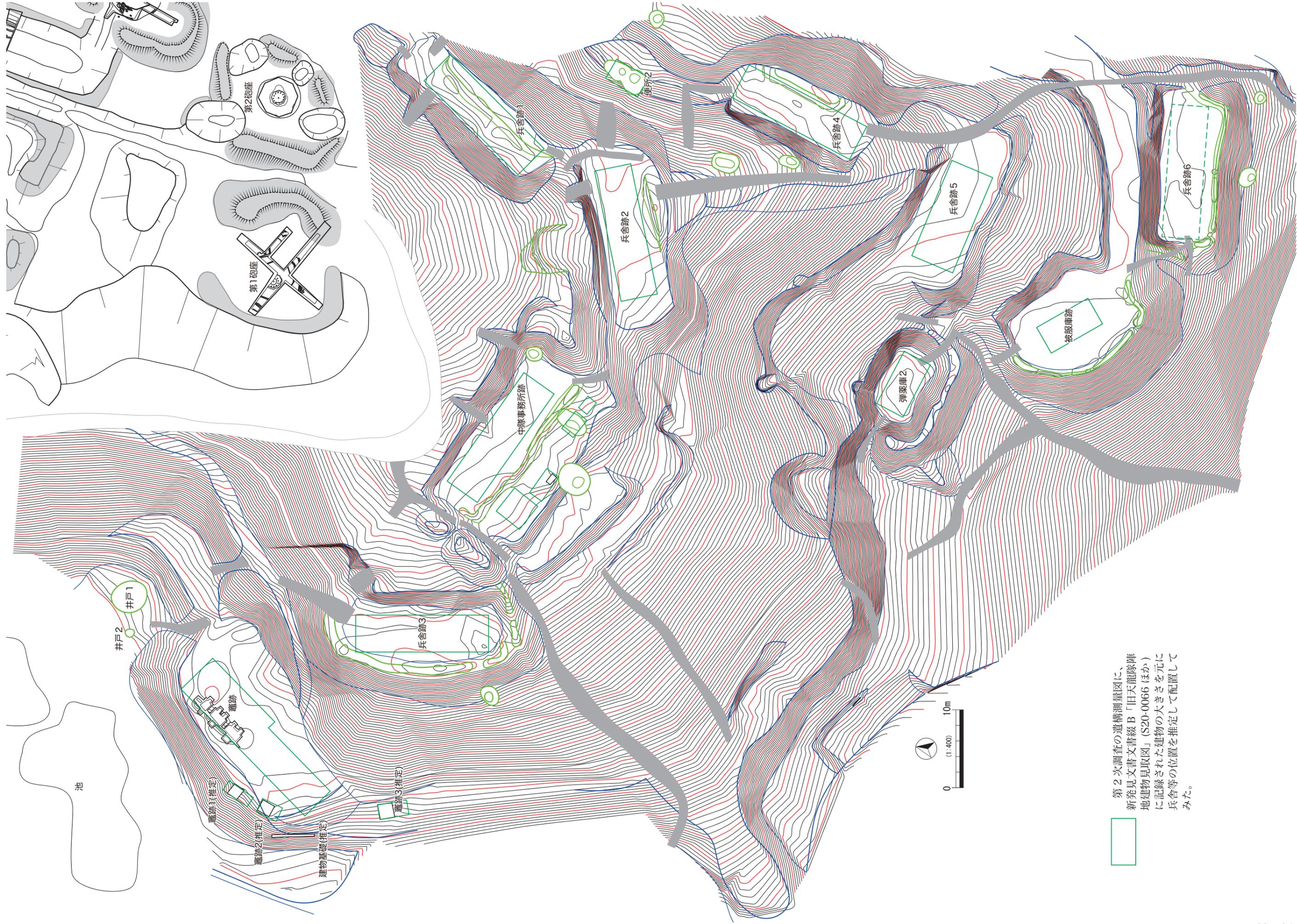
兵舎の大きさは  
2.5間×9間=22.5坪と記録されている。



【炊事場跡ほか】

今回測量調査をおこなった炊事場跡についても、建物としての記載がみられる。大きさは3間×12間で36坪の広さとされていることなどから、竈を中心とした上屋が存在したと思われる。竈の実測図を見ても、5基の焼き口が並ぶ反対側には煙突を立てるための煙道が突出しており、竈の背面または煙突の上半が上屋から突き出すような構造だったのであろう。平場全体の造作に対して竈の位置に偏りがみられることなどから、上屋の南半分は配膳などに使われていたものと推察される。

なお竈跡と推定して記述を進めていた1～3については、いずれもコンクリート片が散乱している状況であった。この資料に比定すれば、それぞれ「洗面所」「便所」「倉庫」ということになる。各建物の用途に関しては終戦直後の調査結果のほうがより真実性が高いと考えるのが普通であろう。



第2次調査の遺構測量図に、  
 新発見文書綴B「旧天龍隊陣  
 地建物見取図」(S20-0066ほか)  
 に記録された建物の大きさを元に  
 兵舎等の位置を推定して配置して  
 みた。



第52図 第2次調査平面図

※第2章で各遺構の説明や「第3表 遺構一覧表」で全体の遺構規模は述べたが、ここで 各遺構の平坦地（盛土除く）のおおよその空間規模についても表にしておく（炊事場はここでは一つの平坦地として扱う）。

遺構名	伊藤報告(2004)	平坦地の空間規模		備考
		長辺	短辺	
炊事場跡	炊事場	23.5 m	9.0 m	・竈跡がある平坦地
中隊事務所跡(平坦地1)	SH01	19.5 m	6.0 m	
中隊事務所跡(平坦地2)		15.3 m	4.0 m	・竈跡1基
中隊事務所跡(平坦地3)		12.0 m	2.3 m	
中隊事務所跡(平坦地4)		6.0 m	6.0 m	
兵舎跡1	SH02	20.0 m	2.5 m	・昭和20年1月入隊
兵舎跡2	SH03	21.1 m	6.0 m	・昭和19年11月入隊
兵舎跡3	SH04	17.7 m	6.0 m	
兵舎跡4	SH05	16.8 m	4.0 m	・初年兵教育用
兵舎跡5	SH06	16.8 m	7.7 m	
兵舎跡6	SH08	13.4 m	6.3 m	
被服庫跡	SH07	16.0 m	5.7 m	

第7表 各遺構平坦地の空間規模

### 3 笠寺陣地の調査事例の紹介

名古屋市南区にある見晴台遺跡には戦時中、名古屋高射砲隊の陣地の一つであり、高射砲第124聯隊の第二大隊いすず隊と高射砲第八中隊のあそ隊が置かれていた。笠寺台地の南端をあそ隊が位置し、八八式七糎野戦高射砲が6門置かれ、あそ隊の北東部にはいすず隊が位置していた。

太佐山高射砲陣地跡同様、都市計画公園の計画の範囲内であったことや、陣地構築以前の昭和15年(1940年)頃にはすでに銅鐸型土製品などが出土する遺跡であることが知られていたことから、昭和39年(1964年)より発掘調査が進められている。

その成果は伊藤厚史氏らにより発表されているが、今回の調査で確認された遺構の類例として成果の中の一部を紹介したい。(第50次発掘調査の竈跡については第2章文中で述べたので割愛する)

#### 第28次発掘調査

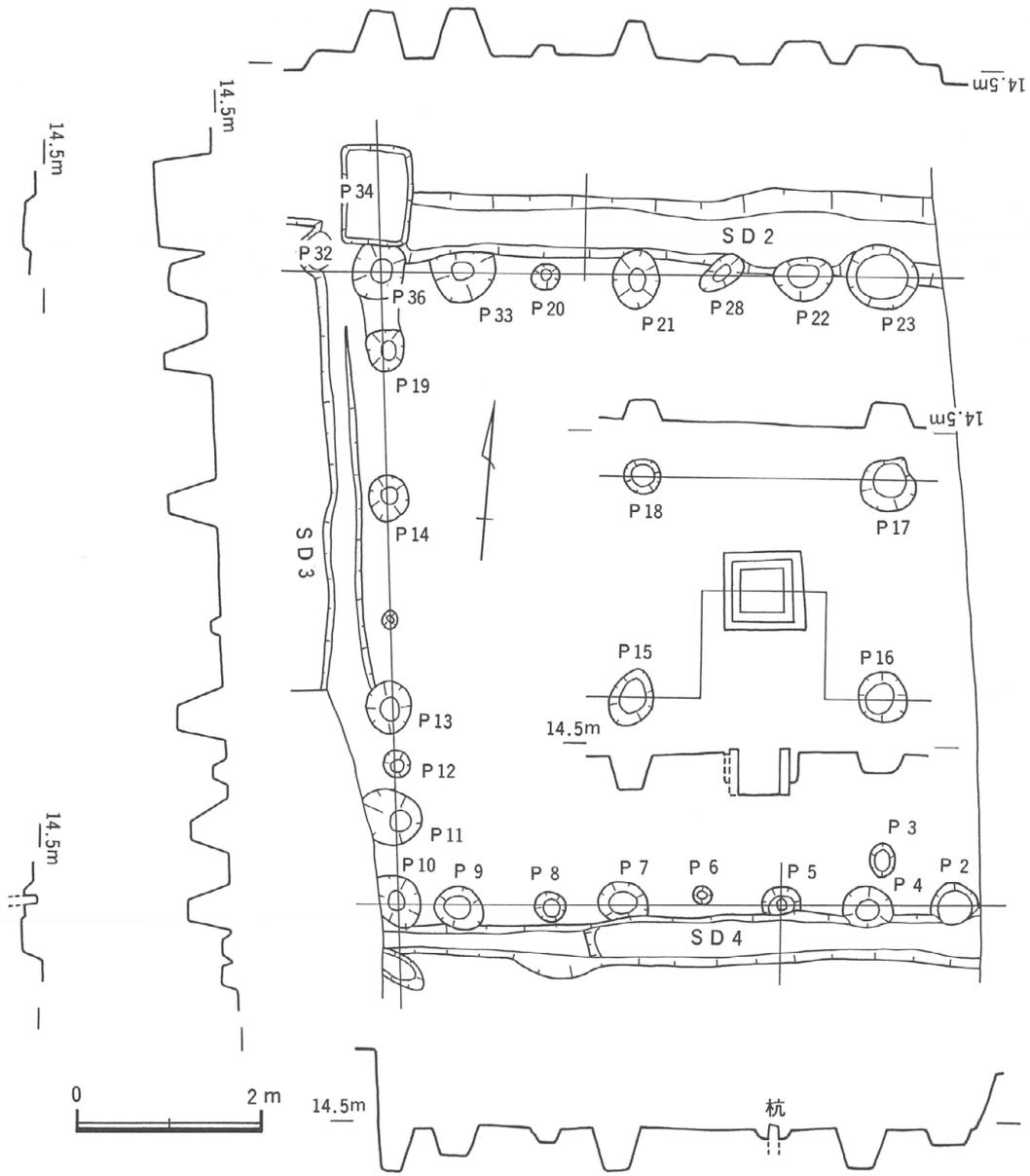
##### 兵舎跡(SH1)

総柱建物であるが、桁行は調査区外に延びるため6.2m以上、梁間は6.65m(3間)である。柱穴は直径0.2～0.5mで、主柱穴は直径0.5mで他の柱穴より大きい。柱穴の深さは主柱穴は0.20～0.54mである。柱間は、桁行2.40～2.60m、梁間は2.05～2.30mである。

建物の内部には約0.85m四方の掘方を持つ方形土坑が1基あり、土坑内にはコークスガラを固形ブロック(約0.11m×約0.23m×約0.07m)にして方形柵状に組みセメントが塗られていた。ダルマストーブ置場として利用していたということである。

建物の周囲には雨落ち溝と考えられる溝も3条検出された。

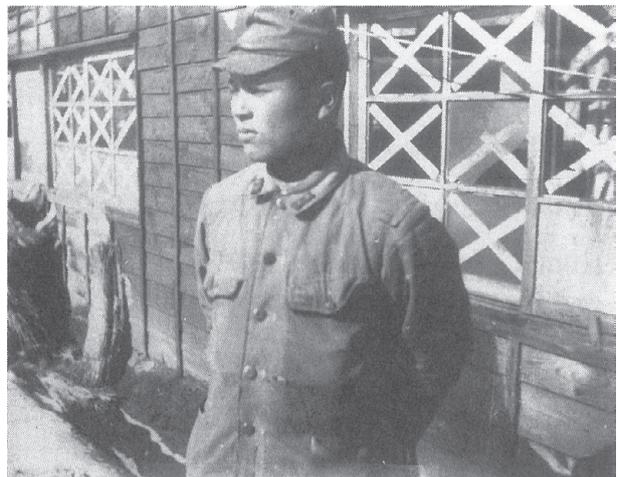
遺物については、柱穴等から板ガラス、ガラス瓶、鉄釘、石炭等が出土している。



第53図 見晴台遺跡第28次 兵舎跡(SH1)平面図(上が北)

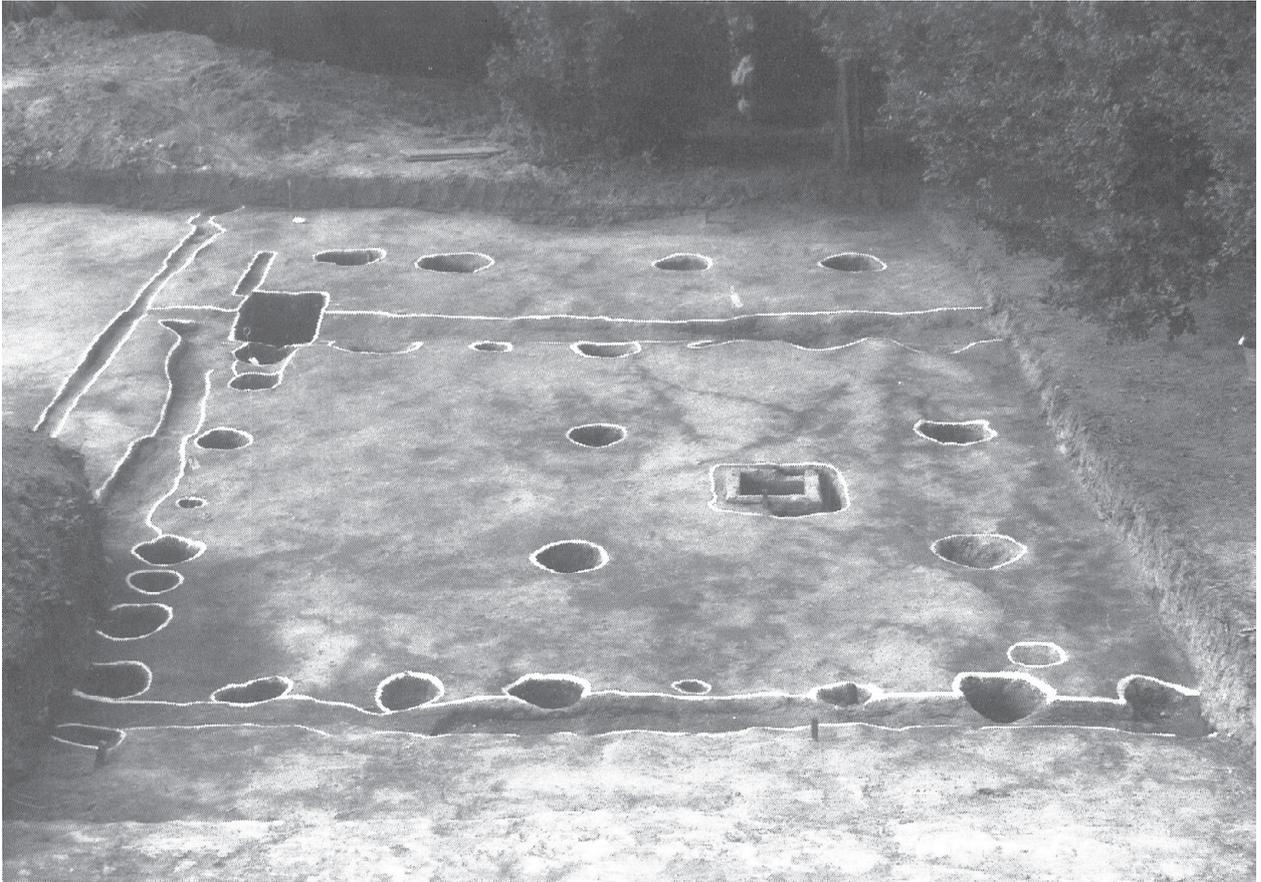


第54図 笠寺陣地兵舎遠景



第55図 笠寺陣地兵舎近景

第53～56図は伊藤厚史ほか(1990)より



第56図 見晴台遺跡第28次 兵舎跡(SH1) 南から

※第28次発掘調査ではほかに兵舎跡(SH1)の北側に設けたトレンチ内で兵舎跡(SH2)に伴うとみられる東西方向の溝が3条検出されており、出土遺物としては、ガラス製戸車、磁器皿、板ガラス等が出土している。

その他、戦中に笠寺陣地で撮られたとみられる兵舎の写真も2枚掲載されており、伊藤(1992)によると「屋根は、ルーピング張りの上にトタンを張ったもので、カモフラージュのため草がかぶせてあるし、窓には射撃の振動で割れないようにガラスにテープが張られていた。」と解説がされている。

太佐山高射砲陣地が築陣されたのは、太平洋戦争末期の昭和19年(1944年)10月のことであることから資材が満足にあったとは言い難く、砲床も当初はコンクリートではなく木床であった。また、第7表のような平坦地の空間規模であることから、第28次調査の兵舎(SH1)の梁間6.65m=3間を当てはめてみると、兵舎跡5を除いてはその規模の空間は確保できていない。以上のことから、2間=3.6~4.4m程度の規模の梁間の兵舎が建てられていた可能性がある。また総柱建物ではなく、三角兵舎などの簡素なものであったかもしれない。「てんりゅう隊陣中記」には昭和20年(1945年)1月15日の項に「現役兵32名、太佐山新陣地に初の直接入隊(1月兵)、主に滋賀、京都、大阪の出身。(中略)1月兵、1棟のバラック兵舎に揃って入居。」とあることからもうかがえる。

(以下※印は筆者註)

第31次発掘調査

風呂場跡

基礎部分の平面形は、南北 2.8 m、東西 3.8 m の長方形を呈し、北西隅に 0.9 m 四方の出っ張りを持つ。この出っ張り部分の内寸は南北約 0.6 m × 東西約 0.7 m の凹みとなっている。東側面に長方形の鉄枠が嵌め込まれた焚口がある。この東側には、南北 1.08 m、東西 2.7 m の範囲が煉瓦で区画されている。この上部に浴槽があったとみられるが、痕跡はなく、煉瓦もかなり消失している。煉瓦区画の北側には、煙突とみられる 0.8 m 程の出っ張りがある。煉瓦区画の南側及び東側は洗い場である。その他排水用の土管などが確認された。

遺物については、風呂場の周辺と合わせて戦後のものと混じっている可能性があるが多数の陶磁器・ガラス瓶・金属製品が出土している。統制磁器である生産者番号の記されている小皿(岐 610)・湯呑(岐 518)・碗 2 点(瀬 459)、灰緑色の 2 本線のある蓋・どんぶり・皿・湯呑等である。

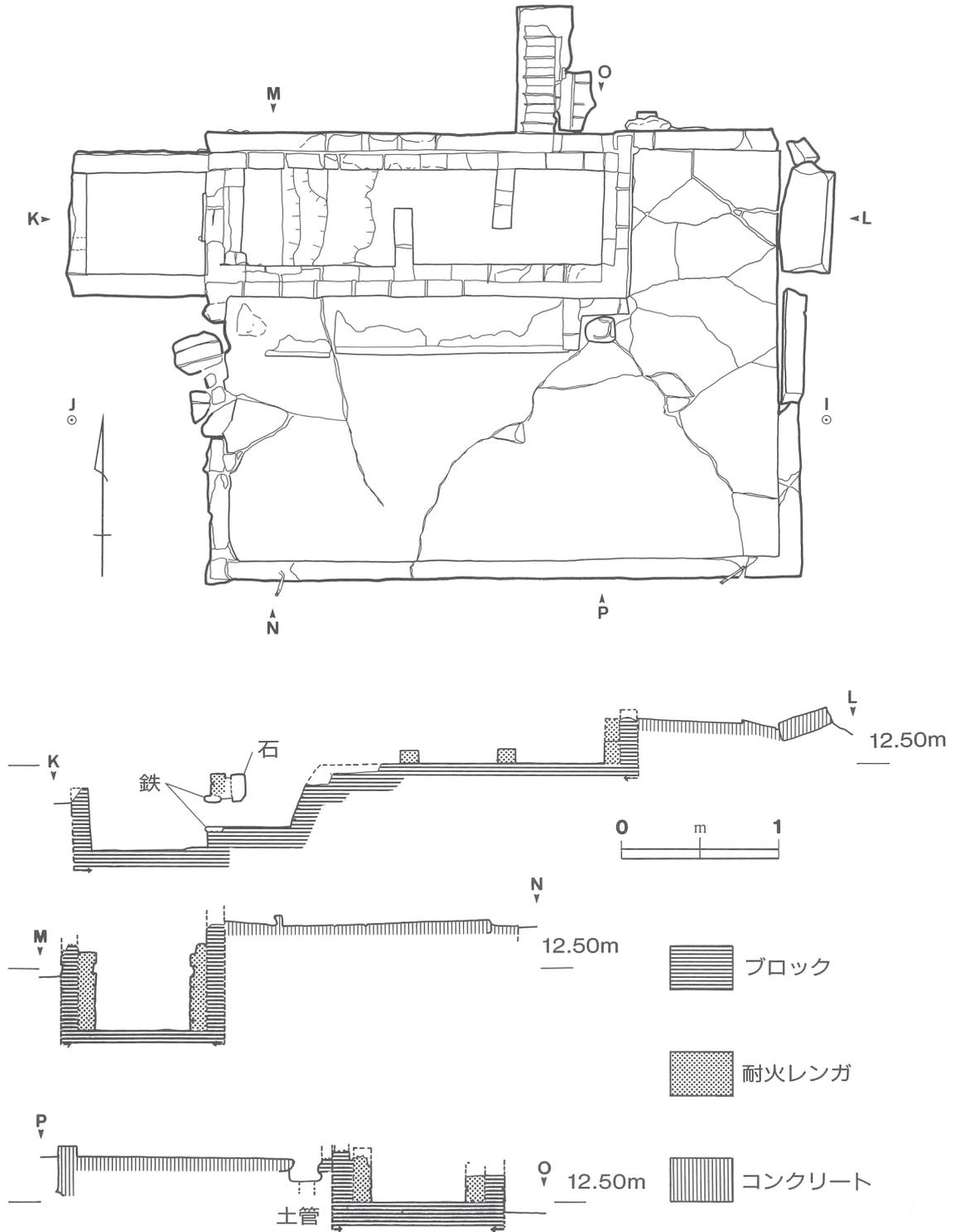
兵舎跡 (SH1・SH2)

第 28 次発掘調査で確認された兵舎跡 (SH1・SH2) と一体と思われる遺構が確認されている。



第 57 図 見晴台遺跡第 31 次 風呂場跡 北西から

第 57・58 図は伊藤正人ほか (1993) より



第58図 見晴台遺跡第31次 風呂場跡平面図(上が北)

※第31次発掘調査で確認された風呂場は洗い場と浴槽を合わせた面積が10㎡しかないが、数百人もの人数が入り替わり入浴していたようである。太佐山高射砲陣地で確認された建物基礎(推定)についても、風呂場跡の可能性はあるがそれほど大きな規模であるものではないと考えられる。



- |                  |                            |                                  |
|------------------|----------------------------|----------------------------------|
| 1 電波標定機Ⅲ型(夕号)送信機 | 15 通信班長掌握所                 | 28 中隊事務所(東端事務室、中東<br>中隊長室、西端将校室) |
| 2 電波標定機Ⅲ型(夕号)受信機 | 16 通信送信所(3ヶ所)1ヶ所で<br>2中隊担当 | 29 通信室                           |
| 3 いすず神社          | 17 通信係将校と関係下士官控所           | 30 指揮小隊長位置、対空双眼鏡                 |
| 4 被服修理場          | 18 大隊長、幹部指揮所               | 31 3m測高機・測定機                     |
| 5 三角兵舎           | 19 2m測高機・測定機               | 32 第一、第二小隊長位置                    |
| 6 炊事場            | 20 対空双眼鏡                   | 33 八八式七糎高射砲砲台                    |
| 7 浴場             | 21 監視哨                     | 34 弾薬庫                           |
| 8 民家             | 22 観測係将校と関係下士官控所           | 35 被服庫                           |
| 9 大隊本部事務所と将校宿舎   | 23 衛兵所                     | 36 兵器庫                           |
| 10 医務室           | 24 家畜小屋                    | 37 便所                            |
| 11 通信交換所(旧戦闘指揮所) | 25 炊事場                     | 38 土取り跡                          |
| 12 委託兵の集合教育担当兵舎  | 26 浴場(東側建物は糶秣庫)            |                                  |
| 13 無線機室          | 27 兵舎(2棟)                  |                                  |
| 14 将校集会所         |                            |                                  |

第59図 笠寺陣地 復元図

第59図は伊藤厚史(1992)に加筆トレースした

## 4 太佐山高射砲陣地跡関係略年表

※『てんりゅう隊陣中記』を基本に『大空に祈る』『東海軍管区の防空陣地』『見晴台遺跡発掘調査報告書近代編』を参考とした。

年	西暦	月	日	出来事
大正 14	1925	5	7	豊橋市富本町に高射砲第 1 聯隊発足。
昭和 3	1928	3	20	浜松市三方原に高射砲第 1 聯隊移転。
昭和 16	1941	7	7	名古屋防空隊が発足し、豊橋市高師町の高師原陸軍演習場にて約 1 か月間教育・演習が行われる。
		8	14	名古屋防空隊は名古屋市昭和区鶴舞町に移動、司令部は名古屋市公会堂 4 階に設けられた。北地区隊 (中区の名古屋通信局屋上)、南地区隊 (港区の築地税関埠頭屋上) が配置された。
		10		陸軍がドイツ・クルップ社製 88mm 高射砲を基に開発した九九式八糧高射砲を準制式制定し、翌年より量産体制に入る。終戦までに 500 門以上製造されたと推定される。
		11	19	名古屋防空隊は、防空第 15 聯隊と改称された。
昭和 17	1942	5		高射砲第 1 聯隊の先遣隊が名古屋市瑞穂区にある私立尾張中学校 (現・名古屋大谷高等学校) に移動し、防空第 15 聯隊長指揮下に置かれる。
		9		高射砲第 1 聯隊の主力部隊が名古屋北地区に移動。茶屋ヶ坂 (本部)、高射砲隊は茶屋ヶ坂 (第 1 中隊: 名古屋市千種区揚羽町・富士見台)・練兵場 (第 2 中隊: 名古屋市北区名城)・上飯田 (第 3 中隊: 名古屋市北区上飯田)・児玉 (第 4 中隊: 名古屋市西区児玉) に、照空隊は守山 (下志段味分隊: 名古屋市守山区下志段味長廻間)・稲葉地 (中村分隊: 名古屋市市中村区长茂町) に配備される。第 4 中隊は時期不明ながら、川名山 (名古屋市昭和区山里町) に移ったようである。 北地区にいた防空第 15 聯隊は、南地区に移動、築地税関埠頭 (本部)、高射砲隊は築地 (名古屋市港区築地町)・土古 (名古屋市港区泰明町)、柴田 (名古屋南区元柴田東町)・熱田前 (名古屋市中川区十番・十一番町)・名古屋駅屋上 (名古屋市中村区名駅 ※高射機関砲隊)、照空隊は潮見 (名古屋市港区潮見町)・鳴海 (名古屋市緑区鳴海町) に再配備される。さらに知立 (知立市西丘町) に照空隊が置かれた可能性もある。
		11	19	中部防空旅団が新設され、防空第 15 聯隊も傘下となる。司令部は大阪市天王寺公園美術館内に設けられた。
昭和 18	1943	8	23	中部防空旅団が防空集団に改変される。 併せて防空第 15 聯隊の増強も開始され、火砲や兵員の増強が図られ、高射砲隊 (2 大隊 12 中隊、うち 3 中隊欠員)、照空隊 (2 大隊 6 中隊、うち 2 中隊欠員) となった。 浜松の高射砲第 1 聯隊の残留部隊も北地区に合流し、高射砲隊 (3 大隊、6 中隊) となった。
昭和 19	1944	6	1	防空第 15 聯隊傘下に、独立高射砲第 12 大隊が新設され、各務原・大江・小牧に 3 中隊が設置された。
		9	1	防空第 15 聯隊は、高射砲第 124 聯隊と改称するとともに新設された名古屋高射砲司令部の傘下となる。司令部の位置は、名古屋市公会堂 (一部は昭和塾堂) となったため、高射砲第 124 聯隊は知多郡上野町荒尾へ移動する。所在する料理旅館・聚楽園の建物を借り受け、作戦戦闘指揮所とした。移動は 9 月 10 日から開始し、数日間かかる。 <b>てんりゅう隊は高射砲第 124 聯隊第 2 大隊 (笠寺陣地) 第 7 中隊として、知多郡上野町名和付近に配備を命ぜられる。</b> <b>てんりゅう隊に現役兵 63 名入隊 (9 月兵)。主に静岡、愛知県の出身。鶴舞公園に集合、軍服に着替えた後、北練兵場の板塀囲いの兵舎に入る。観測、通信、砲 (七高) の 3 班に分かれ、教練開始。</b>
		9	10	朝鮮籍兵 18 名 (9 月兵)、朝鮮より入隊。全員、砲の教練班に配属。各兵の体格にかなりの優劣があった。
		9	月末	9 月兵、古兵を残し、北練兵場を出発、笠寺陣地に到着。第 2 大隊本部 (いすゞ隊) の陣地を構築しつつ待機。
		10	1	先遣隊、上野町名和の長光寺に入る。長光寺住職は、本堂の全面開放をはじめ、炊事場、厩の仮設なども快諾した。この積極的協力により、中隊、陣地構築に専念出来る態勢が整う。

年	西暦	月	日	出来事
		10	5	<p>9月兵、笠寺陣地を出発、長光寺に入る。てんりゅう隊、上野町名和付近の「海を眺望可能」なる地に陣地構築せよとの命令を受領した。敵軍の伊勢湾上陸も想定してのものである。同時期に構築されたながら隊(第9中隊)の平山陣地との位置関係上、新陣地を太佐山(標高44m)に決定した。</p> <p>すぐに毎日午前6時起床、長光寺から2kmの道を往復し、午後10時頃まで、夜間は裸電球を頼りの突貫工事に入る。総て人力により、進入路の松、雑木の伐採開墾に始まり、山頂を削取り平坦化した。次いで、指揮所、対空監視壕、通信室(半地下)、砲床円座、砲側弾薬庫、砲掩体壕を優先して着工し、道路沿いに弾薬庫2棟、衛兵所も急造した。兵舎は「三角兵舎」で、将校棟もバラックであった。屋根は紙にコールタール塗装のルーフィングであった。その後、井戸・物干場や厠なども順次完成した。事務室、炊事場員は、暫時、長光寺に残留した。</p> <p>● S18-0032(第37図)</p>
		10	下旬	<p>中隊は、長光寺から太佐山に移動した。中隊長は将校棟に入らず、戦闘指揮に最適の通信分隊に起居した。</p> <p>当時最新式であった九九式八糧高射砲(八高)6門が、雨天の中、太佐山麓に到着した。荒削り地道の進入路を牛車により牽引し、苦勞した末に山頂に引上げ、砲床円座(セメント不足のため木製井桁砲床)に据付終了した。</p> <p>指揮所、観測、砲間の連動配線は調整に難渋するも、兵器廠技師の努力もあって次第に進み、各分隊は早速、猛訓練を開始。三食は長光寺より大八車に積み運搬した。入浴は警報の合間を縫い、各班交互にて村の銭湯に引率入湯。</p> <p>洗面、洗濯水は、陣地麓の農用水池「新池」に頼った。後に、浴場建築され、池水は浴用としても使用し、桶と天秤棒で運んだ。</p>
		10		<p>高射砲第124聯隊傘下に、独立高射砲第106大隊が新設され、姫路・名古屋大幸町・清水に3中隊が設置された。</p>
		11	3	<p>トラック2台にて名古屋千種駅に向い、弾薬を受領した。弾薬箱ひと箱につき2発詰であり、2棟あった弾薬庫は満杯になった。</p> <p>● S18-0063</p>
		11	15	<p>現役兵48名入隊(11月兵)。主に岐阜、愛知県出身、朝鮮籍兵も3名いた。上野町名和の妙法寺を宿舎とした。直ちに、訓練と陣地構築作業に参入した。その頃、前後して古年次の召集兵、転属兵の入隊続く。兵力徐々に充実し、訓練と工事作業との交替、さらに、並行実施も可能となる。</p>
		11		<p>高射砲第1聯隊は、高射砲第125聯隊と改称し、高射砲隊(2大隊12中隊、うち2中隊欠員)、照空隊(2大隊6中隊)となった。</p>
		12	7	<p>東南海地震(M7.9)発生。作業中の兵は、立つ能わず座り込む激震であった。てんりゅう隊の砲台は着実な工事と堅固なる地盤に恵まれ、被害僅少であった。上野町名和も銭湯の煙突が折れ、墓石も倒れる有様で、11月兵は、墓石の立て直しなど、復旧作業に努めた。</p> <p>● S18-0066</p>
		12	13	<p>午前、快晴、B29・71機、9,600mの高度にて来襲。名古屋初空襲にして、名古屋防衛各高射砲隊との初対戦であった。三菱航空機工場を高々度より精密爆撃する敵機をてんりゅう隊らが砲撃し、1機撃墜した。入隊から僅か3ヵ月の9月兵、敢闘した。</p>
		12	22	<p>昼間、B29・48機、高度9,600～10,900mにて名古屋三菱発動機に來襲。てんりゅう隊、6門が一斉砲撃し、1機に命中し、敵機は三河の西尾市近郊に墜落した。その夜は四斗樽を開き、中隊あげて祝杯をした。しかし、この日、迎撃の友軍機1機(3式戦・飛燕)は、てんりゅう隊陣地の頭上をかすめ、轟音と共に衛兵所前方の空地に激突した。11月兵ら駆けつけ、機体を掘起こし、散乱した遺体を丁寧に収容した。</p>
昭和20	1945	1	13	<p>三河地震(M6.8)発生。</p>
		1	15	<p>現役兵32名、太佐山新陣地に初の直接入隊(1月兵)。主に滋賀、京都、大阪の出身。1月兵、1棟のバラック兵舎に全員揃って入居した。各班に配属しなかったのは、教育の効率化と戦闘の足手纏いを回避する意図であった。</p>
		2	初旬	<p>第1次弾薬規制始まる。</p>
		2	11	<p>本土決戦準備のため、第13方面軍(東海軍管区)司令部新設。高射砲124聯隊・高射砲125聯隊はその傘下に入る。</p>

年	西暦	月	日	出来事
		早春		11月兵が1期の検閲を終了し、直ちに、砲、観測、算定など、それぞれ戦闘分隊に配属された。通信分隊は9月兵と若干の召集兵にて編成した。 ●S18-0109・●S18-0048(第38図)(第39図)
		3	14	15日にかけて、B29の焼夷弾攻撃により上野町名和で火災が発生。てんりゅう隊は駆けつけ消火に当たる。被弾した長光寺は、天井板を壊して、火を吹く焼夷弾を叩き落して鎮火に成功するも、下名和12戸、上名和9戸は焼失した。他に、船津神社絵馬堂、名和国民学校教室、名和郵便局にも若干の被害があった、また、塚森・蓮池・石谷のつばけ炎上。
		3	24	この頃、射撃精度向上のために応急措置の木材桁砲床を掘り起し、セメント固定の砲床に順次強化。さらに、大阪造兵廠より派遣された工具によって砲の調整が行われる。
		4	11	1月兵、1期の検閲を終了し、砲・観測・算定各分隊、指揮班にそれぞれ配属された。
		4	15	この頃、てんりゅう隊、砲分隊の兵舎地下化が完了し、交通壕もつくられた。事務室、炊事場、浴場も新設し、厠の錠戸は板戸に変わる。また、2月頃に箱型の新算定機も導入され、指揮台傍の掩体壕に設置された。
		5	5	大陸軍令により高射砲部隊は師団編成となり、名古屋高射砲隊は高射第2師団に改編。
		5		第2次弾薬規制が始まる。生産能力激減し、千発補充に半月を要する状況となり、一空襲毎に中隊使用の弾薬数を限定された。このため、射撃可能目標も見送る事態も発生した。この頃、てんりゅう隊は、知多半島先端の師崎対空監視哨に交替哨兵を派遣。
		5	17	未明にB29・457機、2,000～5,500mの高度にて志摩半島から伊勢湾を北上し、名古屋港、知多半島、聚楽園、上野町名和、大高、大府など広範囲に焼夷弾攻撃をおこなった。高射砲第124聯隊は、兵器、弾薬、糧秣、被服、燃料など備蓄のため知多半島丘陵地帯に地下埋蔵庫の建設を開始。半田、刈谷防空隊も防空任務のほか、地下壕の構築作業にも汗を流す。 また、聯隊本部は動員補充業務も担当し、国民兵役、高齢未教育兵の入隊が続く。てんりゅう隊に現役兵約15名(5月兵)と召集兵約10名、前後して入隊した。召集兵は野砲の兵長、上等兵や、大正14年徴集の一等兵、年配の二等兵など高射砲の未教育兵にして年齢上も即戦力としては全く期待出来なかった。直接戦闘任務なき幹候要員1月兵も衛兵、対空監視、不寝番勤務のほか、これらの召集兵と兵舎の偽装、陣地傍の荒蕪地を農耕用に開墾などの作業を行う。一種の遊兵であった。
		7		高射砲第124聯隊本部は、米艦載機の洋上攻撃激化に対応し、上野町名和平安山に布陣のながら隊(第9中隊)を富木島飛行場防衛のため大府方面に(半田刈谷防空隊)、名古屋市内のもがみ隊(第11中隊)は市街焦土化に伴い大府方面高台に、また、各機関砲大隊を岐阜、大垣、小牧、四日市、桑名など地方都市に、逐次陣地を展開した。てんりゅう隊員の大半は、近傍に位置していた兄弟中隊ながら隊の陣地移転に気付かなかった。
		8	15	ポツダム宣言受託
		8	16	朝鮮籍兵、他中隊からの教育中の転属兵、慌しく帰国や原隊復帰に動く。台上に深く大きな穴を2個掘り、陣地配置図など作戦資料、兵籍名簿などの公・私文書、操典、手帳類を焼却処分した。
		8	18	軍令陸甲第116号(帝国陸軍復員要領)により復員下令、てんりゅう隊も逐次復員開始したが、隊長は残務整理隊員約20名の人選に苦心した。
		9		てんりゅう隊残留隊員は、火砲、弾薬、観測機材、通信機、小銃などを米軍への引渡完了まで、日本軍の終焉を汚さないために管理保全に努めた。
		晩秋		残留隊員中のうち、数名は逐次帰郷した。なお残留の隊員12名は、武器処分のため来隊の米兵を刺激しないよう、軍服を着替えて私服を着用していた。
		12		午前10時頃、米兵7名、着剣の銃を構え、警戒しながら陣地に現われた。米兵は、周辺300mの立退きを命じ、砲尾などの重要部に導火線を引き爆破した。処理期間は1週間と予告されていたが、当日、僅か1日にて武器弾薬の引渡も終了した。
		12	下旬	てんりゅう隊、軍服1着の返納に至るまで、全ての残務整理を完了し、中隊長以下全員復員した。てんりゅう隊は戦死、戦傷者皆無であった。
		5	21	払い下げ許可(S20文書)
		6	13	●S20-0271
		6	15	●S20-0126(第45図)

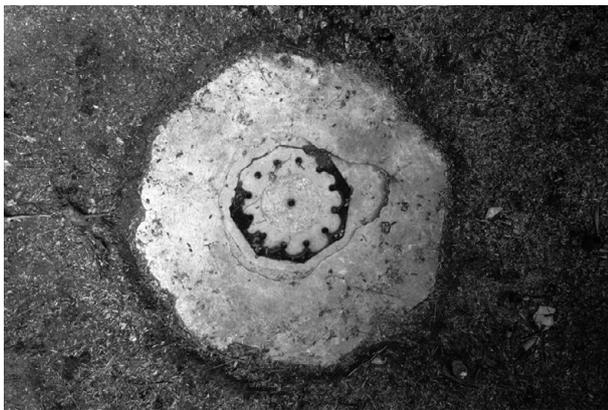
※●印は新発見文書綴の整理番号および図版番号



第1 砲座空撮



第1 砲座検出状況



第2 砲座空撮



第2 砲座検出状況



第3 砲座検出状況



第4 砲座電纜管用桝検出状況

参考) 第1次調査時の写真を掲載



第4 砲座にて高射砲模型試作

### 第3節 取得データの活用

#### 1 デジタルデータの活用について

今年度の2回にわたる確認調査では、一眼レフによる写真の撮影、ドローンによる空撮、トータルステーションと地上型レーザースキャナーによる3Dデータの取得などデジタルデータの記録作業を行った。このようなデジタルデータから図面や写真の加工・編集を行い、本書のようなアナログ的な形で公開されることとなった。なお、現地見学会では、SNS (Twitter など)・個人ブログを通じての見学者も訪れ、写真や動画の記録なども行っていたようでデジタルデバイスによる文化財との触れ合いは切っても切り離せない時代である。

3次元デジタル記録については文化庁(2020)も「3次元デジタル計測により得られたデータは、解析と編集によって様々な活用が可能となり、(中略)遡及的な再検証も可能となることから、(中略)課題も踏まえたうえで積極的な活用を図りたい」と述べており、これらの記録類を報告書や論文、講演会などの活用も各地で試みられている。さらに有効活用できないかと考え、2回目の調査で撮影した写真を使用して3Dデータ化を行った。

方法としては、SfM/MVS技術を使用した。SfM/MVS技術とは3Dデータ化したい対象物体を市販のデジタルカメラで複数枚撮影し、ソフトウェアで合成・解析するだけで3次元モデルを作成出来る技術であり、写真測量を応用した技術である。レーザースキャナーなどと比べると比較的導入コストは低く、現場での作業についても短時間ですむ。今回使用したソフトウェアは、ロシアのAgisoft LLC製の「Metashape Professional (旧 PhotoScan)」を使用した。Metashape Professionalの価格は昨今のロシアによるウクライナ情勢で不安定であるものの約60万円であり、トータルステーションやレーザースキャナーの導入に比べると比較的敷居は低い。このソフトを選択したのは後述するように様々な文化財の分野で使われていること、OSがWindows、mac、Linuxと選択肢が多いためである。

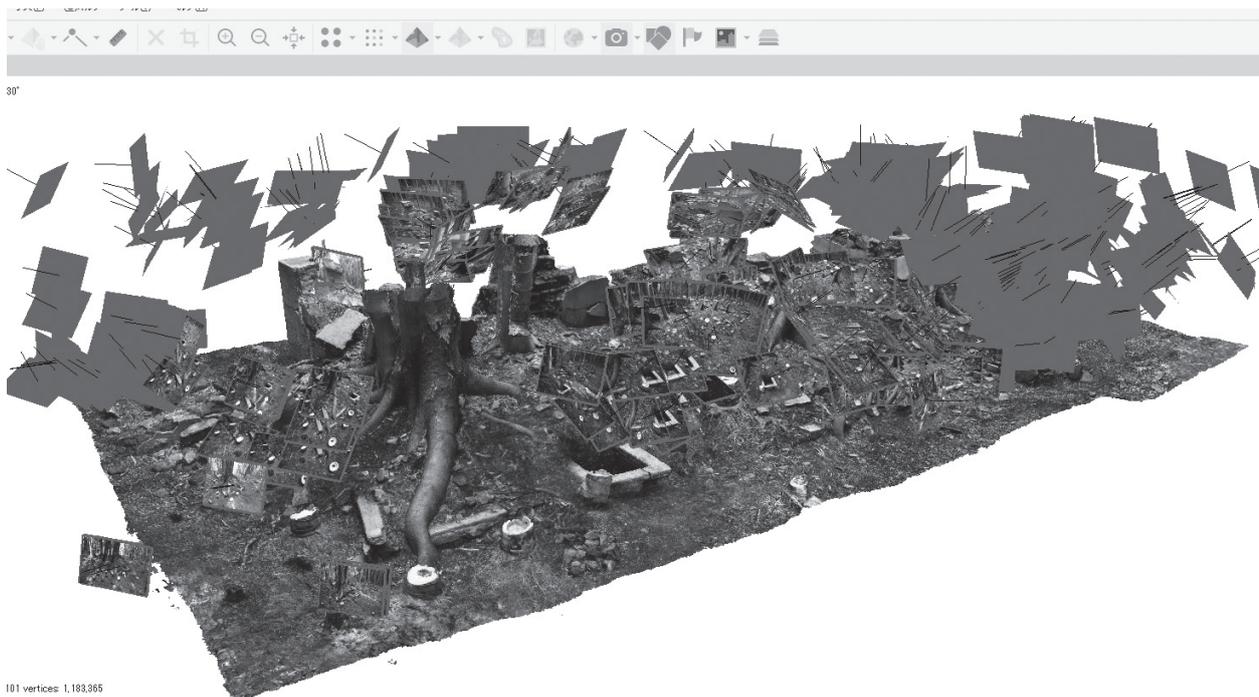
他に似たようなソフトとしてアメリカのEpic games社のRealityCapture<sup>リアリティーキャプチャー</sup>、イタリアの3DFlow社の3DF Zephyr<sup>ゼファール</sup>、アメリカのAutodesk社のAutodesk ReCap<sup>オートデスク リキャップ</sup>などがある。

SfM/MVS技術は、空撮・測量や土木・建築、農業・林業、防災など幅広い分野で使われている。文化財の分野でも発掘調査では遺物出土状況、壁面図・断面図やエレベーション図、調査区全体の記録、他の文化財では、遺跡から出土した遺物、城館跡の石垣、石切場(石切丁場)での矢穴石・刻印石・石曳道、石仏・石碑・墓碑・石塔・墓石・石室・石棺・狛犬・鳥居、古墳の墳丘、仏像・大仏、建物・石橋など建築物(内部構造含む)、民具、模型の記録など多岐な使われ方もしている。これらを記録された3次元モデルも各研究機関のサイトだけでなく、Sketchfab<sup>スケッチファブ</sup>(<https://sketchfab.com/>)をはじめとするサイトでの無料公開、CCライセンス(クリエイティブ・コモンズ・ライセンス)に基づく利用も認められているものもある。Sketchfabは独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、大阪市富田林市文化財課・東大阪市人権文化部文化室文化財課、熊本県教育庁文化課、北海道苫小牧市教育委員会教育部生涯学習課、奈良県宇陀市教育委員会事務局文化財課・広陵町教育委員会事務局文化財保存課、宮崎県都城市文化財課、埼玉県立さきたま史跡の博物館、秋田県埋蔵文化財センター、大阪歴史博物館などが参加しており、今後も増えていくと思われる。

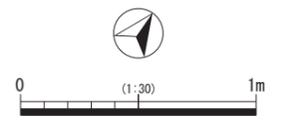
今回の調査では、第3章第1節で触れられている通り、日々刻々と遺構の崩壊が進んでいることから、調査と並行して、1. 炊事場の竈跡、2. 中隊事務所跡の竈跡の2か所をデジタルカメラ (Nikon 社 D5600 有効画素数: 2416 万画素)・レンズ (AF-P DX NIKKOR 18-55mm f/3.5-5.6G VR) を使用して複数方向からの撮影記録を行った。今回はあくまで測量作業がメインであり、写真記録は仕様からやや外れる補完作業であったことから、ハイエンドモデルではなく、汎用的なエントリーモデルでの記録に留めたことを記しておきたい。

1. 炊事場の竈跡については2月19日～3月10日にかけて撮影した347枚の写真、2. 中隊事務所跡の竈跡については3月4日・10日に撮影した55枚の写真を抽出して使用した。その後報告書作成作業に入る中で、先述のソフトウェア: Metashape Professional (Version 1.8.0) 及び PC: マウスコンピューター社 DAIV-NG5520 (OS: Windows CPU: Intel(R) Core(TM) i7-9750H、メモリ: 32GB グラフィックボード: NVIDIA GeForce GTX1650) を使用して解析処理を樋田がそれぞれ1晩程度行い、炊事場の竈跡については上記 PC スペックで足りない部分の処理は春日貴明 (株式会社四門 文化財事業部文化財調査課調査員) が補佐した。Metashape で作成した3次元モデルは、ply 形式で保存したのちに3D 点群処理ソフトウェアの CloudCompare (フランスの Daniel Girardeau-Montaut が開発したオープンソースソフトウェア、Version 2.11.3 (Anoia)) で任意で方向を決め、上面・正面・背面・側面の5方向の2次元データを TIFF 形式で出力した。これをさらに Adobe 社 Photoshop2021 (Version 22.5.5) を使用して展開図として配置したものである。

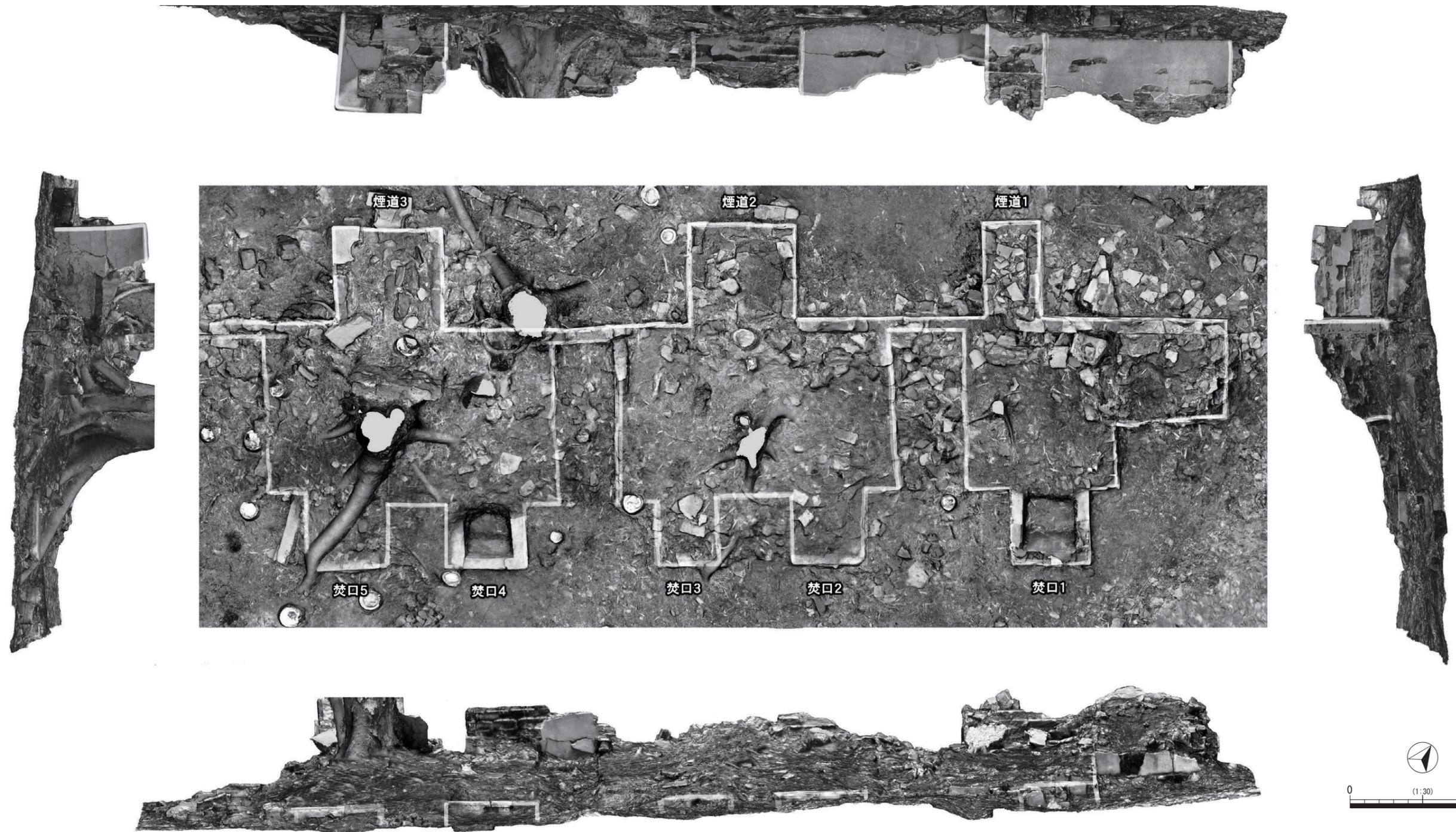
今回の3次元モデルは、この紙面での公開の目的の上では、結局展開図のような2次元モデルという手段になってしまったが、今後の展開方法として作った3次元モデルを利用し保存・活用を見据えて、3D プリンターでモデルを作ったり、復元モデルの検討や類例との比較などを行ったりするなど有効活用する方法はいくつも考えられる。行政だけでなく、研究機関・民間企業、さらに文化財に留まらない幅広い分野での協力体制が望まれる。



第60図 Metashape 作業画面



第 61 図 炊事場跡の竈跡 (3 次元モデル)



第61図のカラー画像をモノクロにし、  
かつ遺構の輪郭を強調する加工を施した

第62図 炊事場跡の竈跡 (3次元モデル)



第63図 中隊事務所跡の竈跡 (3次元モデル)

## 第4章 卷末資料

### <参考文献>

#### 埋蔵文化財関係

文化庁文化財部記念物課「第七章 その他の遺跡の調査 近代遺跡と発掘調査」『定本 発掘調査のてびきー各種遺跡調査編ー』2016 同成社  
埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会『埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について1』2017 文化庁  
埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会『埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について2』2017 文化庁  
埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会『埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について3』2020 文化庁

#### 周辺遺跡関係

- 『カプト山遺跡 第一次調査報告』1973 東海市教育委員会
  - 『カプト山遺跡 第二次調査報告』1974 東海市教育委員会
  - 『法秀古窯発掘調査報告書』1983 東海市教育委員会
  - 『菩薩遺跡』1987 東海市教育委員会
  - 『ト・メキ遺跡』1988 東海市教育委員会
- 藤井康隆「名古屋台地古墳時代の基礎資料(3)- 斎山古墳の埴輪 -」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第4号 2002 名古屋市見晴台考古資料館

#### 戦争遺跡(一般図書)関係

- ◎『高射砲陣地築設要領』1943 参謀本部
  - ◎『九九式八輻高射砲取扱指導ニ関スル説明書(照準具関係ヲ除ク)』1994 第一陸軍技術研究所
- 加藤金逸『大空に祈る 名古屋防空隊(高射砲隊)の足跡』1975 「大空に祈る」刊行委員会  
下志津(高射学校)修身会『高射戦史』1978 田中書店  
伊藤厚史「負の文化財-戦争遺跡の重要性」『文化財学論集』1994 文化財学論集刊行会  
池田陸介・伊藤厚史ほか『愛知の戦争遺跡ガイド 愛知・平和のための戦争展実行委員会』1997 戦争遺跡研究会  
伊藤厚史「愛知における戦争遺跡の調査」『日本考古学協会 1998年度沖縄大会 資料集』1998 日本考古学協会 1998年度沖縄大会実行委員会  
佐山二郎『大砲入門 陸軍兵器徹底研究』1999 光人社  
十菱駿武・菊池実『しらべる戦争遺跡の事典』2002 柏書房  
十菱駿武・菊池実『続 しらべる戦争遺跡の事典』2003 柏書房  
伊藤厚史「名古屋高射砲隊・てんりゅう隊陣地跡について」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第6号 2004 名古屋市見晴台考古資料館  
大坪宣雄「戦争遺跡」『平成15年度考古学入門講座 考古から近世・近代へのアプローチ-神奈川県内の遺跡を中心にして-』2004 神奈川県考古学会  
岩脇彰・山本達也「伊勢神宮と宇治山田防衛隊」『三重の戦争遺跡(増補改訂版)』2006 三重県歴史教育者協議会  
佐山二郎『日本陸軍の火砲 高射砲』2010 光人社  
伊藤厚史「見晴台遺跡北西部の溝状遺構と北東部の高射砲陣地跡」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第12号 2010 名古屋市見晴台考古資料館  
伊藤厚史「見晴台遺跡の高射砲陣地跡」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第13号 2011 名古屋市見晴台考古資料館  
伊藤厚史『学芸員と歩く 愛知・名古屋の戦争遺跡』2016 名古屋市教育委員会文化財保護室・六一書房  
清水啓介『東海軍管区の防空陣地』2017  
藤田昌雄『陸軍と厠 知られざる軍隊の衛生史』2018 潮書房光人社  
『明日へー今、伝えたい戦争のことー』2021 東海市の戦争を記録する会  
山本達也「三重の軍事遺跡8 伊勢市中村町の高射砲陣地について」『軍装操典』145号 2021 全日本軍装研究会  
田村栄一郎『愛知県の主な軍部隊と軍施設記録集』(発行年不明) 戦争遺跡研究会

#### 戦争遺跡(報告書)関係

- 伊藤厚史・池田陸介『南区見晴町 見晴台遺跡 第28次発掘調査報告書』1990 名古屋市見晴台考古資料館  
伊藤厚史『見晴台遺跡発掘調査報告書一近代編一』1992 名古屋市見晴台考古資料館  
尾野善裕・川合剛ほか『見晴台遺跡第30次発掘調査の記録』1992 名古屋市見晴台考古資料館  
伊藤正人・川合剛『見晴台遺跡第31次発掘調査の記録』1993 名古屋市見晴台考古資料館  
吉田格・浅見潤ほか『羽根沢台遺跡II』三鷹市埋蔵文化財調査報告第18集 1996 三鷹市教育委員会・三鷹市遺跡調査会  
伊藤正人『見晴台遺跡 第32・33次発掘調査の記録』1996 名古屋市見晴台考古資料館  
吉田格・小林謙一ほか『目黒区 大橋遺跡 上巻・下巻』1998 目黒区大橋遺跡調査会・大蔵省関東財務局  
村木誠・木村光一『見晴台遺跡 第34・36・37・38次発掘調査の記録』1999 名古屋市見晴台考古資料館
- 原田敏照『御崎谷遺跡・大床遺跡-明治時代の海軍望楼跡と昭和の防空監視哨跡の調査-』2001 鳥根県教育委員会
  - 伊藤徳広『御崎谷遺跡II-海軍望楼の官舎跡の調査-』2002 鳥根県教育委員会
  - 山田鉦一・木村有作『見晴台遺跡 第39・40・41次発掘調査の記録』2003 名古屋市見晴台考古資料館
  - 綱織茂・野澤則幸・伊藤厚史『見晴台遺跡 第42・43次発掘調査の記録』2005 名古屋市見晴台考古資料館
  - 小山仁示・伊藤厚史ほか『西淡路(国次)高射砲陣地調査報告書』2006 大阪市教育委員会
  - 田中大輔『ロタコ(御勅使河原飛行場跡) 滑走路跡および掩体壕跡の埋蔵文化財確認調査』2007 南アルプス市教育委員会
  - 出原恵三・松本安紀彦『上ノ村遺跡II 波介川河口導流事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III』2011 高知県教育委員会・財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター
  - 出原恵三『向山戦争遺跡 高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書IV(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書VII)』2012 高知県教

- 育委員会・財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター  
伊藤厚史『見晴台遺跡 第44・45・46・47・48次発掘調査の記録』2014 名古屋市見晴台考古資料館
- 柏山滋・谷仲俊雄『八軒台掩蔽壕』2014 株式会社ダイナミックビジネスサポート・石岡市教育委員会・株式会社東京航業研究所
  - 西村勝広『炉端遺跡C地区(三ツ池遺跡)発掘調査報告書』2018 各務原市埋蔵文化財調査センター
  - 永濱功治・阿比留士朗ほか『鹿児島(鶴丸)城跡 御楼門跡周辺』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第205集 2020 鹿児島県立埋蔵文化財センター
  - 田村規充 榎木敬太『名勝平和記念公園内遺跡 広島平和記念資料館本館下地点-広島市中区中島町所在-』公益財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第7集 2020 公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
  - 亀島慎吾・太田樹也ほか『中城御殿跡(首里高校内)・櫛園跡 -首里高校校舎改築に伴う発掘調査(2)-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第110集 2021 沖縄県立埋蔵文化財センター
  - 清水香ほか『第2章 新潟県五泉市新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター村松ステーション旧陸軍関連施設跡 第1次・第2次発掘調査報告』『新潟大学考古学研究室調査研究報告』第20号 2021 新潟大学考古学研究室
  - 伊藤厚史・三谷智広『見晴台遺跡発掘調査報告書(第49・50・51次)』2021 名古屋市教育委員会
  - 樋田泰之ほか『令和2年度太佐山高射砲陣地跡確認調査報告』2021 東海市教育委員会

## 遺物関係

- 『工業品日本標準規格：自第一号至第二十七号』岐阜県告示第百八十四號別冊 1927 岐阜県
- 商工省工業品規格統一調査會『JES日本標準規格(縮版) 第13輯』1940 工業調査協會
- 工業技術廳標準部『規格目録 日本規格 日本標準規格 臨時日本標準規格』1949 印刷局
- 桃井勝『工場記号番号-昭和23年岐阜県陶磁器工業協同組合員工場記号番号-』『多治見市文化財保護センター 研究紀要』第3号 1997 岐阜県多治見市教育委員会・多治見市文化財保護センター
- 桃井勝『昭和16年3月 岐阜県陶磁工業組合連合会所属生産者別標示記号(統制番号) 昭和23年1月 岐阜県陶磁器工業協同組合連合会所属工場記号番号』『美濃の古陶』美濃古窯研究会会報No.8 1999 美濃古窯研究会
- 財団法人岐阜県陶磁資料館『特別展 戦時中の統制したやきもの』2001 財団法人岐阜県陶磁資料館
- 桜井準也『ガラス瓶の考古学』2006 六一書房
- 桃井勝・河合竹彦ほか『秋谷コレクション 全国の戦時中のやきもの』2008 財団法人岐阜県陶磁資料館
- 砂田晋司『特別展 番号の付されたやきもの 戦時下の瑞浪窯業生産』2012 瑞浪市陶磁資料館
- 安藤貞勇『日中・第二次世界大戦における陶磁器代用品について』『研究紀要』第14号 2012 瑞浪市陶磁資料館
- 舟橋健『番号の付けられたやきもの～紀年銘のある製品と瑞浪の製品にみられる特徴～』『瑞浪市歴史資料集』第3集 2015 瑞浪市陶磁資料館
- 平成ボトル倶楽部『日本のレトロびん』2017 グラフィック社
- 秋谷茂行『陶磁器代用品の誕生と発展』『瑞浪市歴史資料集』第4集 2017 瑞浪市陶磁資料館

## 3次元活用関係

- 中園 聡ほか『季刊考古学 第140号 3D技術と考古学』2017 雄山閣

## 軍需工場関係

- 『Records of the U.S. Strategic Bombing Survey, Entry 47: Joint Target Group Air Target Analyses, 1944-1945』「Targets in Nagoya area. Targets in Nagoya area. Report No. 1-a(6), USSBS Index Section 7」国立国会図書館デジタルコレクション所蔵
- 『Records of the U.S. Strategic Bombing Survey, Entry 48: Air Objective Folders, 1942-1944』「No. 90.20: Nagoya area, Japan, 6 July 1944. Report No. 1-d(23), USSBS Index Section 7」国立国会図書館デジタルコレクション所蔵
- 『Army Map Service Topographic Map Series』「Japan City Plans, 1:12,500, U.S. Army Map Service, 1945-1946 Nagoya」テキサス大学図書館 Perry-Castañeda Library Map Collection 所蔵
- 金子力・清水啓介ほか『戦時下・愛知の諸記録2015』2015 あいち・平和のための戦争展実行委員会

## 飛行場関係

- 『Records of the U.S. Strategic Bombing Survey, Entry 46: Security-Classified Intelligence Library.1932-1947』「Translation No.29, 20 February 1945, Airways data: Chubu Chiho. Report No. 3-d(27), USSBS Index Section 6」国立国会図書館デジタルコレクション所蔵
- 『Records of the U.S. Strategic Bombing Survey, Entry 46: Security-Classified Intelligence Library.1932-1947』「Bulletin No.1-45, 15 January 1945, air information summary Nagoya and Osaka-Kobe. Report No. 3-h(9), USSBS Index Section 6」国立国会図書館デジタルコレクション所蔵

## 名古屋市電関係

- 桜井正彦・安藤実禅ほか『市営五十年史』1972 名古屋市交通局
- 徳田耕一『名古屋市電が走った街 今昔 電車道はデザイン都市に変貌 定点対比30年』1999 JTB出版

○印は全国遺跡報告総覧(奈良文化財研究所)のホームページからダウンロード可能なものです。url=<http://sitereports.nabunken.go.jp/ja>

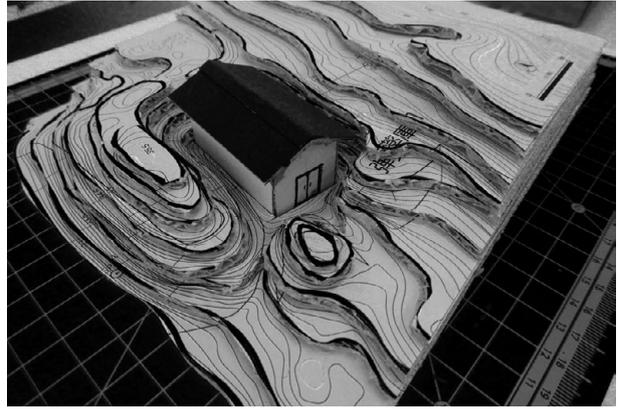
◎印は国立公文書館アジア歴史資料センターのホームページで閲覧可能なものです。url=<https://www.jacar.go.jp/>

●印は国立国会図書館デジタルコレクションのホームページで閲覧可能なものです。url=<https://dl.ndl.go.jp/>

▲印はテキサス大学オースティン校図書館のペリーニエダ図書館地図コレクションのホームページで閲覧可能なものです。url=<https://legacy.lib.utexas.edu/maps/ams/>



弾薬庫1の空撮画像（ドローンによる）



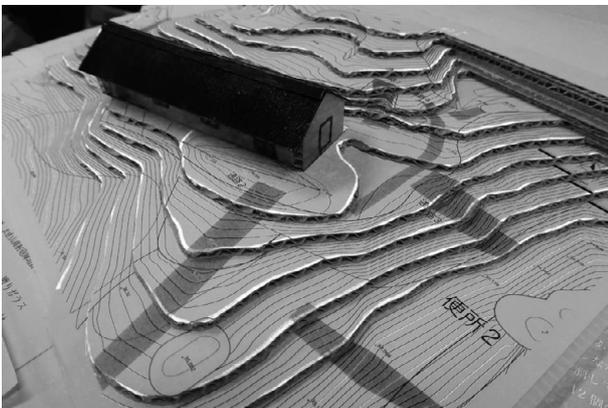
弾薬庫1の地形ジオラマ模型



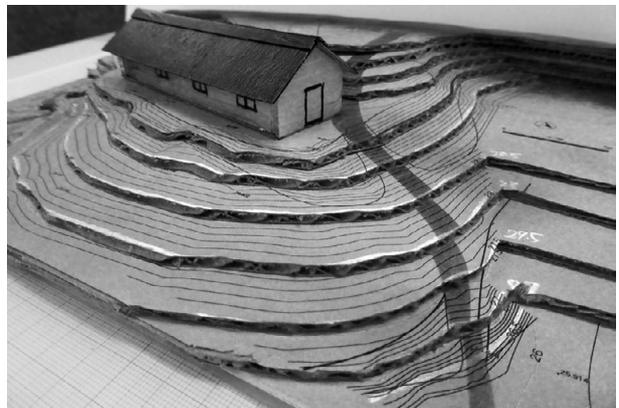
弾薬庫2の空撮画像（ドローンによる）



弾薬庫2の地形ジオラマ模型



兵舎跡2の地形ジオラマ模型



兵舎跡5の地形ジオラマ模型



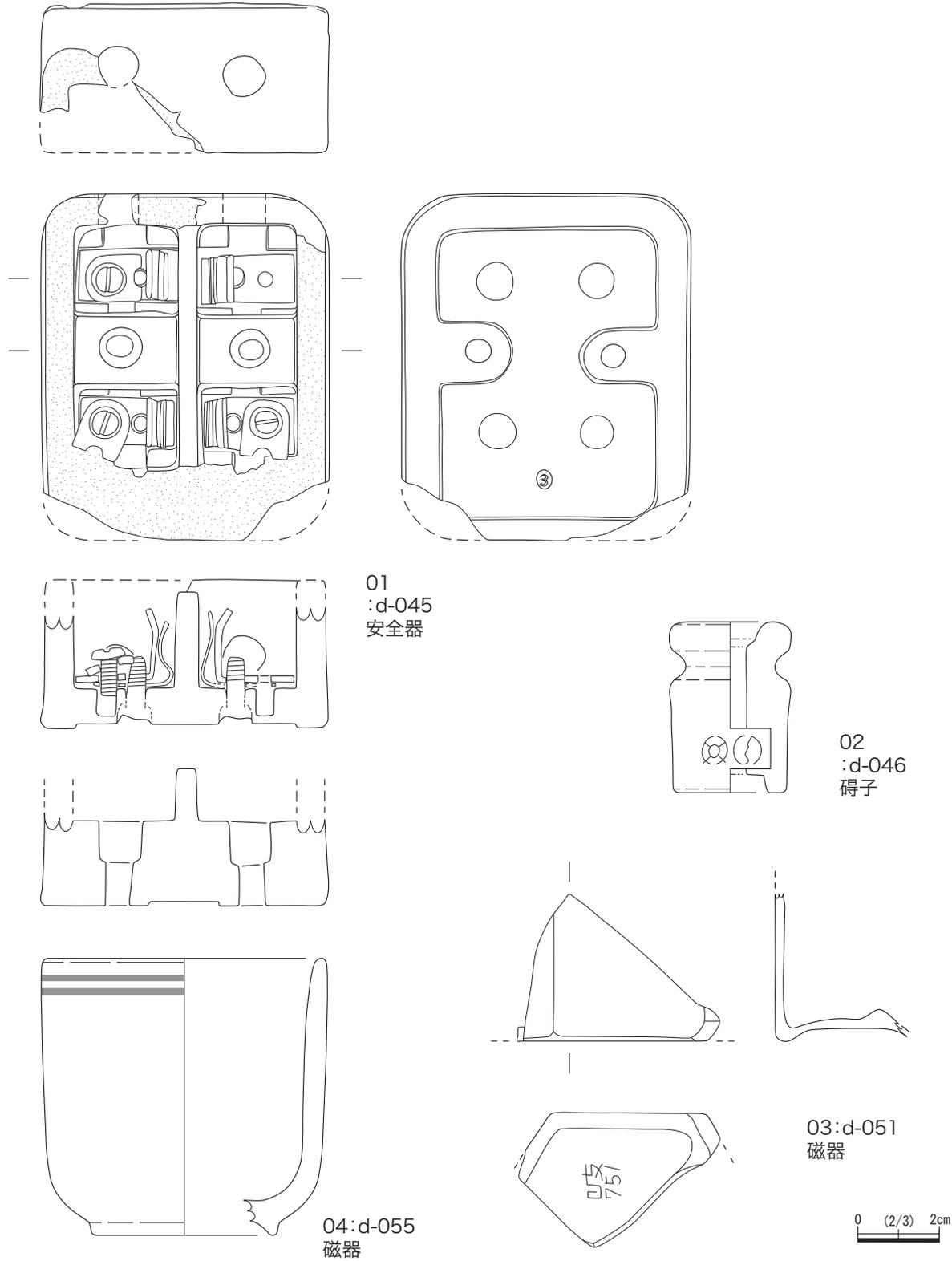
第3砲座の検出状況



高射砲砲座と掩体の復元ジオラマ

# 圖 版





01  
:d-045  
安全器

02  
:d-046  
碇子

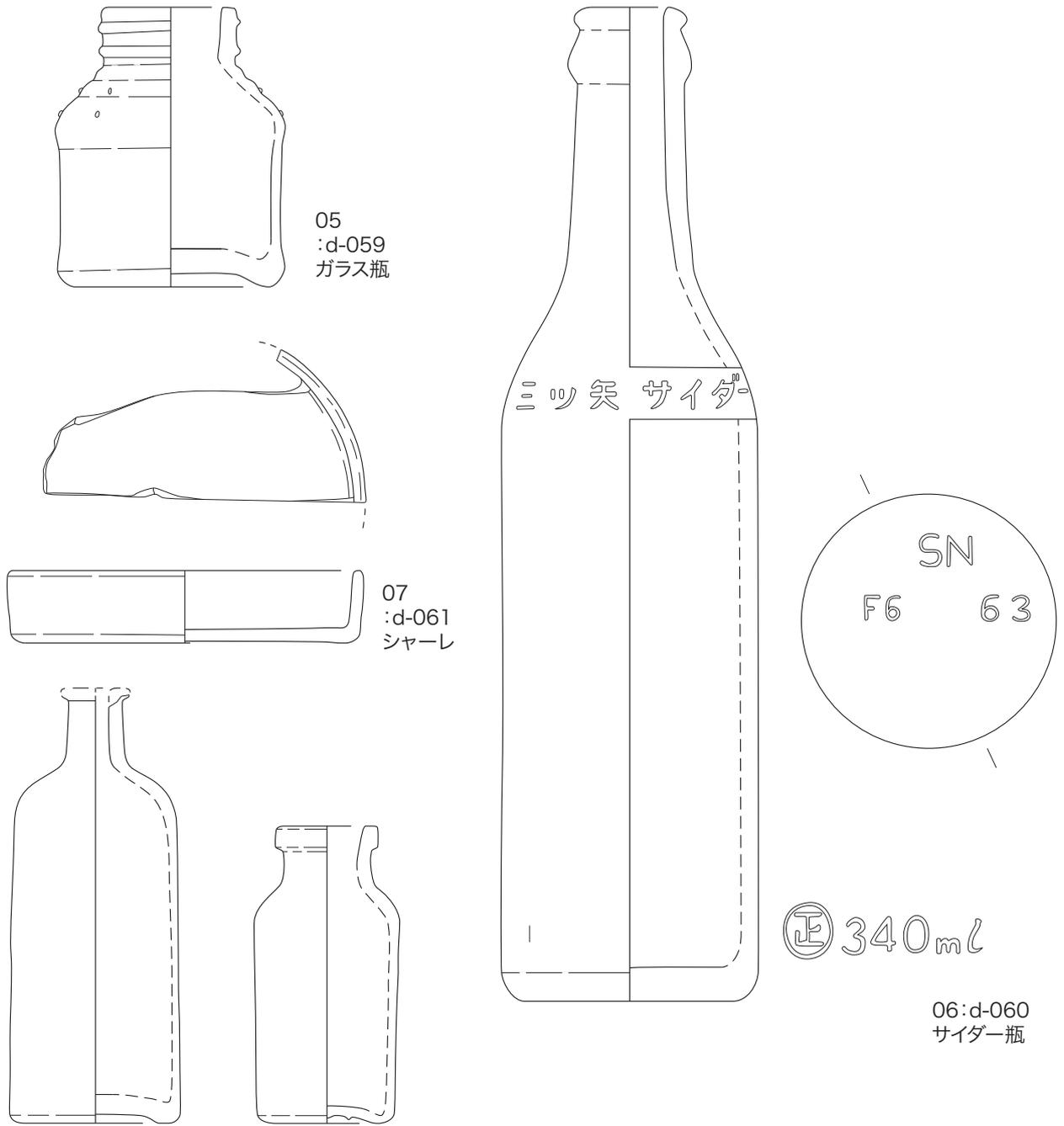
03:d-051  
磁器

04:d-055  
磁器

実測番号	ドットNo	遺構名	層位	材質	種別	長さ・幅・径等	厚さ	重量	備考
01	d-045	中隊事務所跡北西	表採	磁器・ 真鍮・鉄	安全器	ℓ = 8.5×7.1cm	3.7cm	229.7 g	本体磁器 ねじ(真鍮・鉄)・他金具(真鍮) ねじA(真鍮)=押さえ金の金具(ペラ=舌状)を固定(銅線を留めるため) ねじB(鉄製)=ねじの先端(ソケットの受金具を裏面から固定)裏面はねじ穴を白い樹脂で充填 裏面には「③」 小口側の側面にはコードを引き込む円孔が2つあり
02	d-046	中隊事務所跡	表採	磁器	碇子	ℓ = 4.2cm φ 3.0cm	2.8cm	50.9 g	絶縁用 施釉(透明) 青色のマーク
03	d-051	竈跡	表採	磁器	薬品容器	ℓ = 3.6cm φ 5.0cm	0.2cm	11.7 g	色調=灰白色(10Y 8/1) 底外面に暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)の記号「岐751」
04	d-055	竈跡	表採	磁器	湯呑茶碗	ℓ = 6.9cm φ 7.0cm	0.5cm	62.9 g	施釉(透明) 色調=灰白色(7.5Y 8/1) 口縁部外面に暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)の線2本

実測図(1)

図版第 2



05  
:d-059  
ガラス瓶

07  
:d-061  
シャーレ

08:d-062  
ガラス瓶



09:d-066  
ガラス瓶

06:d-060  
サイダー瓶

実測番号	ドットNo	遺構名	層位	材質	種別	長さ・幅・径等	厚さ	重量	備考
05	d-059	竈跡3(推定)	表採	ガラス	インク瓶	ℓ = 6.6cm φ 6.6cm	0.6cm	91.3 g	肩部に6方向の小突起 色調=明緑灰色(5G 7/1)
06	d-060	兵舎跡4	表採	ガラス	サイダー瓶	ℓ = 23.5cm φ 6.0cm	0.4cm	326.5 g	色調=明緑灰色(5G 7/1)「三ツ矢サイダー」「正 340ml」底面に「SN F6 63」
07	d-061	兵舎跡5	表採	ガラス	シャーレ	ℓ = 1.7cm φ 8.4cm	0.2cm	14.7 g	底部にスレ痕あり 色調=明緑灰色(7.5GY 8/1)
08	d-062	中隊事務所跡	表採	ガラス	薬品瓶	(ℓ = 10.1cm) φ 4.0cm	0.5cm	67.0 g	口縁部内面にスレ痕あり 底部アバタ状 色調=明緑灰色(5G 7/1)
09	d-066	兵舎跡6	表採	ガラス	薬品瓶	ℓ = 7.0cm φ 3.4cm	0.3cm	40.9 g	色調=赤褐色(5YR 4/6) 底面に「A」14」

実測図(2)



太佐山 南から



太佐山高射砲陣地 生活空間 全景 北から



中隊事務所跡 平坦地 2 ドローンからの俯瞰



中隊事務所跡 平坦地 2 西から



中隊事務所跡検出状況 東から



中隊事務所跡 竈跡(推定)検出状況 南から



中隊事務所跡 竈跡(推定)周辺検出状況 北から



中隊事務所跡 竈跡(推定)検出状況 北から



中隊事務所跡 コンクリート検出状況 南から



兵舎跡 1 検出状況 南西から



兵舎跡 1 検出状況 北西から



兵舎跡 2 上段 検出状況 北から



兵舎跡 2 検出状況 北東から



兵舎跡 3 盛土検出状況 南東から



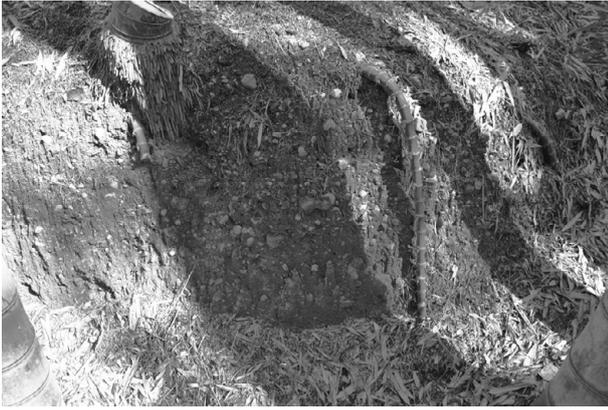
兵舎跡 3 盛土検出状況 北から



兵舎跡 4 検出状況 南から



兵舎跡 4 通路 2 検出状況 南から



兵舎跡 5 切土検出状況 南から



兵舎跡 5 コンクリート検出状況 南から



兵舎跡 6 検出状況 西から



兵舎跡 6 盛土検出状況 西から



被服庫跡 検出状況 南から



被服庫跡 盛土検出状況 西から



弾薬庫 2 検出状況 ドローンからの俯瞰



弾薬庫 2 盛土検出状況 西から



竈跡 検出状況 東から



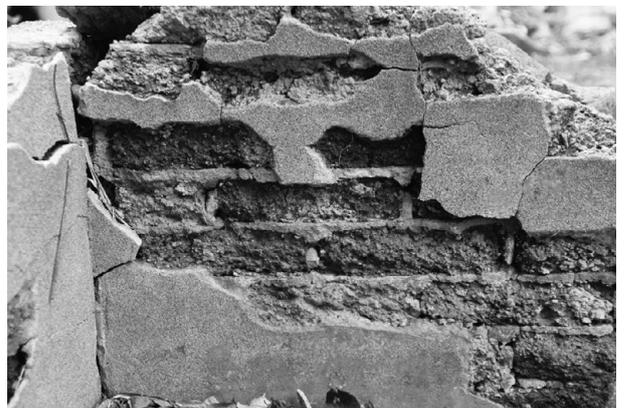
竈跡 d-054 出土状況 南から



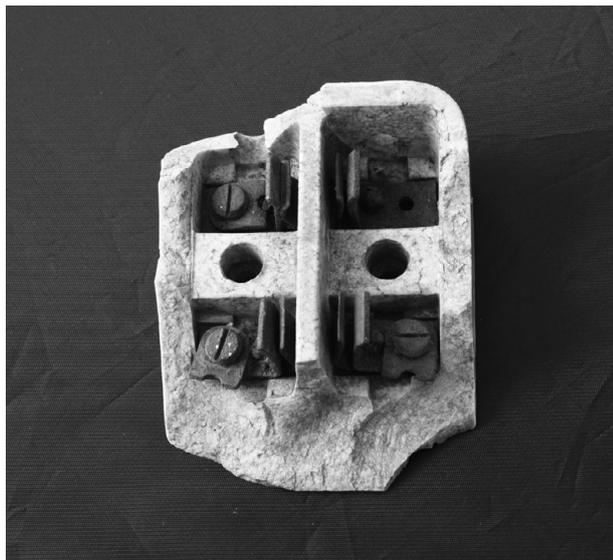
竈跡 検出状況 南東から



竈跡 検出状況 西から



竈跡 検出状況 北東から



01 安全器 表



01 安全器 裏



02 罫子



03 磁器



04 磁器



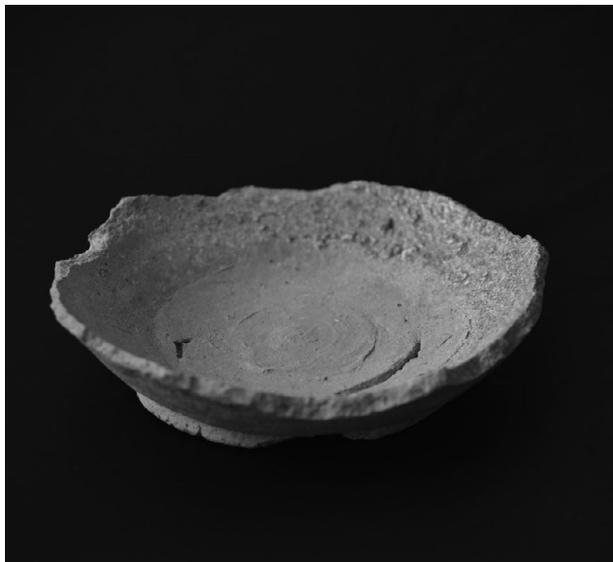
05 インク瓶



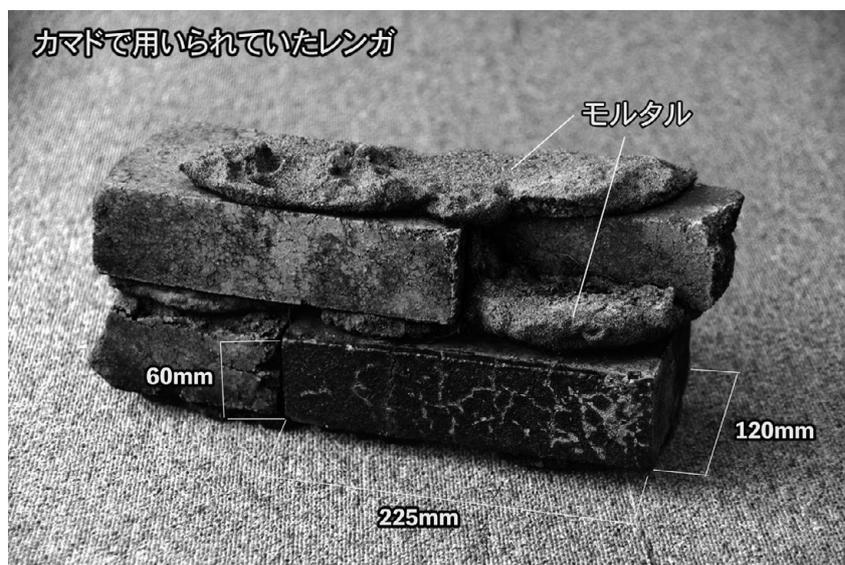
08 ガラス瓶



09 ガラス瓶



実測図非掲載遺物 山茶碗 (井戸 2 での表採)



実測図非掲載遺物 レンガ (炊事場跡での表採)

報告書抄録

ふりがな	れいわ2ねんどたぎやまこうしゃほうじんちあとかくにんちようさほうこく2							
書名	令和2年度太佐山高射砲陣地跡確認調査報告2							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	樋田泰之・宮澤浩司・坂野俊哉							
編集機関	株式会社四門名古屋支店							
所在地	〒453-0014愛知県名古屋市中村区則武1丁目19番地13 KSビル Tel052-451-5531							
発行機関	愛知県東海市教育委員会							
所在地	〒476-8601愛知県東海市中央町一丁目1番地 Tel052-603-2211							
発行年月日	2022年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'''	東経 °'''	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たぎやまこうしゃほう 太佐山高射砲 じんちあと 陣地跡	あいちけんとうかいし 愛知県東海市 なわまち たぎやま 名和町太佐山 げんだな 膳棚	23222	-	35° 03' 15"	136° 55' 30"	2021年2月1日 ～ 2021年3月9日	10,400㎡	公園整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
太佐山高射砲 陣地跡	軍事施設	近現代		兵舎跡、 炊事場跡		金属製品・磁器・ ガラス製品		陣地に伴う生活空間 のおおよその範囲が 特定
要約	<p>太平洋戦争末期に名古屋市南部の防空のために築かれた高射砲陣地の一つである。東海4県で80余り構築された高射砲陣地の中でも戦闘空間と生活空間を両方を兼ね備え、かつ各遺構が以下のような点において良好な状態で残存していることが確認された。</p> <p>今回は生活空間の範囲把握のための測量作業を行ない、以下のことが判明した。</p> <p>①中隊事務所跡、兵舎跡6か所、被服庫跡とされる平坦地の規模が把握できたこと、②中隊事務所跡、炊事場跡で竈跡が確認できたこと、③表面採集ではあるが建物に関わる電気器具の一部や生活道具が遺物として確認できたこと。④太佐山とよばれる標高45mの狭小な丘陵を大規模に、しかも短期間に造成工事を行ない、平坦面を切土と盛土によって造りだし、その上に兵舎を造っていること、⑤戦後76年を経て遺構が自然的・人為的に崩壊がかなり進んでいることが判明した。</p> <p>高射砲陣地の全体構造を知ることのできる希少な遺跡である。</p>							

---

愛知県東海市  
令和 2 年度 (2020年度)  
太佐山高射砲陣地跡確認調査報告 2

令和 4 年 3 月 18 日印刷

令和 4 年 3 月 31 日発行

編 集 株式会社 四門 名古屋支店  
〒453-0014 愛知県名古屋市中村区則武1-19-13  
TEL 052-451-5531

発 行 愛知県東海市教育委員会  
〒476-8601 愛知県東海市中央町一丁目 1 番地  
TEL 052-603-2211・0562-33-1111 (代表)

印刷・製本 西濃印刷 株式会社  
〒500-8074 岐阜県岐阜市七軒町15番地  
TEL 058-263-4101

---